

宮城県多賀城跡調査研究所年報1978

# 多賀城跡

昭和53年度発掘調査概報

宮城県教育委員会  
宮城県多賀城跡調査研究所

## 序 文

昭和 53 年度の調査は、多賀城跡調査研究第 2 次 5 か年計画の最終年次にあたり、多賀城跡政庁北側の大畠地区を対象とした第 32 次調査と、多賀城跡西南部の五万崎地区を対象とした第 33 次調査とを実施した。両次とも昨年度の第 30 次・第 31 次調査を引き継いだものである。

この結果、第 32 次調査では政庁北方官衙建物群等のあり方が明確になった。一方第 33 次調査では、外郭西門跡にとりつく築地の基礎地業の他、数棟の建物群が確認された。また、西辺築地の南端で、根石 2 ヶが発見され、築地に直接とりつく西門のあった時期があることも予想され、今後の調査にその解明が期待される。

本調査概報にはそれらの成果をやゝ詳細に盛りこんだ。本書が東北古代史の解明の一助として活用されるならば幸である。

刊行にあたり、日頃から種々御指導いただいている指導委員会の諸先生をはじめ、文化庁、多賀城市の関係各位及び地元の諸氏並に作業員の方々に深く感謝の意を表する。なお、去る 4 月、文化財保護課へ栄転のため研究所を去られた氏家和典前所長の、これまでの並々ならぬ御尽力、御指導に対しては、所員一同とともに厚く御礼を申し上げる次第である。

昭和 54 年 3 月 15 日

宮城県多賀城跡調査研究所長

後 藤 勝 彦

# 目 次

I 調査計画	
II 第 32 次発掘調査	3
1 調査経過	3
2 層序	5
3 発見遺構	6
4 出土遺物	17
5 考察	40
III 第 33 次発掘調査	45
1 調査経過	45
2 発見遺構	48
3 出土遺物	59
4 考察	87
IV 環境整備	90
1 現在までの経過	90
2 既整備地区の実施概要	90
3 外郭東南隅地区の環境整備	94
4 今後の課題	100
V 付章	
1 第 2 次 5か年計画の総括	101
2 調査成果の普及と関連研究活動	106

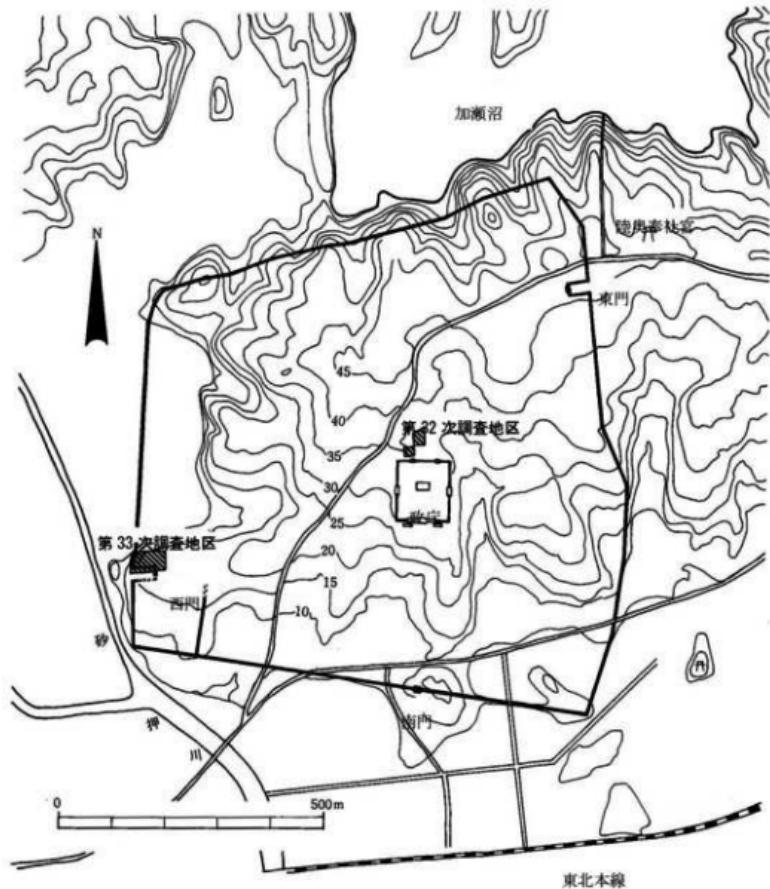
本報告の記載方法は年報 1977・昭和 52 年度発掘調査概報と同様である。

この年報の執筆、編集には、当研究所の後藤勝彦、桑原滋郎、進藤秋輝、白鳥良一、鎌田俊昭、高野芳宏、古川雅清、平川南があたった。なお、東北歴史資料館の藤沼邦彦、村山斌夫、岡村道雄氏には多大の御協力をいただいた。

# I 調査計画

昭和 53 年度の発掘調査は、昭和 48 年 6 月 2 日の第 8 回多賀城跡調査研究指導委員会で承認された発掘調査第 2 次 5 か年計画に基づく最終年次の事業にあたる。

発掘調査事業費については、さいわい、宮城県の要求通りの国庫補助金の内示(総経費 2,500 万円のうち、国庫補助金 1,250 万円)を得たので、次のように実施計画を立案した(表 1)。



第 1 図 昭和 53 年度発掘調査地区

表1 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査面積	期間
第32次	政庁北方地域(字大畠)	3,300m <sup>2</sup> (1000坪)	4月~10月
第33次			

このうち、第32次調査は政庁地区の北に隣接する多賀城市市川字大畠地区を対象とした調査である。昨年度の第31次調査では、この地区の東南部分を調査し、政庁地区寄りの南半部と北半部では性格の異なる官衙が存在することを把握した。しかし、調査面積が少ないため、この官衙の構成を十分に把握できなかった。そこで、第31次調査の成果を踏まえて、この官衙の構成、範囲を把握する調査を行った。その結果、第31次調査で検出したSA1012柱列・SB1013は東西に延びる1間×8間以上のSB1013建物跡になり、西でSB553建物跡にとりつき、SB551建物跡を囲むものになった。SB1013建物跡の北で竪穴住居跡が発見され、SB1013建物跡の北の遺構群はもっと西に広がる見通しを得た。

一方、第33次調査は多賀城市市川字五万崎地区を対象とした調査である。これまでの同地区的発掘調査(第28・29・30次)の結果、外郭西門跡が発見され、その位置が残存する外郭西辺築地跡より約35m内に入り、その状況は外郭東門跡と酷似していた。さらに門より東に通ずる道路遺構の北には平安時代前半の、南には平安時代後半の官衙が存在することが知られていた。そこで、第33次調査では、門と外郭西辺築地の取付き方、及び、道路北の官衙の西限を把握することを目的に調査を実施した。その結果、西門にとりつく築地の基礎事業を発見した。さらに調査地区の東には柱穴が全くないため、さきの官衙はこれより西には延びないと判断された。

昭和53年度発掘調査の実施状況はつぎのとおりである(表2)。

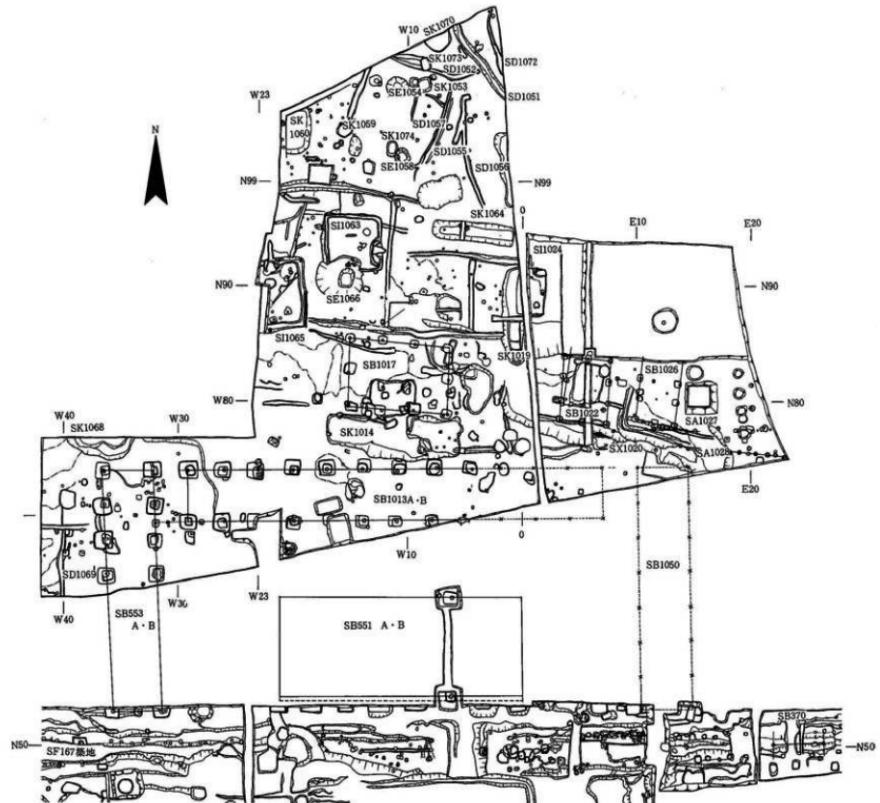
表2 発掘調査実施状況表

調査次数	調査地区	調査面積	期間
第32次	政庁北方地域(字大畠)	850 m <sup>2</sup> (258坪)	4月7日~7月19日
第33次	外郭西地域南部(字五万崎)	1,800 m <sup>2</sup> (545坪)	7月18日~11月10日

その他、年間を通して、出土遺物の整理を行った。

なお、発掘調査事業と並行して、多賀城南門周辺地区及び外郭南辺築地(鴻の池地区)の環境整備事業と補足工事(総経費1,600万円うち、国庫補助800万円)を行った。

また多賀城東外郭線南東隅に遺存する材木列の保存のための水質・土質・気象関係の調査を行った。



第2図 第32次発掘調査全体図

## II 第32次発掘調査

### 1 調査経過

第32次発掘調査は、多賀城市市川字大畑1の1、2、4の2、4の4、4の7、5の1、7の1番地の約850m<sup>2</sup>を対象として実施した。この地域は政庁の北に隣接し、発掘区中央部に東から入る谷に沿ってゆるやかに傾斜している。

この地域については、昭和48年度に実施した第19次調査の際に、政庁北辺築地の北側にも建物跡が確認されていたので官衙ブロックの存在が予想された(註2)。そこで、昨年度の第31次調査は政庁北方地域における遺構のあり方、使われ方、そしてその時期などを究明する目的をもって行われた。その結果、主に第III期以降の掘立柱建物跡、掘立柱列跡、竪穴住居跡、土壙跡、溝跡、整地層などが検出された。特にSB1012 建物跡、SA1013 柱列跡としたものはさらに西側にのびていくことが予想された。しかし、発掘区の西側や谷付近とその北側については、調査期間などの関係から後日を期すことにした(註3)。

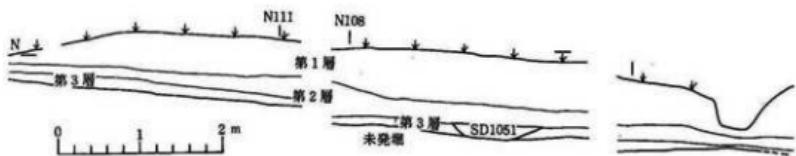
このように、第31次調査では当初の目的を必ずしも達成できなかった。そこで、今回は第31次調査に引きつづき谷付近とその北側を調査し、また新たに西区を設定してSB1012、SA1013としたものの構造を究明することにした。

発掘調査に先立ち、4月7・8日に測量の基準点を移動し、発掘区を設定した。煩雑さを避けるためにN99ライン以北を北区、N99ラインからN87ラインまでを南区、さらにW23ライン以西を西区として説明したい(第2図)。

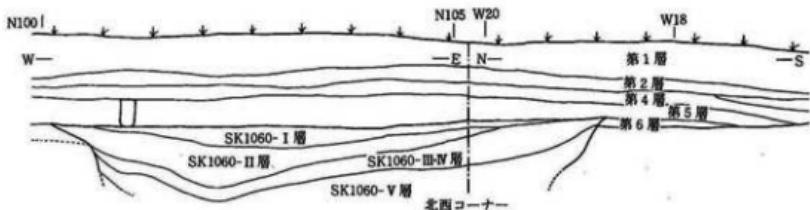
表土の除去は、まず4月10日から14日にかけて西区の南側より行い、ついで15日から5月12日にかけて南区の東から西へ、さらに西区の東から西へと行った。表土除去と併行して遺構の検出に着手した。

西区の精査は4月21日から28日まで行った。この区では、表土直下は直に地山であり、第31次調査の際、SB1012掘立柱建物跡、SA1013掘立柱列跡としたものの柱穴が東からこの区まで並んでくることが判明した。その結果、これらは別個のものではなく、南北1間、東西8間以上の1つの建物跡としてまとまりをもつことが明らかになった。さらに、SB1013の西側には梁行1間の南北棟が検出された。これは第19次調査で発見したSB553建物跡の北半部にあたり、桁行は7間であることが明らかになった。また、西区北西隅には若干の堆積層とSK1068土壙跡が検出された。6月5・6日に写真撮影を行ったのちに実測用の造り方を設定し、14日から20日にかけて平面実測、およびレベル測定を行った。さらに、28日から7月4日にかけて柱穴の断ち割りなどの補足調査を行った。

南区については、昨年の第31次調査で表土を除去したに留まったので、5月13日から16日にかけて、まずその面まで掘り下がったところ、表土下は須恵系土器片を多量に含む黒褐色土層(第2層)であった。これは第31次調査の第V層に相当する土層である。この第2層は西側で薄く、東側にゆくにしたがって厚くなっている。北区ではやや黒みを増しながら全城に堆積している。第2層上面では、13日から17日にかけてSK1053土壤跡やSD1075溝跡、そのほかに多数の小ピットなどを検出した。いずれも埋土には須恵系土器が含まれている。しかし、建物跡などとしてのまとまりがないので、実測を行ったのちに18日から23日にかけて本層を除去したところ、下層には第3層の暗褐色土層、第4層の灰茶褐色土層が確認された。これらの層は南区の西側を除いてほぼ全域に認められるが、まとまりをもつ遺構は発見できなかったので、第2層と同様に実測のちこれを除去した(5月26日～6月2日)。4層下には第6層が南区南端を除いた全域に発見され、その上面に部分的に第5層が堆積していた。この段階で発掘区全域を検討したところ、第6層上面にSK1060土壤跡、SE1066井戸跡、SI1063、SI1065竪穴住居跡などの存在が確認された。ここで、遺構は複雑な状況を呈していたので、6月2日から12日にかけて精査に先立ち実測の遣り方を設定し、平面実測を行ったのち、精査にとりかかった。そして、まずSE1066井戸跡の埋土を除去し、断面図を作成したのちに写真撮影を行った。なお、埋土第IV層出土の竹カゴについては、実測したのちに樹脂加工を施して取り上げた(6月5日～10日)。



第3図 南・北区東壁層序断面図



第4図 北区北壁・西壁層序断面図

6月14日から7月3日にかけて南区東半部の第6層を部分的に除去しながら、SK1060、SI1063、SI1065の精査を行った。

第6層以下には第7・8層が全域に堆積しているものと見うけられたが、調査期間の関係からそれらの調査は断念した。

7月4日から19日にかけて、発掘区全域の写真撮影と補足調査を行い、一部を埋戻して器材を撤収し、第32次調査を完了した。

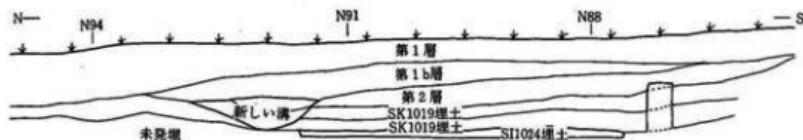
註1 『多賀城跡－昭和47年度発掘調査概報』 宮城県多賀城跡調査研究所 1972

註2 『多賀城跡－昭和48年度発掘調査概報』 宮城県多賀城跡調査研究所 1973

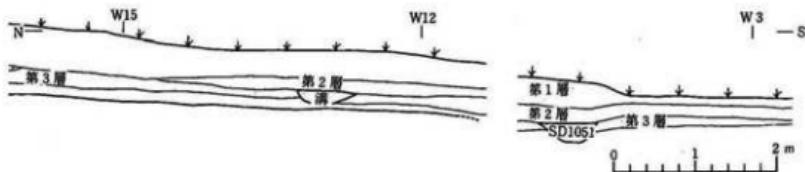
註3 『多賀城跡－昭和52年度発掘調査概報』 宮城県多賀城跡調査研究所 1977

## 2 層序

南区と北区は東から入る谷に沿って傾斜している。そのため、発掘区中央部付近を中心としていくつかの堆積層がある。各部分で堆積の状況は異なるが、発掘区北壁には全体的な層序関係が示されている。しかし第4図では第6層以下について、必ずしも明瞭な堆積状況が示されていない。



第3図 南・北区東壁層序断面図



第4図 北区北壁・西壁層序断面図

第1層 耕作土(表土) 褐色土で近世～現代の陶器、瓦などを出土している。

第2層 黒褐色土 多量の須恵系土器を含む自然堆積層である。南区に比べて北区の方が黒い。また、南区の西側や南端では部分的にしか認められない。第31次調査時に第V層とした土層に相当する。

第3層 暗褐色土 多量の須恵系土器を含んでいる。

第4層 灰茶褐色土 須恵系土器のほかに炭化物や土器碎片を含み、固くしまっている。

第5層 灰茶褐色土 遺物の在り方は第4層と似るが、黄褐色の地山ブロックをまばらに含んでいる。主に北区に見られ、SK1060 土壌を覆っている。

第6層 灰色がかった黄茶褐色土 地山ブロックを多量に含んでいる。上面では SI1063、SI1065 壓穴住居跡、SK1060 土壌跡、SE1066 井戸跡などが検出されている。

第7層 黄色みの強い灰茶褐色土

第8層 茶褐色土 灰茶褐色土がまばらに入っている。

以下、地山までの層序については未発掘のため、詳細は知りえない。

西区は南・北区と異なり、大半は第1層下が地山である。しかし、西端ではいくつかの堆積層が認められる。すなわち、第2層は近世以降の旧表土である。第3層は灰白色土が主体であるが、混りによってa、bの亜層に分けられる。aは暗灰褐色土、bは灰茶褐色土である。さらに第4層はやや固い黄褐色土で地山に至る。

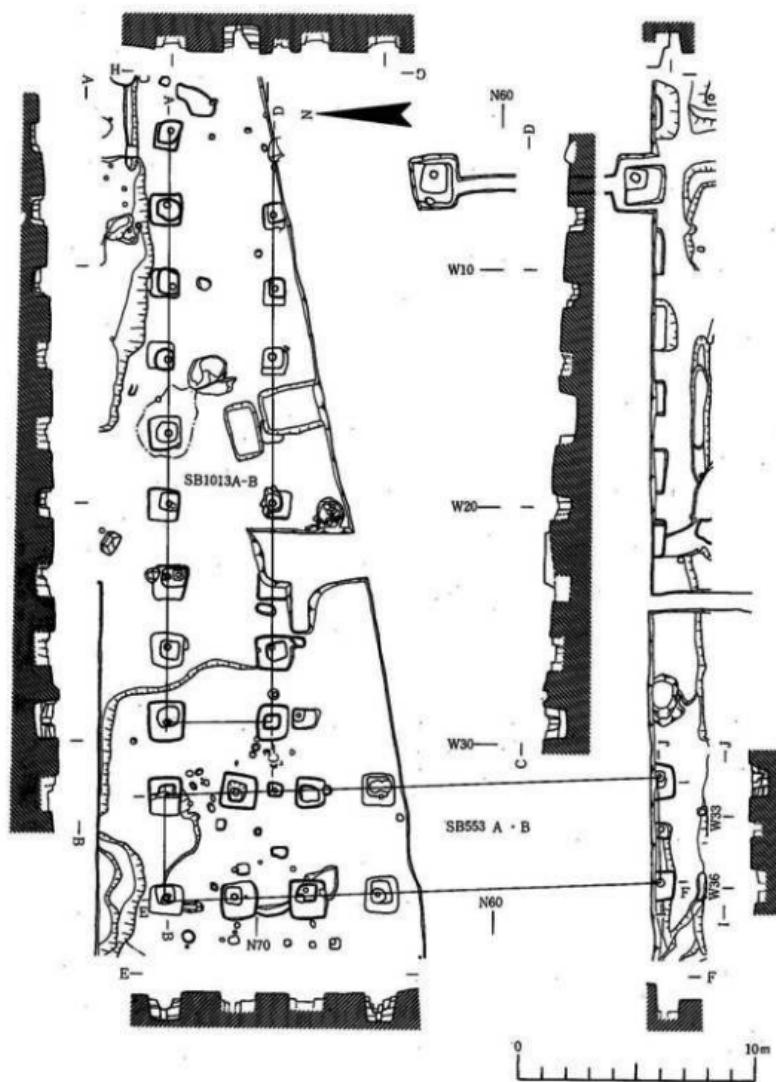
### 3 発見遺構

第32次調査で検出した古代の遺構は、掘立柱建物跡2、竪穴住居跡3、井戸跡3、土壌跡9、溝跡9などである。以下、順を追って記述する。

#### (1) SB1013違物跡 (第5・6図)

SB1013建物跡は、第31次調査においてSB1012建物跡とSA1013柱列跡としたものが今回その西側を調査した結果、これらは別個のものではなく、東西8間以上、南北1間の掘立柱の東西棟にまとまることが判明したものである。柱穴は地山面から検出された。この建物は新旧2時期のものが重複しており、古い方をSB1013-A、新しい方をSB1013-Bとする。

SB1013-Aの柱穴はいずれもBにより底面近くまで壊されているが、柱痕跡がわずかに残っており、柱位置を推定できる。それによると、柱位置はほぼSB1013-Bと一致している。建物方向は発掘基準線にほぼ一致し、柱間寸法は桁行が約3m等間、梁行4.5mとなる。柱穴は1辺1.4m前後の方形で、最も良く残っている西端では約1mの深さをも

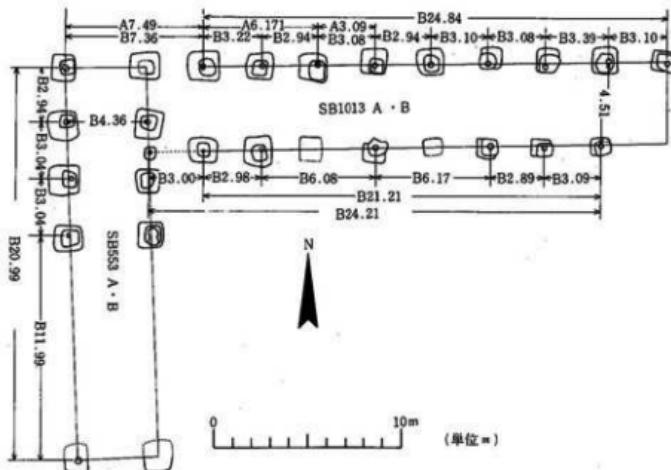


第5図 SB553、SB1013建物跡

つ。壁は底部がわずかにせばまるが、ほぼ垂直に掘られており、埋土は約 20 cmずつ互層につき込まれている。柱は柱痕から径 30 cm の丸柱が使われたことがわかる。柱穴埋土から第Ⅲ期の平瓦が出土しており、第Ⅲ期以降の建物跡であることが知られる。

**SB1013-B** は、**SB1013-A** と同位置に建て替えられた建物である。柱痕跡がすべての柱穴で見つかっている。建物方向は北側柱列で、発掘基準線に対して東が 0° 02' 北に偏している。柱間寸法は、桁行の北側柱列西から  $3.22+2.94+3.08+2.94+3.10+3.08+3.39+3.10$ m である。梁行の柱間寸法は、それぞれ 10 cm 前後の誤差があるが、平均 4.5m である。すなわち、本建物は桁行 8 間で 10 尺等間、梁行 1 間(15 尺)に計画されたものであろう。柱穴は 1 辺 0.8~1.0m で、壁は斜めに掘られたため上方が開いている。また柱穴は一気に埋められており、埋土には明確な互層は認められない。柱は柱痕から径 25~30 cm の丸柱を用いたことがわかる。柱穴埋土からは、第Ⅰ・Ⅱ期の瓦や系切りの土師器壙が出土している。

なお、この建物跡の残る遺構面はゆるやかにではあるが東に傾斜している。そのため柱穴は東にゆくに従って残存状況が悪くなっている。東端の柱穴は北側柱列で 30 cm を残すにすぎず、また南側柱列ではすでに削平されているのである。ここでは桁行 8 間と記した



第 6 図 SB553、SB1013 建物跡模式図

が、この SB1013 建物は本来さらに東にのびており、それが削平されてしまった可能性も考えられるのである。

## (2) SB553 建物跡（第 5・6 図）

これは SB1013 建物の西にあり、地山面より検出されている。南北棟では桁行 7 間(21m) 梁行 1 間(4.5m) の規模をもつ。SB553 は SB1013 と同様、新旧 2 時期の柱穴が同位置に重複している。古い方を SB553-A、新しい方を SB553-B とする。

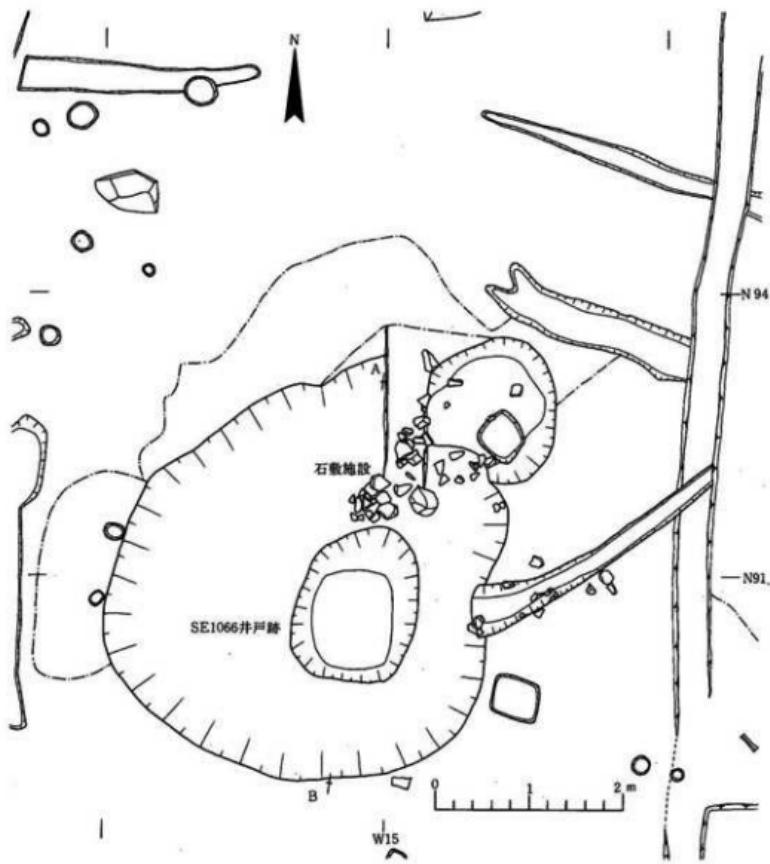
SB553-A の柱穴は、いずれも SB553-B により底面近くまで壊されているが、一部に柱痕跡が明瞭に残っている。それによると、柱位置はほぼ SB553-B と同じで、柱間寸法は桁行約 3m 等間、梁行 4.5m であり、建物方向は発掘基準線に対し、北で  $2^{\circ} 22'$  傾している。柱穴は 1 辺 1.5m 前後の方形で、最も良く残っている東側柱列北から 2 番目、および西側柱列北から 4 番目の柱穴では 1.4m の深さをもつ。壁は底部がわずかにせばまるが、ほぼ垂直に掘られており、埋土は 10~30cm の厚さで互層につき込まれている。柱は柱痕跡から径 30cm の丸柱が使われていた。柱穴埋土から第 I・II 期の瓦が出土している。

SB553-B は、柱痕跡が必ずしもすべての柱穴で検出されたわけではないが、柱間寸法は西側柱列北から  $2.94+3.04+3.04+11.99$ (4 間分)m、梁行は北から 2 番目で 4.36m となる。おそらく、桁行が 10 尺等間に、梁行が 15 尺に計画されたものであろう。建物方向は西側柱列で、発掘基準線に対し北がおよそ  $1^{\circ} 50'$  西に傾している。柱穴は 1 辺 0.7~0.9m で、壁は上方が開く形に掘られている。埋土は一手で、明確な互層にはなっていない。柱は柱痕跡から径 25~30cm の丸柱が使われていた。柱穴埋土から第 II 期の焼瓦などが出土している。

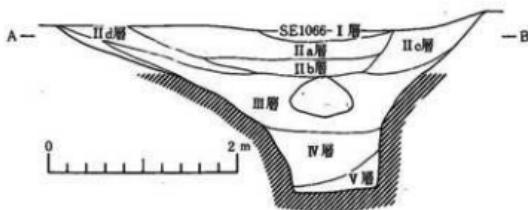
なお、先の第 19 次調査で、これを梁行 2 間としたが、北妻で大棟下の柱穴が検出されなかったことから、梁行 1 間の建物と訂正する。また、時期を第 III 期として 1 時期に限定したが、今回検出した柱穴に重複があったので、そのように限定できないことがわかった。合わせて訂正しておきたい。

## (3) SE1066 井戸跡（第 7・8 図）

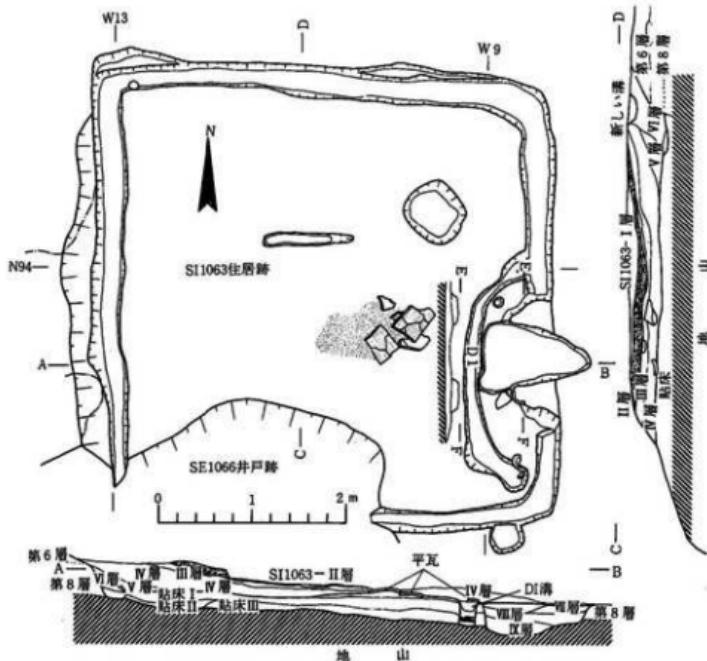
SE1066 井戸跡は南区の西寄りに位置し、第 6 層上面で検出され、同層にある SI1063 住居跡を切っている。壁は 1.1m の深さまでゆるやかに傾斜し、半ばから垂直に落ち、80cm で底部にいたる。北面のゆるやかに傾斜した所には、東西約 2.5m、南北 1.0m にわたって拳大から 30cm 位の礫と瓦を敷きつめた施設がある。最も深いところで約 1.9m を計る。埋土は第 I 層から第 V 層まで分けられる。第 I 層は地山小ブロック混りの灰黄褐色砂質土、第 II 層は暗灰褐色粘質土で、a~d の亜層に分れる。第 III 層は 50cm 前後の礫を含む黒褐色粘質土、第 IV 層は白色の石灰質結晶混りの黒褐色砂質土で、第 III 層に似るが、砂層と粘土層が互層になっている。第 V 層は灰緑色粘質土である。第 III~V 層は人為的な一手の埋土



第7図 SE1066 井戸跡 SX1071 石敷



第8図 SE1066 井戸跡断面図

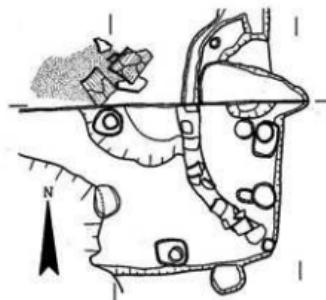


第9図 SI1063 住居

であり、第I、II層は自然堆積層である。遺物は各層から多量に出土しているが、特に各種の須恵系土器が多く、セットとしてとらえられる(第16~18図)。また、第IV層からは竹製のカゴが発見された(第19図)。

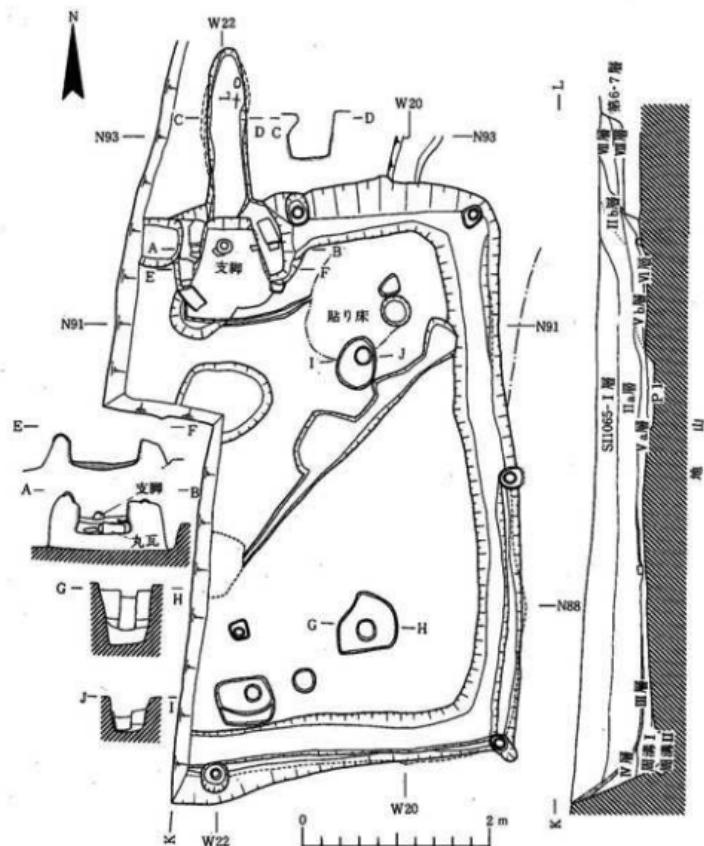
#### (4) SI1063 住居跡 (第9・10図)

SI1063 住居跡は第6層上面で検出され、SE1066 井戸跡により、南西部が壊されている。北壁と西壁は残存状況も良いが、東壁はほとんど削平されている。平面形は南北4.9m、東西4.6mのほぼ正方形に近い。壁は最も良く残っている西壁では上半がややゆるやかで下半に至ると垂直に立ち、約35cmの高さをもつ。床面は全面に20cm前後の土を入れて貼



第10図 SI1063 住居跡断ち割り図

り床としている。貼り床は詳細にみると3層に分れる。上から貼り床Ⅰは地山小ブロックを少量含んだ黄褐色土、Ⅱは同質の灰黄褐色土、Ⅲは地山小粒子をほとんど含まない茶褐色土である。周溝は巾25~35cm、深さ10cmほどのU字形を呈している。周溝の埋土はやや砂質の暗褐色土で、一手に埋められている。周溝内には明確な柱穴や壁材は発見されていない。カマドは東壁中央やや南寄りにあり、削平が著しく袖部をわずかに残しているにすぎない。カマドを付設すべき箇所をあらかじめ径80cm、深さ10cmほどに掘り下げたのちカマドを設けている。また、カマドの前面には弧状の溝(D-1溝)がある。この溝全体には底面より数cm上位に平瓦が敷かれている。他に、カマドの前面に瓦を伴った焼面があり、その北には径60cm前後、深さ20cmのピットがある。なお、周溝底面や床面下



第11図 SI1065 住居跡

からは、部分的にいくつかの柱穴やピットが検出されたが、規則性がなく、この住居跡に伴うものとは考えられない。

S11063 の構築の工程を復原的に述べれば次のようになる。

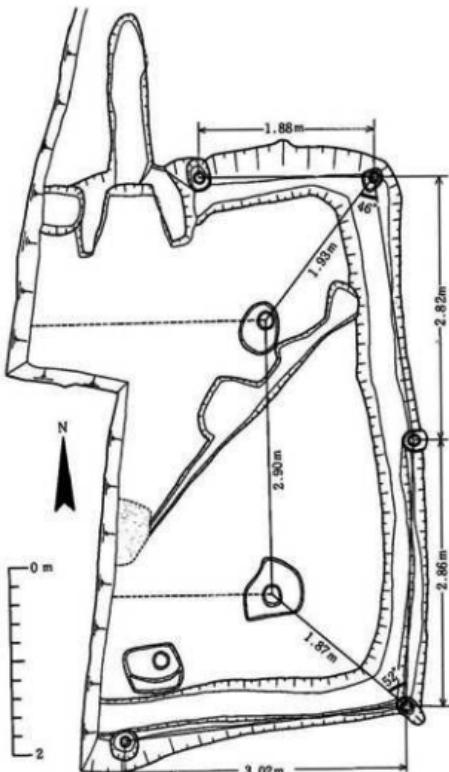


埋土は 1 層から V 層まで分れる。I 層は灰褐色土、II 層は炭を多量に含む暗褐色土、III 層は炭・地山ブロックを含む灰褐色土、IV 層は地山ブロックを含む灰褐色土、V 層は灰色粘質土を多く含む褐色土である。埋土 II 層より下層は自然堆積と見られる。

出土遺物は、床面やその他の施設から土器や瓦などが比較的まとまって発見されている(第 20 図)。

#### (5) SI1065 住居跡(第 11・12 図)

SI1065 住居跡は南区西端に位置しているが、西半部については宅地のために調査できなかった。全体に残存状況は良い。北壁は第 6 層上面で検出されたが、南壁は地山面より掘り込まれていた。平面形は南北の規模が約 6m である。一方、東西はカマドまで 3m を計り、仮にカマドが北壁の中央に位置するとみて、ここから折り返せば全長 6m となり、平面形はほぼ正方形に近い形が推察される。壁は、南が最も高



第 12 図 SI1065 住居跡模式図

く、床面まで 80 cm ほどあり、約 70 度の傾斜をもって掘られている。一方、最も低いのは東壁で、30~40 cm ほどの高さである。床面は北東隅にわずかに貼り床が認められるだけで、大部分は地山をそのまま床面としている。床面には 2 つの 40~60 cm ほどの大きさをもつ不整方形の柱穴があり、主柱穴と考えられる。これらは柱痕跡から約 20 cm ほどの丸

柱を立てていたことがわかる。また各辺には、壁をわずかに掘り込んで約 20~30 cm の楕円形、あるいは円形の柱穴が検出されている。これは壁柱穴と考えられる。東壁には 3 個の柱穴が約 2.8m の等間隔に並んでいる。また南壁では 2 個の壁柱穴が約 3.0m 間隔で発見されている。仮に西の柱穴が南辺の中央部に掘られたものと見なせば、南辺の長さは約 6m と推定され、先の推察とも矛盾しないこととなる。さらに北壁ではカマドの東に同様の柱穴があるが、西側には発見されなかつた。これらの壁柱穴にも柱痕跡が見られ、径約 15 cm の丸柱を使っていたと考えられる。なお、主柱・壁柱のいずれの柱痕跡も直立しており、傾きは認められなかつた。周溝は巾が 30~40 cm で、深さが約 25 cm ほどの U 字形を呈したものである。周溝は南壁と東壁では外側を抉って掘り込んでいる。周溝の埋土は I・II 層に分れる。I はグライ化した地山ブロックと炭化物を含んだ灰黄褐色粘質土、II は地山のグライ化したものと含む灰緑色粘土である。これらは一手に埋められたものと考えられ、住居の使用時にはすでに埋まっていたものと思われる。周溝には壁材の痕跡は認められなかつた。カマドは SI1063 住居跡と同様、あらかじめ付設箇所に径 1m 以上、深さ 10 cm 以上の掘り込みを行い、そこにカマドを作っている。カマド本体は東西巾 1.3m、南北 0.9m で、煙道は巾 0.5m、長さ 2m に達する。カマド袖部の前面に丸瓦を立てかけ、さらに袖の中にも丸瓦を並べて補強している。煙道は良く残っており、側壁は丸みを帯び、本来煙道はトンネル状であったことがわかる。またカマドの 40 cm ほど前面には SI1063 住居跡のように、巾 8~10 cm、深さ 5 cm 位の浅い弧状の溝が見られる。ほかに床面では、カマドの南に径約 90 cm、深さ 10 cm の深い凹みがある。その凹みの南には径 70 cm ほどの焼面があり、焼面の下には東辺の周溝の北寄りの位置からのびる、巾 10~15 cm、深さ 5 cm の深い溝が検出された。さらに、2、3 の柱穴があるが、用途は不明である。SI1065 の時期を決めうる遺物としては、周溝より第Ⅲ期の平瓦が 2 点発見されている。

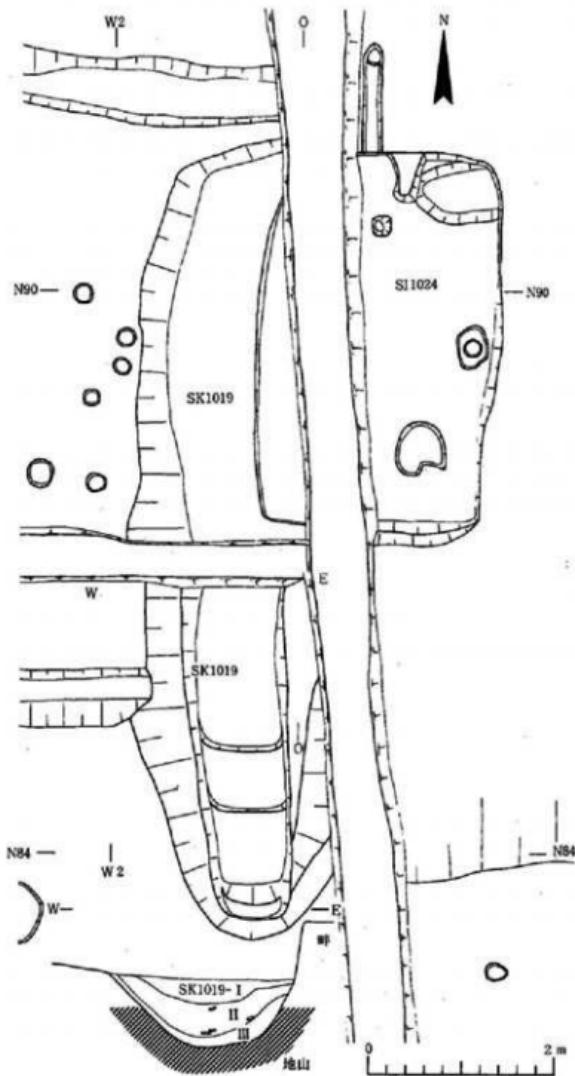
SI1065 の埋土は I ~ III 層に分けられる。I 層は地山小粒子を多量に含んだ黄褐色土である。II 層は地山小粒子・炭化物を含んだ黄褐色土で、a・b の亜層に分けられる。I、II 層は人為的な一手の埋土である。III 層は炭化物を多量に含んだ灰黒褐色粘質土、IV 層は拳大の地山ブロックを多量に含んだ黄褐色土、V 層は地山小ブロックを少量含んだ暗い灰茶褐色土である。IV、V 層はその堆積状況から自然堆積とみられる。VI 層は炭化物・焼土を多量に含んだ層で、a は炭化物・灰が主体の灰黒色砂質土、b は焼土・灰が主体の灰赤褐色砂質土に分けられる。いずれもカマド内の崩壊土、もしくはかき出した土と考えられる。VII 層は、径 2~3 cm の地山ブロックを多量に含んだ黄褐色土、VIII 層は、炭化物・焼土をわずかに含むが、地山小ブロックが主体の暗茶褐色土である。VII、VIII 層ともカマド本体の崩壊土である。

なお、主柱穴と壁柱穴との寸法や角度は第 12 図に記したので、参照されたい。

(6) SI1024 住居跡・

SK1019 土壌跡(第13図)

SI1024は、第31次調査区の西端で東半部が検出されていたが、今回ほぼその全貌をとらえることができた。平面形は南北4.1m、東西2.6mの長方形である。壁は東半部が40~90cmと良く残っているのに対して、西半部はSK1019土壌によって壊されており、10cmほどしか残っていない。東半の南壁では、壁がやや開き気味に立ち上がる。床面は、地山の露出していない北東隅では、軟質の自然堆積層の部分を硬い土で置きかえている。柱穴や周溝は認められなかった。カマドは北壁の内側に粘土を用いて築かれており、巾50cm、奥行55cmほどである。煙道は底面がかろうじて残っており、現存長は1.2mである。床面からは須恵器坏、瓦などが若干出土している。

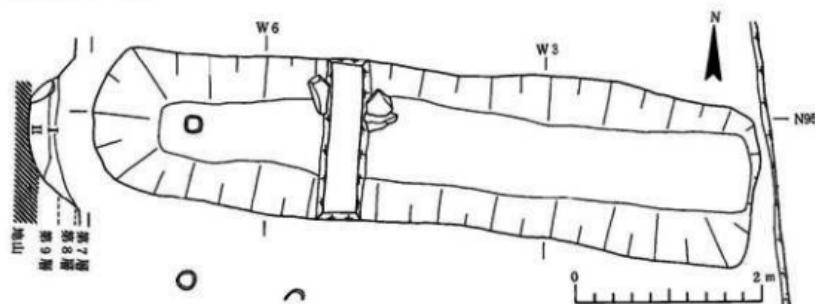


第13図 SI1024 住居跡 SK1019 土壌

**SK1019** 土壙跡も、第31次調査で南半部が発見されていた。今回検出された北半部はSI1024 住居跡を大きく破壊しているが、一方その北端部は新しい溝によって壊されている。それゆえ、本土壙はどの層から掘り込まれているのかわからない。しかし、これは第2層により完全に覆われている。規模は東西2.3m以上、南北8.5mの細長い土壙である。東・西壁は上方が開き気味で、底は丸みを帯びる。南壁は北へ向かって3段ほどの階段状にゆるやかに傾斜している。埋土I層は須恵系土器の破片を多量に含み、炭化物、瓦を混ぜる暗褐色土、II層は地山小粒子、遺物破片、木炭を含んだ褐色土で、III層はII層に似るがやや明るい褐色土である。いずれも須恵系土器が出土している。

#### (7) SK1064 土壙 (第14図)

これはSK1019土壙の北側にある。第6層上面より検出されている。規模は東西7.0m、南北2.6mの細長い土壙で、最も深い所で1.0mほどである。壁はいずれも上方で開き、底は丸みをもっている。埋土I層は地山のグライ化したものを含む灰茶褐色土、II層は灰黑色粘質土である。



第14図 SK1064 土壙

#### (8) SK1060 土壙 (第2・4図)

これは北区の北西隅で、その一部を検出したものである。第6層上面から検出され、南北4.5mぐらい、東西2.5m以上の楕円形に近い形を呈している。深さは少なくとも2m以上あるが、その内、埋土のV層までを発掘した。埋土I層は灰白色砂質土、II層は頭大の礫を多量に含み、灰白色土が酸化した橙灰色土、III・IV層は青灰色粘土である。そして、V層はIII・IV層に地山がグライ化したものを含む青緑色粘土で、以下は未発掘である。

#### (9) 北・南区のその他の遺構

井戸跡?SE1054・1058、土壙跡 SK1053・1059・1070・1073・1074、溝跡 SD1051・1052・1055・1056・1057・1061・1062・1072 はいずれも第2・3層上面より検出され、

埋土に須恵系土器を多量に含んでいる。ほかにいくつかの柱穴も認められたが、建物としてまとまりをもつものはない。

#### (10) 西区のその他の遺構 (第2図)

**SD1069** 溝跡は SD553 建物跡の西にあり、巾 35~65 cm、深さ 10 cm 前後で、長さは約 8m 以上である。この溝の方向は発掘基準線や SB553 に平行している。

**SK1068** 土壌跡は第 3b 層・第 4 層上面から掘り込んでおり、南半部のみを検出したものである。壁はなだらかな傾斜をもつが、掘り方は乱雑である。

### 4 出土遺物

第 32 次調査において出土した遺物は瓦、須恵器、土師器、須恵系土器、施釉陶器、磁器、硯、砥石、鉄製品、鉄滓、漆膜などであり、ほかに SE1066 井戸跡第IV層から竹製のカゴが出土している。以下、主な遺構ごとに説明してゆきたい。なお、須恵器・土師器壺の記載に際しては、底部がヘラ切りで無調整のものを「ヘラ切り」、回転糸切り離して無調整のものを「糸切り」とだけ記すことにする。また、土師器壺については、特に記載のない限りロクロによって成形されたものを指している。そして、壺の数量は底部の数を記した。

#### (1) 掘立柱珪物跡

##### A SB1013 建物跡

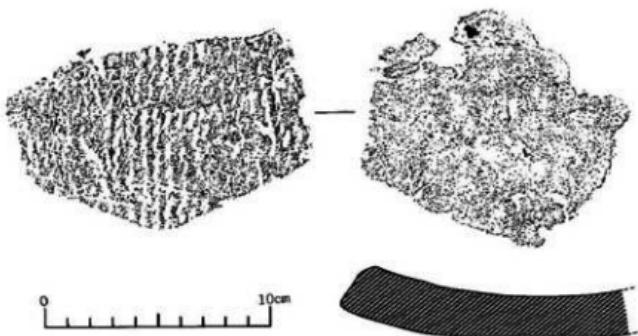
SB1013-A の柱穴埋土から瓦と須恵器が出土した。瓦には第III期の平瓦(第 15 図)があり、須恵器にはヘラ切りの壺がある。SB1013-B の柱穴埋土からは第 I、II 期の瓦のほかに須恵器、土師器が出土している。主なものに土師器の糸切り壺がある。

##### B SB553 建物跡

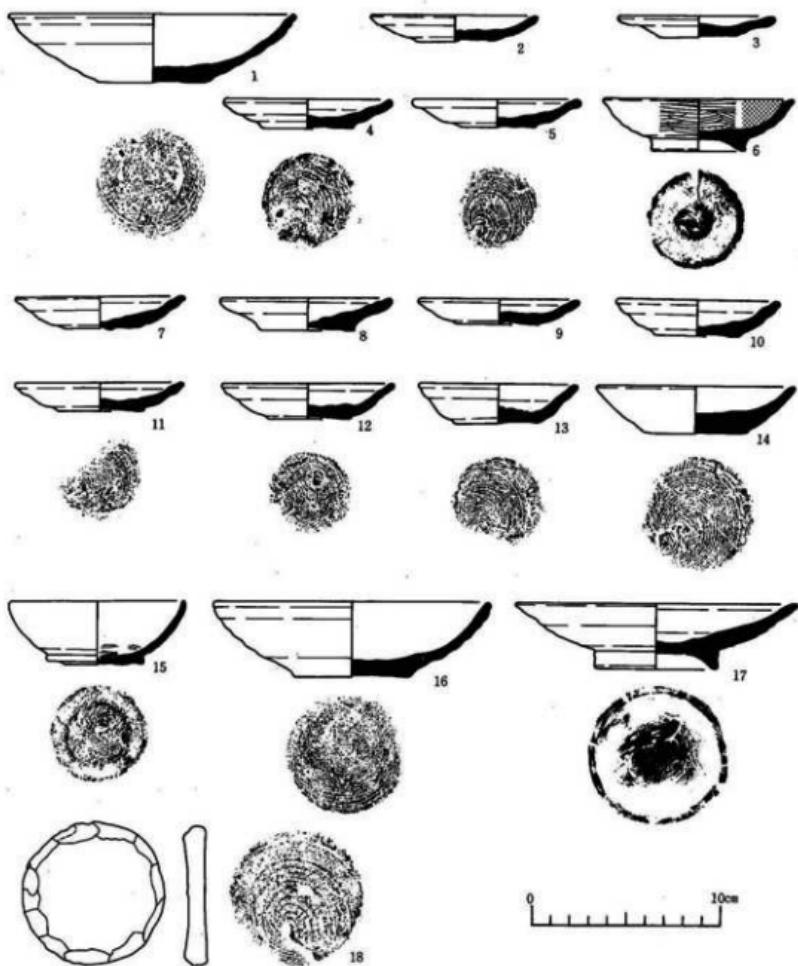
SB553-A・B の柱穴埋土には第 I・II 期の瓦が発見されただけである。

#### (2) SE1066 井戸跡

まず、SE1066 が使用されていた時混入した遺物として石敷施設出土のものから説明し

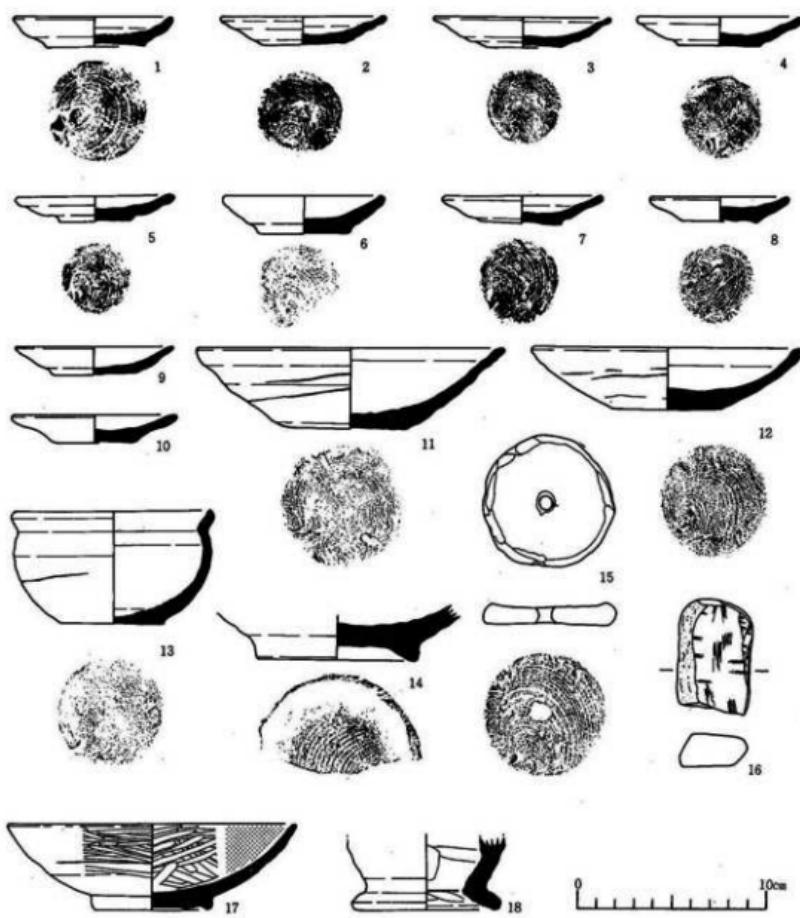


第 15 図 SB1013-A 建物跡柱穴埋土出土第 III 期平瓦



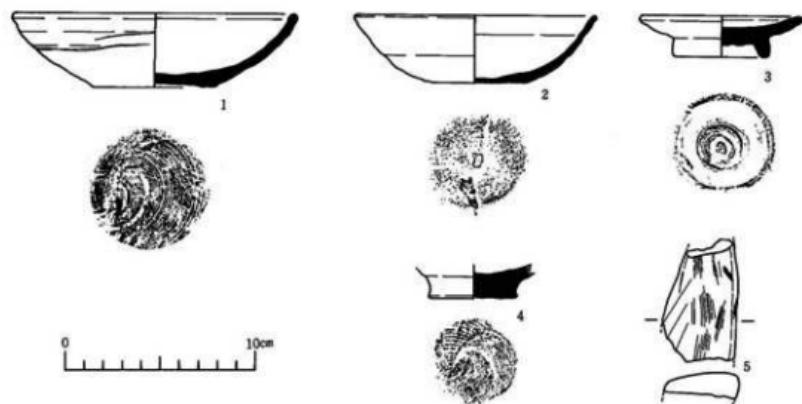
番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	SE1066-Ⅰ層	須恵系土器	坏	体部内外面ロクロナデ 底部回転糸切り
2~5	〃	〃	小皿	〃 〃
6	〃	土師器	高台坏	切り離し不明
7~14	SE1066-Ⅱ層	須恵系土器	小皿	体部内外面ロクロナデ 底部回転糸切り
16	〃	〃	坏	〃 〃
17	〃	〃	高台坏	底部回転糸切り→高台
15	〃	土師器	〃	〃

第16図 SE1066 井戸跡第I、II層出土遺物



1~10	SE1066-III層	須恵系土器	小皿	体部内外面クロナデ	底部回転糸切り
11・12	#	#	环	#	#
13	#	土師器	小形甕	#	#
14	#	#	台付皿	#	底部回転糸切り→高台
17	#	#	高台坏	体部内外面ミガキ	底部切り離し不明
18	#	#	不明	体部外面クロナデ	内面ケズリ

第 17 図 SE1066 井戸跡第 III 層出土遺物



第 18 図 SE1066 井戸跡出土遺物

たい。次にこの井戸が廃棄されてから堆積した埋土各層について記述し、出土傾向についても考えてみたい。なお、埋土の I、II 層は自然堆積層、III～V 層は人為的な堆積層である。

石敷施設(第 18 図)からは須恵器、土師器、須恵系土器、瓦などが出土している。須恵器には壺、蓋、甕、瓶などがある。壺では糸切りが 2 点、ヘラ切りが 3 点、全面を回転ヘラケズリしたものが 1 点見られる。甕では破片 3 点ほどが転用硯となっている。土師器には甕の破片が少量ある。須恵系土器では壺(2)、高台壺がわずかに出土している。瓦には第 1 期の軒丸瓦などがある。

埋土 I 層(第 16 図)からは須恵器、土師器、須恵系土器、磁器、硯、瓦などが出土している。この内、須恵系土器が多く、壺・小皿が 30 点、高台壺が 10 点、鉢が 1 点見られる。1 は壺、2～5 は小皿である。須恵器には壺、甕、瓶がわずかにあり、壺では糸切りが 1 点見られるだけである。土師器には壺、高台壺、甕がわずかにあり、壺では底部全面に手持ちヘラケズリ調整のあるものが 1 点認められる。6 の土師器高台壺は内外ともにヘラミガキがあり、内面を黒色処理している。磁器には白磁の瓶と皿の破片がある。ほかに風字硯の破片も発見されている。

埋土 II 層(第 16 図)からは須恵器、土師器、須恵系土器、瓦などが出土している。やはり

須恵系土器が最も多く、壺・小皿が 35 点、高台壺が 6 点、鉢の体部破片が数点ある。16 は壺、17 は高台壺、7~14 は小皿である。18 は壺の体部を打ち欠き、底部を円形にし、縁辺を磨いている。須恵器には壺、高台壺、甕、瓶がある。壺では糸切りが 3 点、糸切りののち手持ちヘラケズリ調整が 1 点、ヘラ切りが 1 点見られる。高台壺の中には外面底部を硯に転用したものもある。また蓋には朱のついた転用硯もある。土師器では壺、高台壺、甕が見られるが、図示できるものは少ない。壺はほとんどが風化しているために底部の状態がわからない。高台壺では高台の低いものと高いものとがある。15 は前者で、むしろ壺部の底面の方が高台の先端部より低いものである。体部は塊形に近く、底部は糸切りののち高台をつけている。外面にはロクロナデがあり、内面は黒色処理されている。瓦には 431 軒丸瓦、721A 軒平瓦、刻印図 A 平瓦などがある。

**埋土Ⅲ層(第 17 図)**からは須恵器、土師器、須恵系土器、施釉陶器、磁器、砥石、瓦などが出土している。この層でも須恵系土器が圧倒的に多く、壺・小皿が 34 点、高台壺が 6 点、そして鉢の体部破片が若干ある。図示した 11・12 は壺、1~10 は小皿である。ほかに 15 は壺の体部を打ち欠き、底部を円形にして、その中に 1.0 cm の孔を穿ち、縁辺を磨いているものである。須恵器には壺、甕、瓶がある。壺では糸切りののち回転ヘラケズリ調整、糸切りののち手持ちヘラケズリ調整、糸切り、ヘラ切りがそれぞれ 1 点ずつ見られる。また甕の破片の中には内面を硯に転用したものも 1 点ある。土師器には壺、高台壺、甕などがある。壺は糸切りが 5 点で、風化のために底部の状態がわからないものも 6 点ある。高台壺では高台の高いものが 2 点、低いものが 3 点(17)見られる。17 は内外ともにヘラミガキがあり、内面を黒色処理したものである。13 は小形の甕で、内外面ともにロクロナデがあり、底部は糸切りである。施釉陶器には灰釉台付皿の破片があり、磁器では白磁の皿の破片が見られる。これら各種の土器のほかに類例が少なく、種類や器種の判然としないものもある。14 は内外面ともにロクロナデがあり、底部は糸切りののち高台を付けているが、種類はわからない。18 は種類、器種ともに不明であり、上下も判然としない。外面にはロクロナデがあり、内面は下端にのみロクロナデが見られ、他はヨコナデを行っている。16 は砥石で、1 側面に自然面を残しているが、他はすべてに擦痕が見られ、すり減っている。瓦には 111、311 軒丸瓦、511、621、821A 軒平瓦のほかに、第 I 期平瓦の凸面に絵らしきものをヘラ書きしたもの(第 28 図 1)もある。

**埋土Ⅳ層(第 18・19 図)**からは須恵器、土師器、須恵系土器、磁器、竹製のカゴ、瓦などが少量出土している。須恵器には壺、甕、瓶、土師器には壺、高台壺、甕があるが、いずれも小破片で詳細は不明である。須恵系土器には壺(1)と台付皿(4)がある。磁器では白磁の台付皿の破片 1 点が見つかっている。第 19 図は竹製のカゴである。この器体は巾 2 ~2.5 cm の横条と縦条とが約 5 cm 間隔で、交互に超え、潜って網代組みされている。そし

て、それぞれの組目を固定するために、斜め1方向に竹条を絡ませている。すなわち、この手法は条を3方向に配列したカゴ目編みである。口縁部では器体の縦条を延長し、器体最上部の横条を径2cmほどの竹をしづらったものに、巾数mmの竹条でもって巻きつけて固定している。瓦には刻印圓平瓦などがある。

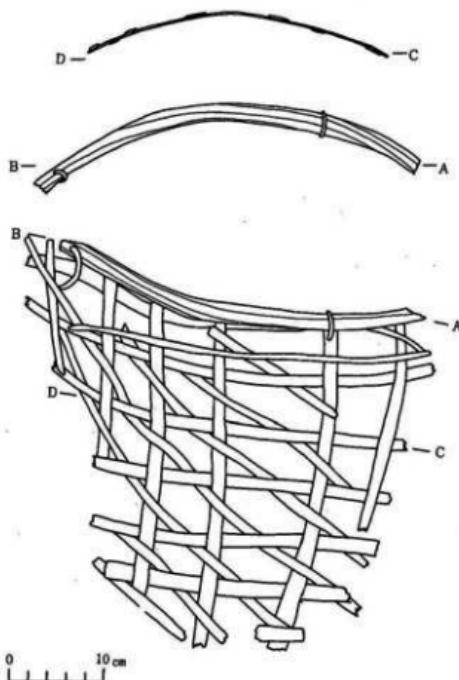
埋土V層(第18図)からは須恵器、土師器、須恵系土器、砥石などが少量出土している。須恵器には壺、甕が1点ずつある。壺はヘラ切りで、甕の破片は硯として転用している。土師器は甕の破片が1点、須恵系土器も台付小皿(3)が1点のみある。5は砥石で、片面が剥落し、上下とも欠損している。

ここで、SE1066出土の土器についてまとめてみたい。まず、人為的に埋められた埋土III～V層出土土器をまとめて見てみよう。壺類の総数79点の内、須恵系土器は46点で全体の6割を占めている。その中でも壺、皿、小皿は8割以上にもおよび、小皿が最も多い。また、数量的には少ないが、土師器高台壺の中に壺部の底面と高台の高さがほぼ同じという特徴をもったものが5点出土している。このような傾向は、埋土I・II層でも同様に認められ、SE1066井戸跡がきわめて短期間のうちに埋められたものといえよう。

### (3) SI1063 住居跡 (第20～22図)

SI1063 住居跡出土の遺物について、住居使用時の遺物、住居構築時の遺物、そして住居廃棄後の遺物に分けて説明したい。

住居使用時を示す床面出土の遺物は、きわめて少ないが須恵器壺、漆膜、瓦などがある。須恵器壺ではヘラ切りが1点見られる(第20図1)。瓦には刻印圓平瓦(第30図11)など

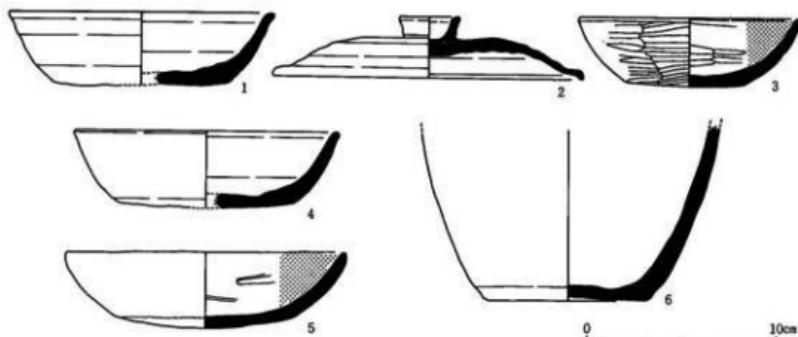


第19図 SE1066 井戸跡埋土第IV層出土竹製カゴ

がある。

次に住居構築時に貼り床の中、周溝、D-1溝、カマドなどに混入したり、施設に使われた遺物について述べる(第20図)。貼り床の中からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。いずれも少量で、須恵器には壺、甕が、土師器には壺、蓋、甕がある。土師器壺では、内外面ともにヘラミガキをして黒色処理したものが見られる(3)。土師器の蓋には内外面ともに黒色処理した破片が1点ある。周溝からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器には高台壺、蓋が1点ずつある。高台壺は外面底部に墨が付いており、硯に転用されている。2は蓋で、リング状のつまみが付いたものである。土師器ではロクロによらない甕の体部が1点出土している。D-1溝からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器にはヘラ切り壺(4)が1点、甕、瓶がある。土師器には壺と甕がある。5は壺で、摩耗が著しく内外面の調整は不明だが、体部が丸味を帯び、丸底であることから国分寺下層式と思われる。6の甕は体部下半のみを残している。摩耗が顕著で調整などはわからない。ほかに甕の体部が数点出土しているが、いずれもロクロ調整ではない。瓦には、陰刻文字「上」の第I期平瓦(第32図8)のほかに第I・II期の瓦がある。

さらに、住居廃棄後に堆積した埋土各層出土の遺物を上位から記述する。埋土I層からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器には壺、高台壺、蓋、甕、瓶がある。壺では糸切り、ヘラ切り、回転ケズリ調整が1点ずつ見られる。この内糸切りの壺は内面



番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	SI1063-床面	須恵器	壺	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り
2	SI1063-周溝	"	蓋	天井部回転ヘラ削り→リング状つまみ
3	SI1063-はり床	土師器	壺	内外面ヘラミガキ 黒色処理
4	SI1063-D1	須恵器	壺	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り
5	"	土師器	壺	丸底 摩耗著しく調整不明
6	"	"	甕	体部下半部のみ

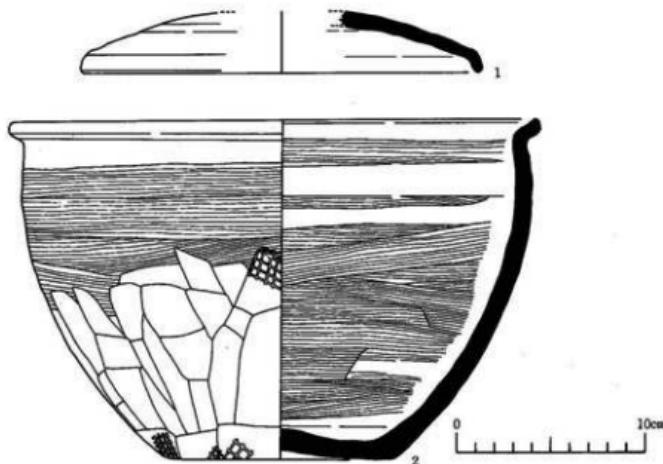
第20図 SI1063 住居跡内施設出土土器

に朱の付いた転用硯となっている。蓋には口径が約21cmと大形のもの(第21図1)があり、内外面ロクロナデのうち天井部に回転ヘラケズリ調整を施している。甕破片の1点は硯に転用している。土師器には坏、甕が少量あるが、小破片のみであり詳細に述べることはできない。瓦では220軒丸瓦、511、621、640軒平瓦、刻印図A瓦などが見られる。

埋土II層からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器には坏、蓋、甕、瓶が少量ある。坏はヘラ切りの2点のみである。第21図2は口径が胴部より大きい甕である。外面の口縁部にはロクロナデがあり、上半部に横方向のカキ目、下半部に縦方向のヘラケズリが見られる。そして、一部に格子目のタタキ痕も残っている。調整の順は、口縁部のロクロナデ→格子目のタタキ→横方向のカキトリー→縦方向のヘラケズリ→底部下端の横方向のヘラケズリとなる。内面では、口縁部と底部付近にロクロナデを残すが、体部全面には横方向のカキ目があり、上半部には横ナデもある。調整の順はロクロナデ→横方向のカキトリー→横ナデとなる。瓦には210G軒丸瓦、621軒平瓦、刻印図A平瓦などがある。

埋土III層からは土師器坏が少量出土し、ほかにヘラガキ「下」文字瓦が出土している。

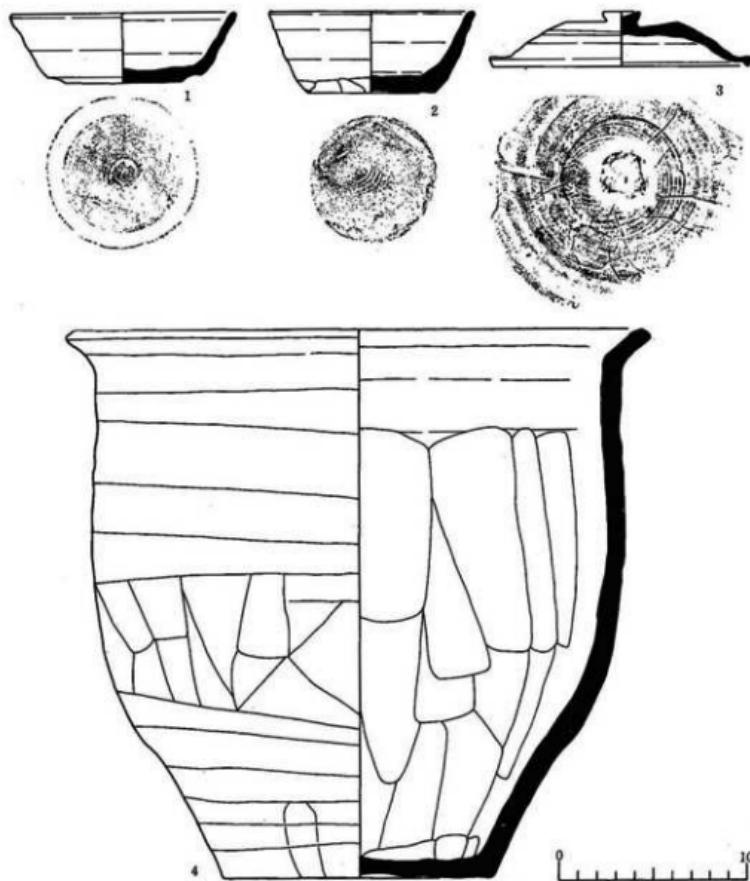
埋土IV層からは須恵器、土師器、漆膜、瓦などが出土している(第22図)。須恵器には坏、高台坏、高坏、盤、蓋、甕、瓶がある。坏では糸切りのうち横方向の手持ちヘラケズリ調



番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	SI1063-I層	須恵器	蓋	内外面ロクロナデ 天井部回転ヘラ削り
2	SI1063-II層	〃	甕	内外面ロクロナデ→カキ目

第21図 SI1063住居跡第I、II層出土土器

整したもの(2)、ヘラ切り、糸切り、全面回転ヘラケズリ調整したもの(1)、手持ちヘラケズリ調整のものなど各種の技法が少量ずつ見られる。高台壺は1点のみであるが、糸切りのうち高台を付けたものである。高壺は脚部が2点と体部破片が1点のみ発見され、



番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	SI1063-IV層	須恵器	壺	体部内外面クロナデ 底部回転ヘラ削り調整
2	"	"	"	底部回転糸切り→手持ちヘラ削り調整
3	"	"	蓋(転用窯)	外面回転糸切り→回転ヘラ削り調整→つまみ
4	"	土師器	甕	外面ヘラ削り→横ナデ 内面横ナデ→縦ナデ→ユビの押え

第22図 SI1063住居跡第IV層出土土器

盤は小破片である。このほかに須恵器には3の蓋があり、硯に転用されている。天井部は糸切りのうち回転ヘラケズリ調整を加えて、中くぼみのつまみを付けている。土師器には壺、蓋、甕がある。壺では国分寺下層式と思われる破片がある。蓋には内面黒色処理したものが1片、内外面黒色処理したものが1片ずつある。4は土師器の甕である。外面の口縁部から体部上半部と下部に横方向のナデ、中央部には縦方向のヘラケズリ、下端には横方向のヘラケズリが見られ、ヘラケズリ→横ナデの順である。内面では、口縁部に横ナデ、体部に縦方向のナデが見られ、底部と体部の境目はユビで押えつけており、横ナデ→縦ナデ→ユビの押えの順である。漆膜は2片ほど出土しているが、きわめて薄く、残存状況も良くない。瓦には511、621、640軒丸瓦、刻印図A丸瓦などがある。

#### (4) SI1065 住居跡 (第23図)

SI1065 住居跡出土の遺物について、住居構築時の遺物、住居廃棄後の遺物に分けて記述する。なお、明確に使用時の遺物と認められるものはなかった。

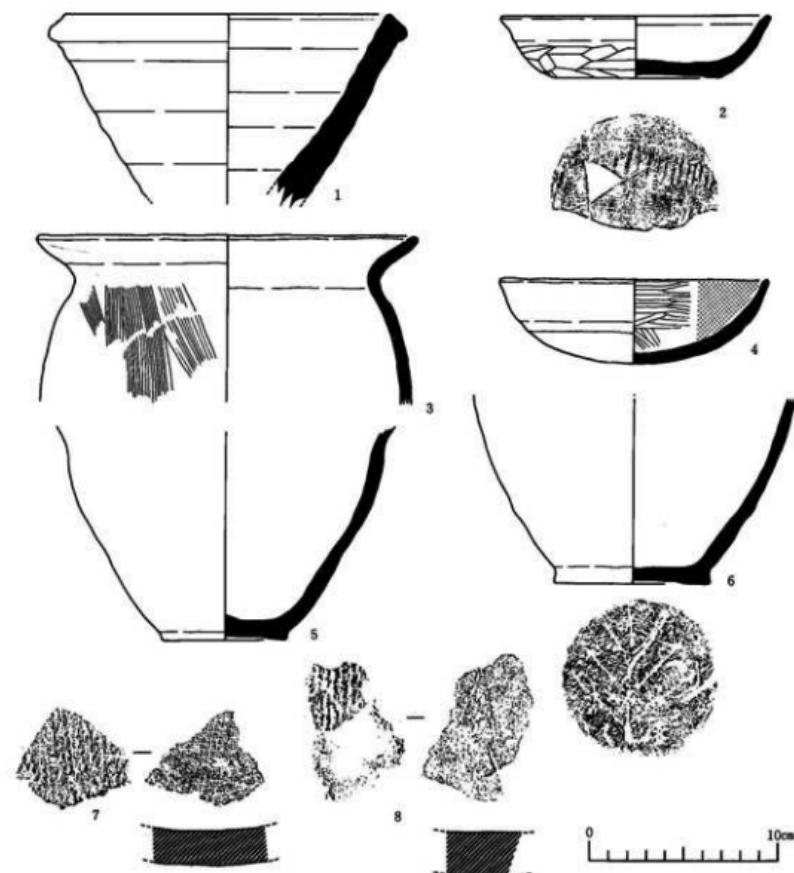
住居構築時に周溝、カマド、その他の施設に使われたり混入した遺物について述べる。周溝からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器には壺、蓋、甕、瓶がある。壺ではヘラ切り、全面をヘラケズリ調整したものがそれぞれ1点ずつ見られる。壺の中では外面にロクロナデと思われる痕跡のあるものが1点ある。また壺では内面に漆が付着しているものもある。甕の中で、3は下半部を欠いている。口縁部には横ナデがあり、外面体部上半にカキ目が見られる。体部内面の調整は不明である。5は体部下半から底部だけの破片である。内外面ともに摩耗が著しく調整は不明だが、底部には木葉痕が認められる。ほかに、口縁部が外反しロクロナデのある破片もある。瓦には第III期平瓦(第23図7・8)がある。カマドからは須恵器、土師器が少量出土し、須恵器ではヘラ切りの壺が1点ある。また袖には丸瓦が補強に使われている。6はカマドの支脚に使われた土師器の甕で、内外面の調整は火をうけて摩耗が著しくなっており不明である。底部には木葉痕が残っている。このほかに、住居跡内部の柱穴や溝から須恵器、土師器、瓦が少量出土している。

次に、住居廃棄後に堆積した埋土各層とカマド崩壊土、煙道埋土から出土した遺物を説明してゆく。埋土I層からは須恵器、土師器、硯、瓦などが出土している。須恵器には壺、高台壺、蓋、甕、瓶がある。壺ではヘラ切りが2点、全面にヘラケズリしたもの、手持ちヘラケズリのものが各1点ある。後者は硯に転用されている。土師器には壺、甕が少量あり、いずれも体部破片である。硯では円面硯の脚部が1点出土している。瓦には640軒平瓦などがある。

埋土II層からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器には壺、高台壺、高壺、蓋、甕、瓶がある。壺ではヘラ切りが4点、静止糸切りのうち回転ヘラケズリしたものが2点ある。高壺は脚部が1点出土している。土師器には壺、高台壺、甕がある。高台壺では

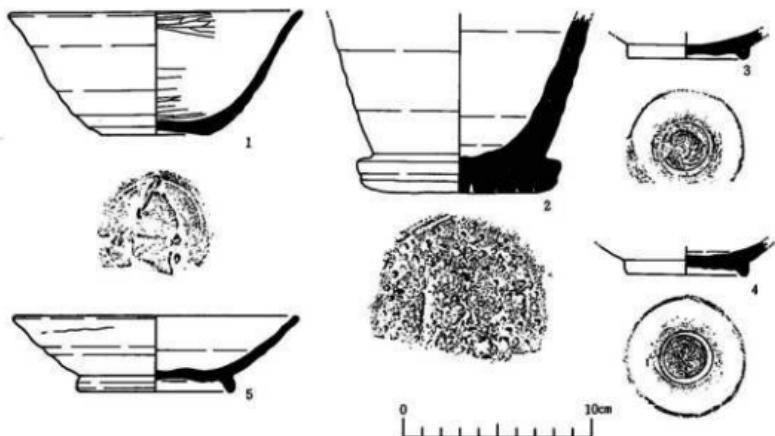
内外面黒色処理した稜塊が2点発見された。

埋土Ⅲ層からは須恵器・土師器・瓦などが出土している。須恵器には壺、蓋、スリ鉢、



番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	SI1065-Ⅲ層	須恵器	すり鉢	内外面ロクロナデ 内面摩耗
2	"	"	杯	内外面ロクロナデ 底部静止系切り一手持ち削り
3	SI1065-周溝	土師器	壺	外面口縁ヨコナデ 体部カキ目
4	SI1065-烟道	"	杯	丸底 内面ヘラミガキ 黒色処理
5	SI1065-周溝	"	壺	摩耗顕著 調整不明 底部木葉痕
6	SI1065-カマド	"	"	摩耗顕著 調整不明 底部木葉痕
7・8	SI1065-周溝	瓦	平瓦	第Ⅲ期

第23図 SI1065 住居跡出土遺物



番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	SK1060-IV層	土師器	杯	外面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り調整
2	SK1060-III層	須恵器	すり鉢	内外面ロクロナデ 底部に多くの刺突痕がある
3・4	SK1019	須恵系土器	高台杯	底部にヘラ状工具による押しつけあり
5	SD1051	"	"	内外面ロクロナデ

第24図 その他の遺構出土土器

甕、瓶がある。坏ではヘラ切りが2点、糸切りののち回転ヘラケズリしたものが1点、静止糸切りののち手持ちヘラケズリしたもの(2)が1点ある。1はスリ鉢で、内外面にはロクロナデが見られ、内面はなめらかに摩耗しており使用の痕跡を示している。土師器には坏、高台坏、甕がある。坏では内面黒色処理したもののほかに、内外面黒色処理したものが見られる。

埋土V層からは須恵器、土師器、硯、瓦などが出土している。須恵器には坏、甕の破片が少量あり、そのうち甕の破片1点には漆が付着している。土師器には坏、甕がある。坏では国分寺下層式のほかに内外面黒色処理したものもある。硯では円面硯の脚部が1点出土している。

埋土V・VI層のカマド崩壊土からは、須恵器ではヘラ切りの坏が1点、甕の破片が1点出土している。土師器はロクロによらない坏の破片が1点、内外面黒色処理した坏の破片が1点出土している。

煙道の埋土からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器には坏、蓋、土師器には坏、甕がある。4は土師器の坏である。底部は丸底で外面の上半部に横ナデがあるが、底部の調整は風化が著しく不明である。内面の体部には口縁に沿ってヘラミガキがあり、

底部には1方向のヘラミガキがある。そのうち内面を黒色処理している。国分寺下層式の坏と思われる。

#### (5) SI1024 住居跡・SK1019 土壙

SI1024 住居跡からは、遺物はほとんど出土していないが、先の第31次調査では床面から須恵器坏、瓦などが若干発見されている。

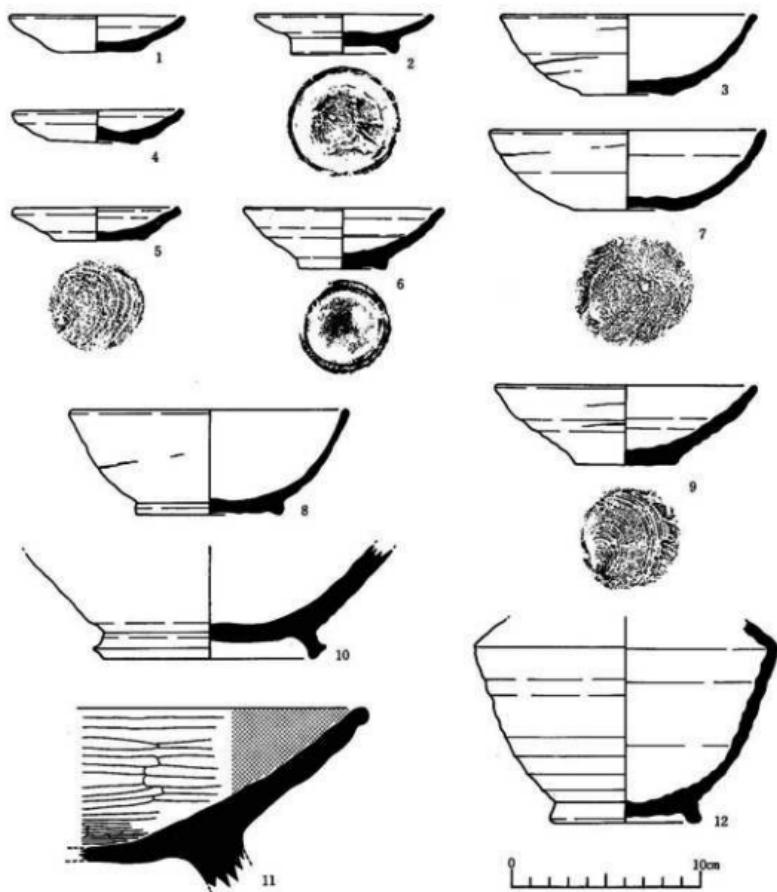
SK1019 土壙からは須恵器、土師器、須恵系土器、瓦などが出土している。須恵器には坏、高台坏、甕、瓶がある。坏では糸切りが3点、ヘラ切りが5点、全面を回転ヘラケズリしたものが2点発見され、糸切りの坏の1点は転用硯で内面に朱が付着している。土師器には坏と高台坏が少量ある。須恵系土器には坏、小皿、高台坏、鉢がある。第24図3・4は須恵系土器の高台坏であるが、底部にヘラ状工具の先端を押しつけた痕跡が認められる。このほか、須恵系土器坏では底部を円形に打ち欠いたものもある。瓦には第I期軒平瓦、621軒平瓦などがある。

#### (6) SK1060 土壙（第24図）

SK1060 土壙は第6層上面を掘り込み、第5層に覆われている。また、先に述べたように、底部まで掘り下げるることはできなかった。以下、埋土1～V層出土遺物について、上層から説明してゆきたい。

埋土I層からは須恵器、土師器、須恵系土器、瓦、文様壇(セ)などが出土している。須恵器には甕、瓶の破片が少量ある。土師器には坏、甕がある。坏では糸切りが4点、全面に手持ちヘラケズリしたものが1点、風化が著しく底部のわからないものが6点見られる。須恵系土器は坏と鉢の破片が微量ある。瓦には313、410軒丸瓦、第I期重弧文軒平瓦、710、821-B軒平瓦、刻印圓平瓦などがある。第28図3は文様壇(セ)である。これは上面と側面の一部を残し、他は欠損している。現在残っている大きさは、上面から見れば縦・横とも13cmほどであり、厚さは6.3cmであるが、全体の形状を復原することができない。文様は上面と側面の2ヶ所にあり、いずれも木製箋によっている。上面には神獣らしいものが浮彫されているが、頭部らしい部分と足かと思われるところの一部を欠いているので、いかなる神獣かは判然としない。また側面には唐草模様を配しているが、左半部の大半と右半部の一部が失われている。そして、下面には粗いヘラケズリが施されている。

埋土II層からは須恵器、土師器、須恵系土器、施釉陶器、瓦などが出土している。須恵器には甕、瓶がある。甕や瓶の破片のうち4点が硯として利用されている。土師器には坏、高台坏、甕がある。坏では糸切りが3点、糸切りのうち手持ちヘラケズリしたものが1点、全面を手持ちヘラケズリしたものが1点見られる。施釉陶器では灰釉陶器の瓶の破片が1点ある。須恵系土器には、坏、高台坏、鉢があり、極めて微量である。瓦には210、310、



番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1・4・5	2層	須恵系土器	小皿	内外部ロクロナデ 底部回転糸切り
2	〃	〃	高台付小皿	〃 底部回転糸切り→高台
3・7・9	〃	〃	壺	〃 底部回転糸切り
6	〃	白磁	台付皿	底部を除いて、内面施釉
8	〃	土師器	高台壺	外面ヨコナデ 内面ヘラミガキ 黒色処理
10	〃	須恵器	瓶	内外面ロクロナデ 体部下半回転ヘラ削り
11	〃	土師器	三足付鉢	内外面横方向ヘラミガキ 内面黒色処理
12	〃	須恵器	瓶	外面上半ロクロナデ 下半回転ヘラケヅリ

第25図 南・北区第2層出土土器

410 軒平瓦、620 軒平瓦、刻印圓丸瓦のほかに第IV期の平瓦がある。

埋土III層からは須恵器、土師器、瓦、漆膜などが出土している。須恵器には壺、スリ鉢、甕、瓶がある。壺では糸切りが1点、ヘラ切りが1点ある。2はスリ鉢で、内外ともにロクロナデがある。底部外面には深さ数mmの刺突痕が多数認められる。なお、内面に使用痕は見られない。甕の破片の中には転用硯と有機物の付着のあるものが1点ずつある。瓦には512 軒平瓦、ヘラ書き「下」文字瓦、刻印圓A 平瓦などがある。

埋土IV層からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器には壺、甕、瓶がある。壺ではヘラ切りが3点、糸切りが1点で底部に墨痕がある。ほかに全面に回転ヘラケズリしたものが1点ある。甕破片のうち1点は転用硯である。土師器には壺、甕がある。1はロクロでととのえられ、底部は全面回転ヘラケズリされている。内面は体部、底部ともに口縁に沿ったヘラミガキが施され、黒色処理されている。ほかに糸切りのうち調整不明が2点、全面に回転ヘラケズリしたものが1点、同じく手持ちヘラケズリしたものが1点ある。瓦には621、821-B 軒平瓦、刻印圓丸瓦のほかに第IV期かと思われる平瓦もある。

埋土V層以下は一部発掘したのみで、遺物は少ないが、110B 軒丸瓦のほかに第I・II期の瓦が出土している。

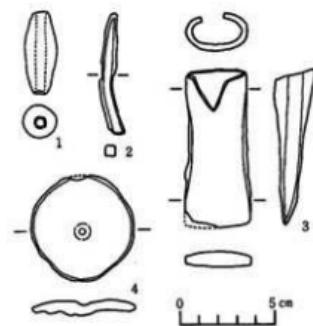
#### (7) 堆積層

発掘区の南・北区には谷に沿って、第1層から第8層までの堆積層が見られ、各層からは種々の遺物が発見されている。ここでは古代の堆積層と考えられる第2層より下層について順次記述してゆく。

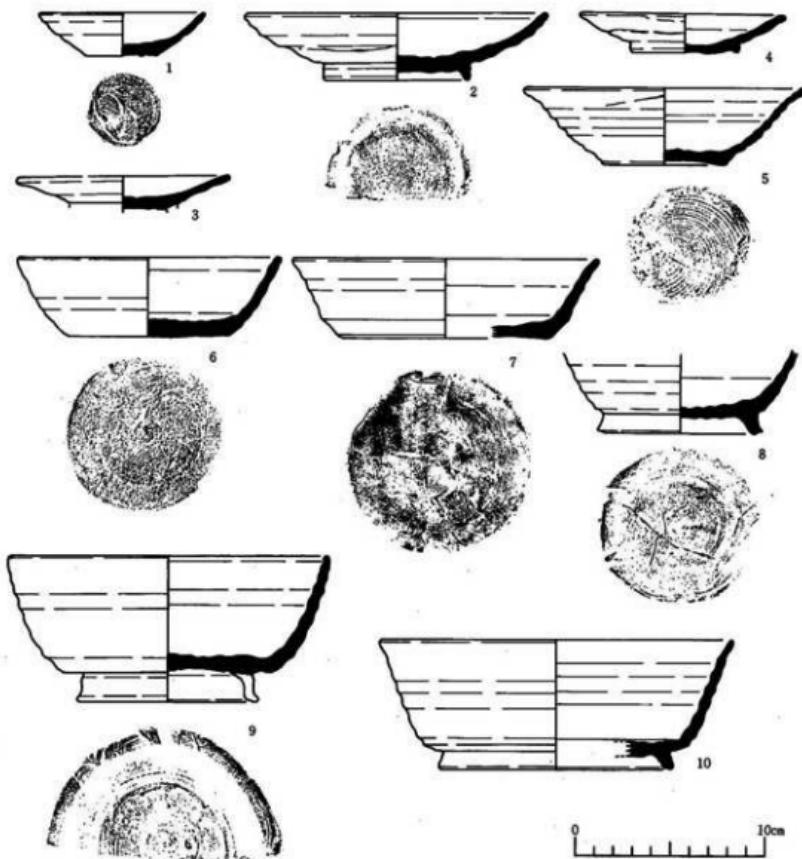
#### 第2層（第25図）

南区第2層からは須恵器、土師器、須恵系土器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土している。須恵器には壺、高台壺、蓋、甕、瓶がある。

壺ではヘラ切りが19点、糸切りが7点、全面に手持ちヘラケズリしたものが1点、回転ヘラケズリのものが2点、風化のため底部の不鮮明なものが5点ある。甕や瓶の破片は多量であるが、そのうち4点ほど転用硯として使われており、朱の付着したものも2点検出されている。10・12は瓶で、10は底部の破片であり、12は体部上半を欠いている。土師器には壺、高台壺、蓋、甕、三足付き鉢がある。壺では糸切りが圧倒的に多く23点あり、ヘラ切りが1点、糸切りのうち手持ちヘラケズリが1点、全面に手持ちヘラ



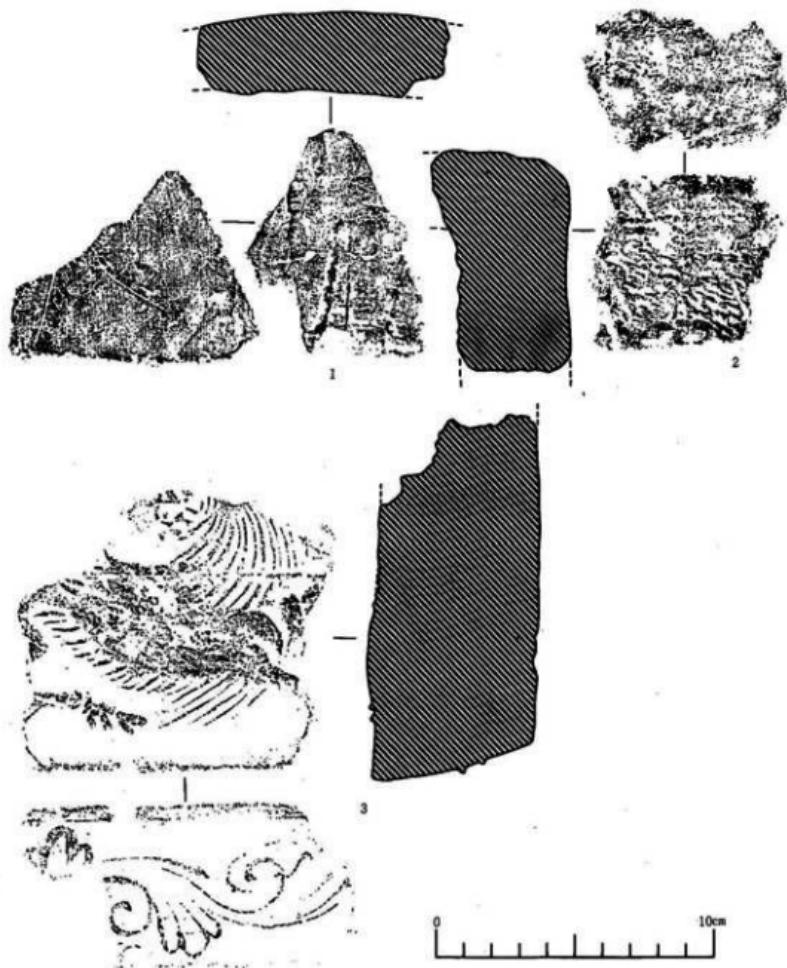
第26図 第3層出土遺物



番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	4層	須恵系土器	小皿	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り
2	"	"	高台坪	" 底部回転糸切り→高台
3	"	"	高台付小皿	" "
4	5層	"	"	"
5	"	須恵器	坪	" 底部回転糸切り
6	6層	"	"	" 底部回転ヘラ切り
7	"	"	"	" 底部回転ヘラ削り調整
8	"	"	高台坪	" 底部回転ヘラ切り→高台
9	"	"	"	" "
10	"	"	"	" 底部回転ヘラ削り→高台

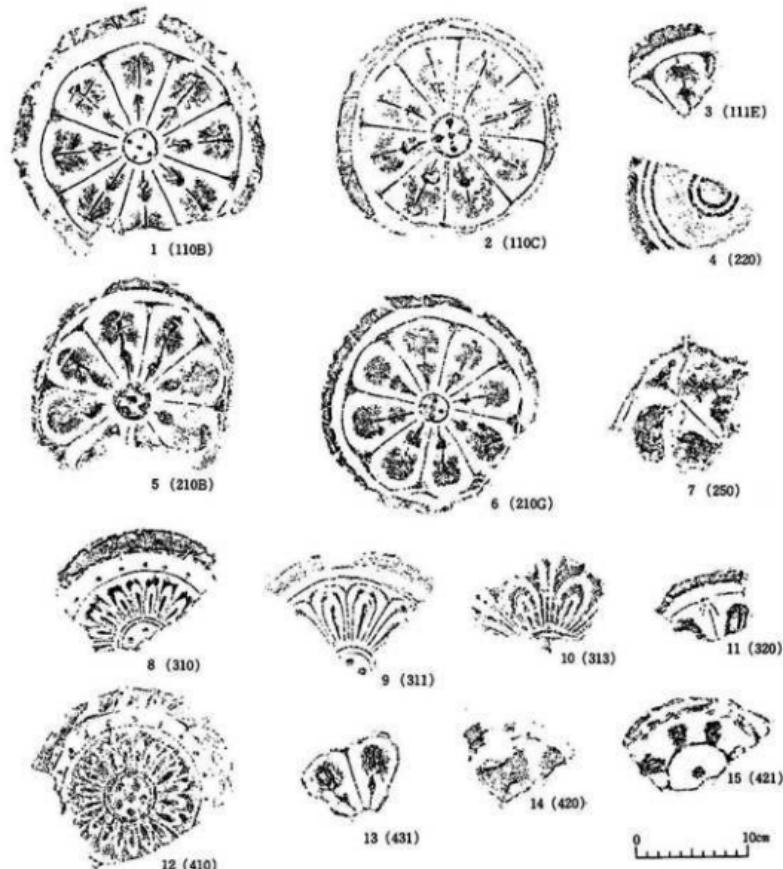
第27図 第4, 5, 6層出土土器

ケズリしたものが1点、同じく回転ヘラケズリが2点、ほかに底部が不鮮明なものもいくつかある。なお、全面に回転ヘラケズリしたもののうち1点は内面に漆の付着が見られる。



第28図 第32次調査出土の壺など

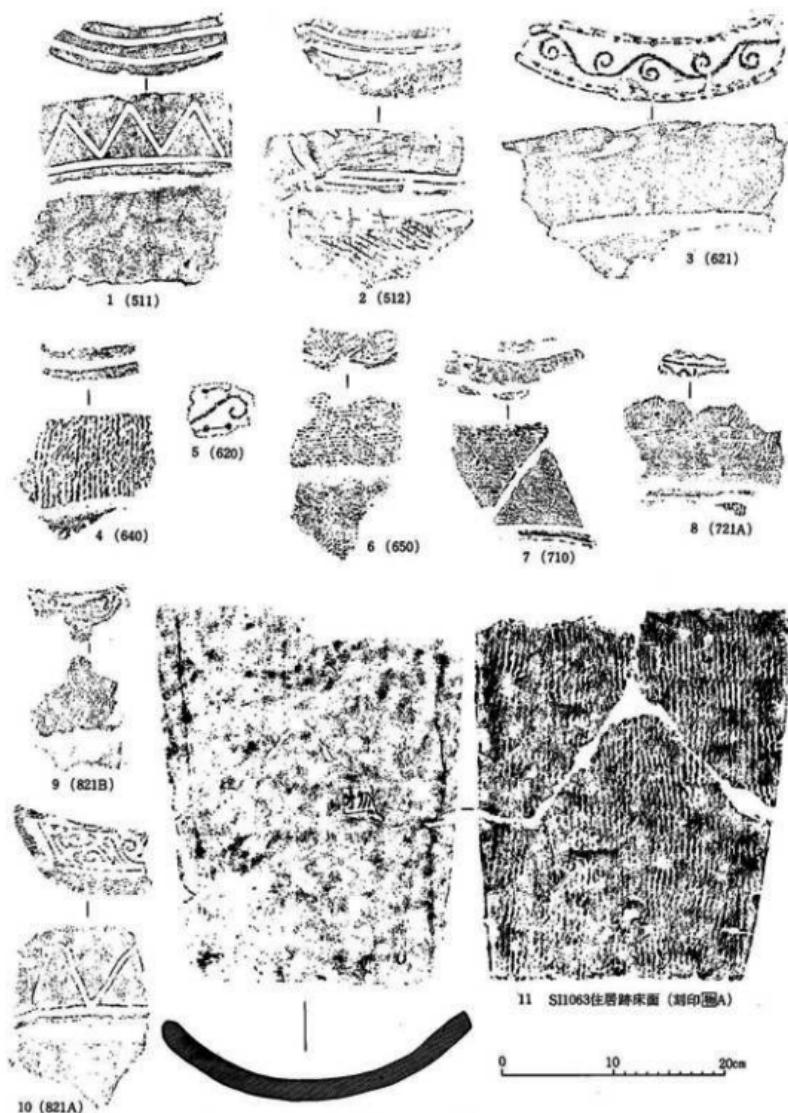
三足付鉢は同一個体と思われる破片が数点あるが、全体の器形は分らない(11)。須恵系土器はきわめて多く、壺(9)、高台壺、小皿、台付小皿、三足付鉢などの各種が出土している。施釉陶器には、緑釉陶器と灰釉陶器がある。緑釉陶器は高台壺で、底部糸切りのち回転ヘラケズリしている。灰釉陶器には瓶が3点ある。磁器では白磁の皿が1点出土している。



第29図 第32次調査出土軒丸瓦

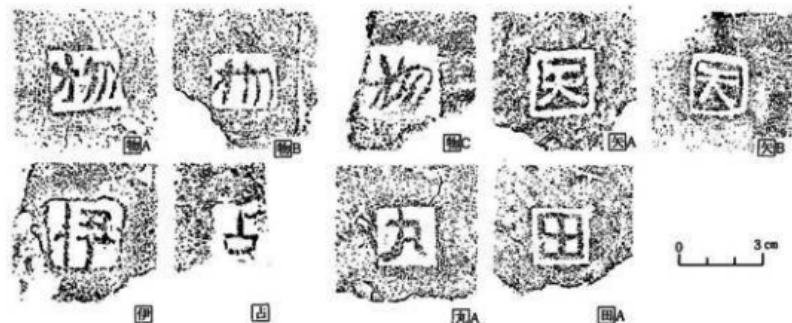
瓦には第I軒丸瓦、210B、410軒丸瓦、621軒平瓦、第I期、第II期、第III期軒平瓦、ヘラ書き「下」の第I期丸瓦、型による陰刻のある第I期平瓦(第32図10)、刻印図の平瓦、図A、図Bの丸・平瓦、図Cの丸瓦、図Cの平瓦などがある。

北区第2層からは須恵器、土師器、須恵系土器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土している。須恵器には壺、高台壺、高壺、甕、瓶がある。壺では糸切りが4点のほかに、ヘラ切り、糸切りのうち回転ヘラケズリのもの、全面に回転ヘラケズリしたものがそれぞれ1点ずつ見られる。甕の破片のうち4点は転用硯となっている。ほかに、ミガキのある須恵器



第30図 第32次調査出土軒平瓦など

で高台坏片1点、器形不明の小破片が1点ある。土師器には坏、高台坏、甕がある。坏ではいずれもロクロナデが見られ、糸切りが50点と圧倒的に多く、ほかに糸切りののち回

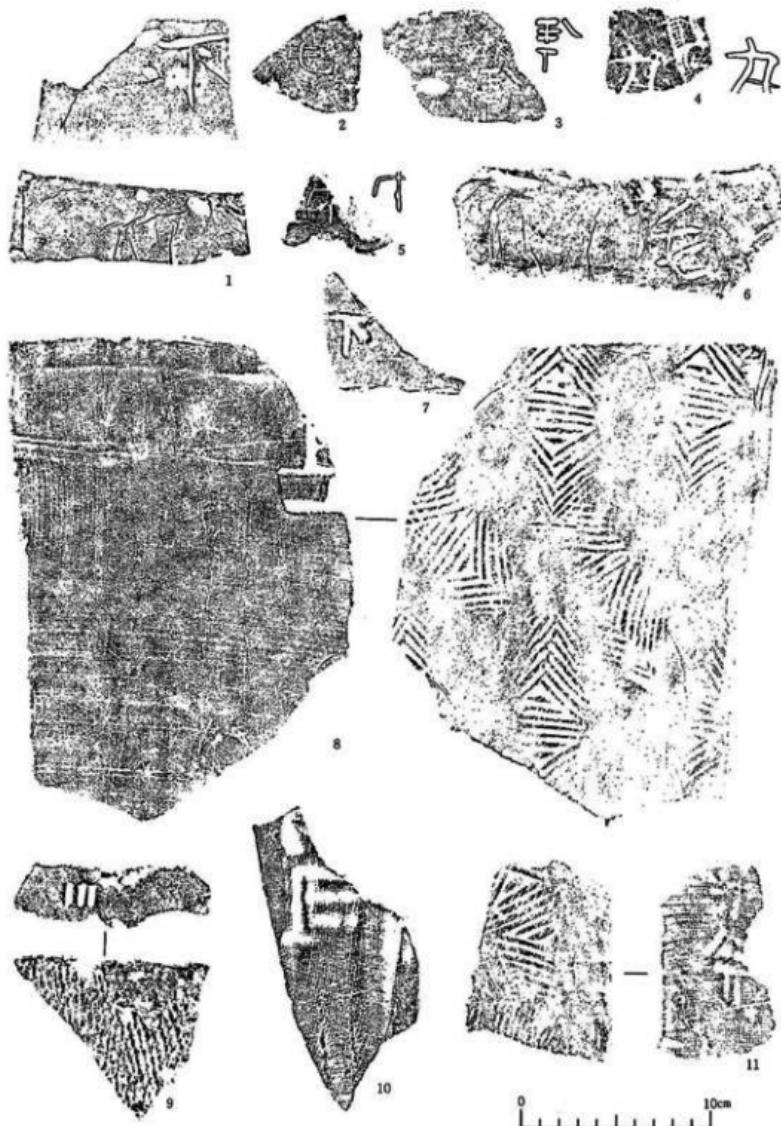


第31図 第II期刻印瓦

転ヘラケズリしたものが 2 点、全面に手持ちヘラケズリしたものが 1 点、底部の不鮮明なものがいくつかある。高台坏ではいずれもロクロナデが見られ、高台の高いものが 3 点であるのに対し、低いもの(8)が 77 点もありきわめて特徴的である。この中でいくつかは糸切りの痕跡を残している。土师器ではほかに器種不明で底部穿孔のものが見られる。ここでも須惠系土器が最も多量に出土し、坏(3・7)、高台坏、小皿(1・4・5)、台付小皿(2)、鉢など各器種がある。坏では体部を打ち欠き、底部を円形にし、中央部に孔を穿ったものも見られる。また高台坏では底部にヘラ状工具の先端を文様のように押しつけたものが 1 点ある。施釉陶器には灰釉陶器の皿、長頸瓶、瓶がある。磁器では白磁の皿、台付皿がある。6 は白磁の台付皿である。外面は体部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、口縁部は丸くおさまる。体部下端ではヘラケズリが見られ、底部には短くケズリ出した高台がある。内面の体部中央部に沈線が巡っている。釉は外面の底部を除いて全面にかかっている。胎土は灰白色を呈し、織密である。瓦には 210、310、320、427 軒丸瓦、第Ⅰ期、第Ⅲ期軒平瓦、そして第Ⅰ期の文字瓦としてヘラ書き「毛」の丸瓦、刻印「下今」の平瓦がある。

### 第3層

南区第3層からは須恵器、土師器、須恵系土器、施釉陶器、瓦などが出土している。須恵器には坏、高台坏、甕、瓶がある。坏ではヘラ切りが多く 14 点あり、全面に手持ちヘラケズリしたものが 2 点、同じく回転ヘラケズリが 1 点ある。甕の中では 1 点だけ転用硯となっている。土師器には坏、高台坏、甕がある。坏では国分寺下層式らしい破片が 1 点、糸切りが 5 点のほかに、ヘラ切り、糸切りのうち手持ちヘラケズリしたもの、同じく回転ヘラケズリしたものがそれぞれ 1 点ずつ見られる。この中でヘラ切りのものと糸切りのものの 1 点ずつに底部に「×」らしいヘラ書きがある。須恵系土器には坏、高台坏、小皿、台付皿、三足鉢がある。施釉陶器では内面に花文の刻みのある綠釉陶器皿、灰釉陶器長頸瓶、



第32図 各種文字瓦

瓶が出土している。瓦には第Ⅰ期軒丸瓦、210 軒平瓦、第Ⅰ期軒平瓦、刻印画A 丸瓦がある。

北区第3層からは須恵器、土師器、須恵系土器、施釉陶器、磁器、土錘、鉄製品、瓦などが出土している。須恵器には壺、甕、瓶がある。壺ではヘラ切りが1点のみである。また甕や瓶の破片の中で、2点ほどが硯に転用されている。土師器には壺、高台壺、甕がある。壺には糸切りが9点、全面に回転ヘラケズリしたものが1点あり、底部の不鮮明なものも数点ある。須恵系土器には壺、高台壺、小皿がある。施釉陶器では灰釉陶器の皿、長頸瓶、瓶の破片が見られ、磁器では白磁の皿が1点見つかっている。第26図1は細身の土錘である。2は断面四角形の鉄釘、3は基部に袋状の木部挿入穴のある鉄斧、4は軸を欠いた鉄製の紡錘車である。

#### 第4層（第27図）

南区第4層からは須恵器、土師器、須恵系土器、瓦などが比較的多く出土している。須恵器には壺、高壺、蓋、甕、瓶がある。壺ではヘラ切りが5点、糸切りが2点のほかに、全面に回転ヘラケズリしたもの、同じく手持ちヘラケズリしたものが1点ずつ見られる。高壺では脚部が1点ある。甕や瓶の破片のうち1点が硯に転用されており、もう1点には朱が付着しているが摩耗はない。土師器には壺、高台壺、蓋、甕がある。壺では糸切りが2点、糸切りのうち手持ちヘラケズリが1点、同じく回転ヘラケズリが2点見られる。須恵系土器には壺、高台壺(2)、小皿、台付小皿(3)、鉢がある。瓦では第I期軒丸瓦、310軒丸瓦、第I期軒平瓦、640軒平瓦、刻印圓A平瓦、圓A平瓦、圓B丸瓦などが見つかっている。

北区第4層からは須恵器、土師器、須恵系土器、瓦などが少量出土している。須恵器には高台壺、甕、瓶がある。土師器では糸切り壺が1点見られる。1は須恵系土器小皿である。瓦には刻印圓B丸瓦などがある。

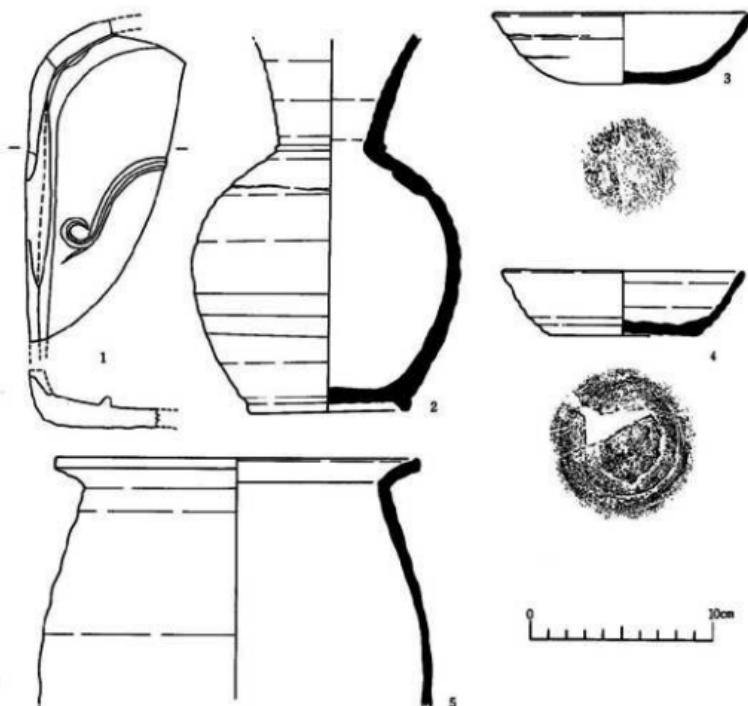
#### 第5層（第27図）

第5層からは須恵器、土師器、須恵系土器、瓦などが出土している。須恵器には壺、高台壺、甕がある。壺ではヘラ切りが3点、糸切りが1点(5)見られ、高台壺では糸切りのうち高台を付けたものも1点認められる。土師器には壺、甕がある。壺では糸切りが5点見られる。須恵系土器には壺、高台壺、小皿、台付小皿(4)がある。瓦では210軒丸瓦、第I期軒平瓦、刻印圓A平瓦のほかに第IV期の平瓦も出土している。

#### 第6層（第27図）

南区、北区ともに明確に同一層と考えられるので、一括して説明する。

第6層からは須恵器、土師器、須恵系土器、硯、漆膜、瓦などが出土している。須恵器には壺、高台壺、蓋、甕、瓶がある。壺ではヘラ切り(6)が26点と最も多く、糸切りが3点、糸切りのうち回転ヘラケズリしたものが1点、全面に回転ヘラケズリしたもの(7)が3点見られる。高台壺ではヘラ切りのうち高台を付けたもの(8・9)がある。甕の破片の中で



番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	1層	硯	風字硯	型を使用
2	"	須恵器	瓶	外面口クロナデ→下半回転ヘラ削り調整
3	3b層	須恵器系土器	壺	内外面口クロナデ 底部回転糸切り
4	SD1069	須恵器	壺	" 底部回転ヘラ切り
5	"	土師器	甕	内外面口縁部クロナデ

第33図 西区出土遺物

1点のみに朱の付いた転用硯がある。土師器には壺、甕がある。壺では糸切りが1点、全面に回転ヘラケズリしたもののが2点あり、底部の不鮮明なものが数点ある。硯は円面硯の脚部が1点出土している。瓦には111C、220軒丸瓦、511、620、640軒平瓦、刻印圓B平瓦、刻印圓B平瓦、博らしいもの(第28図2)などがある。

#### 第7層

第7層からは須恵器、土師器、瓦が出土している。須恵器にはヘラ切りの壺が3点のほかに、高台壺、甕、瓶の破片が少量ある。

### (8) 西区出土遺物（第33図）

ここでは西区のSB1013、SB553建物跡以外から出土した主な遺物について説明する。

**SD1069** 溝からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器には壺、甕、瓶がある。壺では糸切りが2点、ヘラ切り(4)が3点、全面にヘラケズリしたものが1点見られる。土師器には壺、甕が少量ある。5は体部下半から底部を欠いた土師器甕である。外面では体部上半から口縁部にかけて、内面では口縁部付近にロクロナデが見られる。

**第3a層**からは須恵器、須恵系土器、瓦などが出土している。須恵器ではヘラ切りの壺が1点ある。ほかに須恵系土器の壺も少量見つかっている。

**第3b層**からは須恵器、土師器、須恵系土器、瓦などが出土している。須恵器には壺、甕がある。壺では糸切りが3点、ヘラ切りが2点あり、糸切りの中には内面にわずかに朱の付いた転用硯も1点ある。甕の破片の中では2点硯に転用されたものが認められる。土師器では糸切りの壺が1点見られるほかに、甕が少量ある。須恵系土器では壺(3)と小皿がわずかに出土している。瓦には第1期軒丸瓦、410軒丸瓦、621軒平瓦、刻印画A平瓦がある。

他に、1は第1層から発見された風字硯である。第31次調査第92図21と接合した。現存長18cmで、陸と海の境に唐草文様の隆帯を巡らす。内側に木目が観察されることから型によって作られた風字硯であることがわかる。また内面の縁辺から裏面全体にはヘラケズリの成形があり、側端近くに脚部の剥落した痕跡が認められる。2は同じく第1層から出土した須恵器の瓶である。口縁部がわずかに欠けている。体部は丸みをもち、頭部から上方へ開いている。外面全体と内面の頭部には図のように顕著なロクロナデが見られる。

## 5 考察

今次の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡2、竪穴住居跡3、井戸跡3、土壙跡9、溝跡9などである。以下、(1)堆積層と遺物、(2)主要な遺構、(3)政庁北方隣接地域の変遷、の3点について考察を行いたい。

### (1) 堆積層と遺物

南区、北区に見られる各層は、東から西に入る谷に自然堆積した層である。ここでは、各層から出土した土器の傾向を検討し、その時期をも考えてみたい。

表1は各堆積層より出土した須恵器、土師器、須恵系土器の壺、高台壺底部の数を示したものである。その結果、次のような傾向がとらえられた。第2層から第5層までは出土傾向がきわめて類似している。すなわち、これらの層では須恵系土器が圧倒的に多く、6

表3 堆積層出土の杯・高台杯の数量

器種		須 恵 器 杯								土 師 器 杯								須 恵 系 杯						
層位		A a	A b	A c	B a	B b	B c	C b	C c	D	不 明	高 台 付	A a	A b	A c	B a	B b	B c	C b	C c	國 分 寺 廟	不 明	高 台 付	杯 ・ 皿
2層	南区	7		19			2	1		5	4	33	1					1	4	28	30	166	57	
	北区	4	1	1			1			1	1	50	2					1		28	84	453	194	
3層	南区			15			1	2		1	1	5	1					1	6	3	34	23		
	北区			1								9						1		5	7	32	26	
4層	南区	2		5			1	1		2	2	1					2		4	1	24	16		
	北区											1	1					2			1			
5層		1		3							2	5							6		13	9		
6層		3	1	26			4					1					2		11					
7層				3														1						

A 糸切り B ヘラ切り C 切り離し不明 D 静止糸切り

a 無調整 b 回転ヘラケズリ調整 c 手持ちヘラケズリ調整

7割を占め、土師器がそれにつぎ、須恵器は少ない。これに対して、第6層では坏は須恵器と土師器のみであり、須恵系土器はまったく見られない。この中では須恵器が5~6制を占めており、その特徴を見ると、ヘラ切りが主体で7割にもおよんでいる。一方、瓦では第2層から第5層までには第IV期までの瓦が含まれるのにに対し、第6層には第IV期の瓦はまったく見られない。このように、第2層から第5層までと第6層とでは、土器や瓦のあり方に相違が見られる。

以上のことから、第2層から第5層までは須恵系土器以降の堆積であり、10世紀後半以降の年代が考えられる。第6層は第III期の堆積と見られ、9世紀代の年代が与えられる。したがって、第6層までの堆積と第5層以上の堆積とには、若干の時間的なへだたりがあったものと思われる。

## (2) 主要な遺構

### A 掘立柱建物跡

政庁北方隣接地域の建物群について、今次の成果と第16(註1)、19(註2)、31(註3)次調査の成果とを合わせて考えてみたい。まず、建物群は配置・方向・規模・柱穴のあり方などから2つのグループに分けてとらえることができる。1つは北のグループで、SB1017、1022、1026である。それらは配置に規則性がなく、方向も不一致で、小規模である。

これに対し、もう1つのグループは前者の南に位置するSB551、553、1013などである。これらの建物はいずれも規模が大きく、方向、柱間寸法、柱穴の形状などがきわめて類似し、しかも変遷もほぼ一致している。すなわち、建物の方向はほぼ発掘基準線に一致

している。また、これらは桁行 10 尺等間で計画されている。さらに、それぞれ 1 回の建て替えがあるが三者には共通性があり、これらは同じ変遷をたどったものとみられる。

ところで、SB551 を中心にすえてみると、その西側には SB553 があるが、これと対称の東側には第 16 次(註 1)で検出された 2 個の柱穴があり、改めて注目される。これらの柱穴はそのあり方が SB551、553、1013 の柱穴ときわめて類似し、一連のものである可能性も考えられる。これら 2 個の柱穴だけで断定的に述べることはできないが、SB553 の存在が明らかになった今、SB553 が SB551 の西に配置されているのに対し、東側にも同様の建物があり、この 2 個の柱穴がその南妻であることも考えられるのである。ここで、これを **SB1050** とし建物跡と見ておきたい。こういった推察をするならば、SB551 は 3 棟の梁行 1 間の建物によってとり囲まれ、これらは政庁の北方に隣接してまとまりをもつ一画を形成していたとも考えられる。

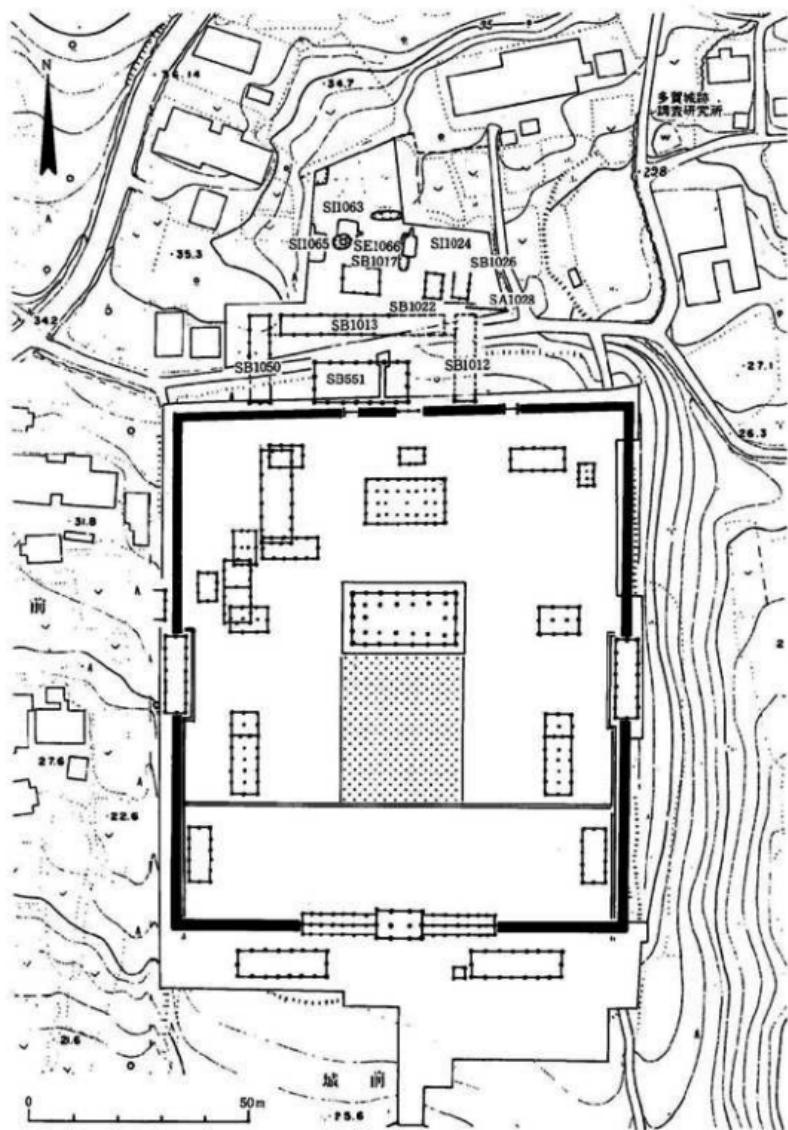
さて、これらの時期については、第 19 次調査で、SB551-A を第 III 期に、SB551-B を第 IV 期に位置づけた。また、第 31 次と今次調査では、SB553-A・B は第 II 期以降、SB1013-A は第 III 期以降ということが知られたにすぎない。これら 4 棟は、遺構のあり方から同一の変遷をたどったとみられることは先に述べた。以上を総合すると、これらの最初の造営は第 III 期以降であり、この一画は第 IV 期まで継続したものとみられ、比較的長い間維持されていたことが考えられる。

なお、SB553 の東側柱列上には、1 辺 60 cm の小さな柱穴がある。これは SB1013 の南側柱列の延長線上である。このことから SB553 と SB1013 の間を何らかの施設で閉塞したことが想定される。また、先に述べたように SB551 に対する SB553 と SB1050 の対称性を想定すれば、SB1050 は桁行 7 間であるとも考えられる。そして、SB1013 が SB553 に対するのと同じように SB1050 にも接近していたとするならば、SB1013 は桁行 12 間の東西棟とも考えられる。

こういった推察をするならば、SB551 は 3 棟の梁行 1 間の建物によってコの字形にとり囲まれ、これらは政庁の北方に隣接したまとまりをもつ一画を形成していたとも考えられる。

これまで、SB553、1013、1050 をわれわれは個別の建物として述べてきた。これに対して、その配置や梁行が 1 間である点などから、これらを回廊とも見られよう。しかし、そう考えた場合、SB553 と SB1013 との連結が不自然であると思われる所以、ここでは個々の建物跡と見ておきたい。

最後に、先の第 19 次調査において、SB551 の梁行が 30 尺(9m)であったためにこれを 10 尺等間の 3 間と推定し、そのように概報に記した(註 2)。しかし、SB551、553、1013、1050 が規則的に配置され、SB551 以外のすべての建物の梁行が 1 間 15 尺で計画されて



第34図 政府と北方地方の概略図

いることを思えば、SB551 の梁行も 15 尺等間の 2 間と見るべきなのかもしれない。

以上、推察を重ねすぎたきらいはあるが、この一画の存在する位置が政庁に近接する地であり、さらに配置にも注目すべきものがあるので、今後も詳細に検討し、その意義を明らかにしてゆきたい。

#### B 壱穴住居跡の年代

掘立柱建物群のさらに北側の谷の縁辺には SI1024、1063、1065 住居跡がある。いずれも第Ⅲ期の堆積層を掘り込んでおり、各住居跡の埋土には第Ⅳ期の瓦や須恵系土器が認められないことから、これらは第Ⅲ期に限定できよう。ところで、SI1063 と SI1065 は隣接し、同じような状態で木炭層に覆われている。また、カマドの構築法も類似し、カマド前面には弧状の溝があるといった特徴をもつ。これらのことから、SI1063 と SI1065 は同時に存在していた可能性が強い。

#### (3) 政庁北方隣接地域の変遷

ここで、これまでの調査成果を総合して、この地域がどのように使われ、変遷していたのかをまとめてみたい(第 34 図)。

第 I・II 期には、各種の施設や盛土整地地業はまったく認められず、この地域はほとんど使用されていなかったものと見られる。それに対し第Ⅲ期になると、この地域は初めて使われるようになる。政庁に最も近い平坦地には SB551 建物を中心として、梁行 1 間の 3 棟の建物がコの字形にとり囲んだ一画が配置される。そして、その北方の一段低い箇所には一部盛土整地地業を行い、桁行 3 間、梁行 2 間の小規模な建物群が建造される。こういったあり方は第Ⅳ期まで継続される。さらに、それらの平坦地より低く、谷の縁辺に沿った箇所には大小の壹穴住居跡が配置される。しかしながら、その後 10 世紀後半以降になると、様相が大きく変り、かつて建物群が営まれた箇所には何らの遺構も認められなくなる。また、壹穴住居跡があった谷あいには須恵系土器を多量に含む堆積層が形成され、井戸跡や性格不明の土壙跡、溝跡、ピットが検出されるにすぎなくなる。

註 1 『多賀城跡一昭和 47 年度発掘調査概報』 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972

註 2 『多賀城跡一昭和 48 年度発掘調査概報』 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1973

註 3 『多賀城跡一昭和 52 年度発掘調査概報』 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1977

### III 第33次発掘調査

#### 1 調査経過

第33次調査は多賀城市市川字五万崎41、42の1および2、45番地のうち、1,800m<sup>2</sup>を対象として実施した。五万崎地区は多賀城跡の西南隅にあたり、当研究所では官衙ブロックの構成と規模を把握するために、一昨年以来、継続してこの地区を調査している。その成果は各年次報告に詳しいが、調査の経過を述べる前に、これまでの調査の成果のうち主要な点をまとめると、次の3点に集約される。

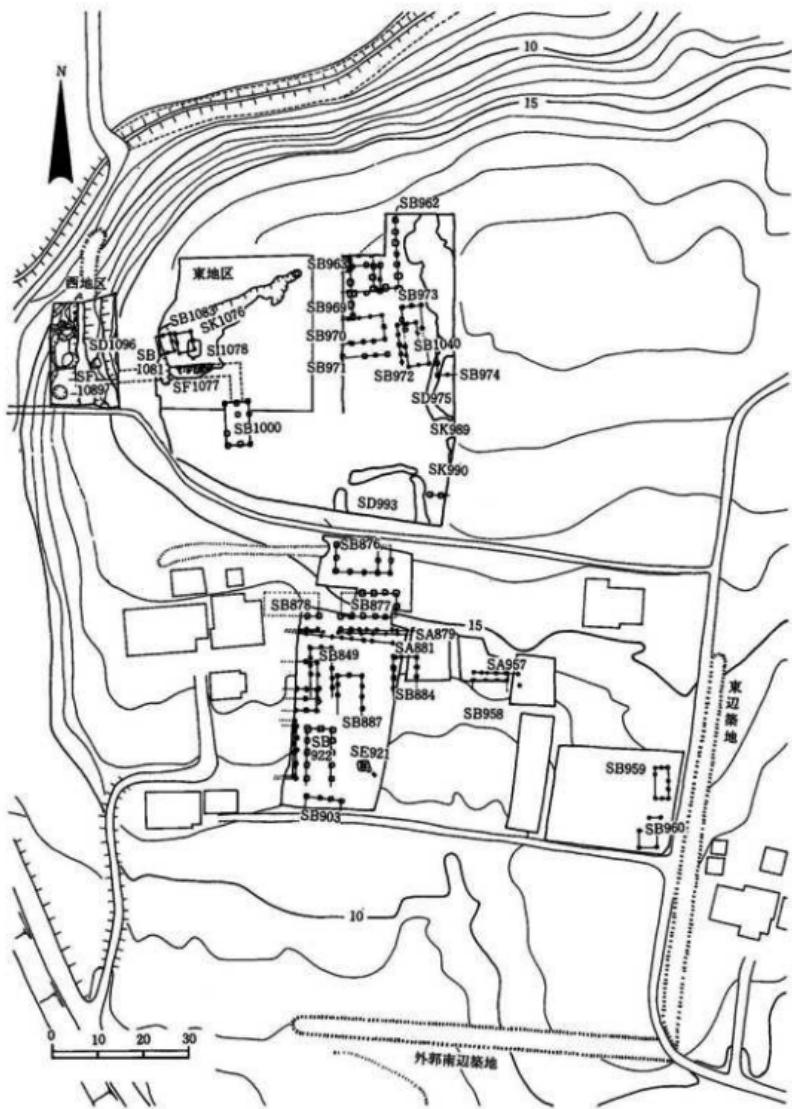
- (1) 五万崎地区の北寄りに外郭西門と考えられる掘立柱による八脚門がある。これが外郭西門であるとすれば、西辺外郭線築地状の高まりからは約35mに入り込むことになる。築地が入り込んで門にとりつくあたり方は外郭東門ですでに確認されている。
- (2) 八脚門の東には遺構の全くない空白地帯が続き道路遺構と考えられている。この道路遺構の北には平安時代前半に成立した掘立柱建物で構成された官衙がある。
- (3) 道路遺構を挟んで南の地区は平安時代後半に新たに成立した官衙がある。

そこで、今回の調査では次の点を大きな目的とした。

- (1) 残存する外郭西辺築地と八脚門との接続状況を把握すること。
- (2) 道路遺構の北にある平安時代前半の官衙ブロックの西限を押えること。

これらの問題点を踏まえ、あらかじめ設置していた基準点をもとに調査地区を設定した(第35・36図)。調査地区は南端をSB1000門の北妻にかけ、東端は農道を挟んで第31次調査地に隣接するように、さらに西辺築地と推定される土壘状の高まりの西裾を西端とした(7月17日)。しかし、西辺築地の高まりのある付近は山林であり、東は畠地であるため防風用の樹木を残す必要があったため、調査地区を東地区の畠地と西地区の山林とに分けて調査することになった。調査地区は東地区で東西35m×南北25m、西地区で東西15m×南北25mである。

まず、西地区に繁茂する樹木の伐採と伐根作業から着手し(7月18日～7月20日)、ついで、表土除去作業を行った(7月21日～8月1日)。遺構検出に先立ち、西辺の築地状高まりを切る農道の切り通し部分で断面観察を行った。その結果、現存する築地状高まりの大部分は砂質状の地山であり、その上に粗い積土状の黒褐色土がわずかにのる状況が観察され、遺構の遺存状況は極めて悪いものと判断された(8月3日)。さらに築地状の高まりの東側で、SD1096南北溝を発見し、これを精査した(8月3日～8月10日)。この溝の埋土はおおむね4層から成り、最下層に多量の多賀城第IV期の瓦を含むことから、



第35図 五万崎地区遺構略図

IV期以降に堆積の始まった溝であることが判明した。精査中に、この SD1096 溝を切る SK1091 土壌、さらに、築地状の高まりの東側にとりつく SX1090 積土を検出した。SX1090 積土は第IV期瓦を含む多量の瓦と黄褐色土で築いたものであった(8月10日)。

次に築地状高まりの精査に入った(8月11日～8月20日)。築地状高まりの南端より9mの範囲には、地山切り出し上に版築した築地基底部がわずかに残っていた(8月10日)。また北寄りの西側で1.8m間隔で4個の寄柱穴を発見し、この高まりが SF1089 外郭西辺築地であることが明確になった(8月11日)。SF1089 築地の西には SK1092・1093・1094 土壌があった。中でも SK1092 土壌埋まり土から須恵系土器がまとまって出土した(8月12日)。

8月21日には東地区の表土除去作業を東から開始し、8月28日に完了した。調査地区の北半部と東半部では表土下が直ちに地山になっていた。さらに東北から南西に傾斜する SK1076 土壌の輪郭を押えたが、この段階ではこの土壌を自然の谷ではないかと考えていた。つぎに、地山の露出する北半部、東半部の精査を開始した(8月28日～9月5日)。ここでは耕作に邪魔な地山石の抜取り穴以外はほとんど見るべき遺構はなかった。したがって SB1000 門から東に延びる道路の北に存在する官衙は、今調査地までは広がらず、調査地東の農道付近がその西限になると判断された。

9月6日には SK1076 の精査に入った。この谷状の遺構は東北部は巾約4mの不規則な細長い形態であるのに対し、南西部は径14mの円形を呈しているため、土壌の重複をも考慮し、東北部をA区、西南部をB区と仮称して、分層的に遺構の検出に努めた。その結果、1層、2層面では全く遺構がなかったため、これを除去した(9月8日)。しかしB区3層面で、SX1086 工房跡が発見され、しかも下層に数枚の堆積層の存在が予測された。そこで、9月9日には造方を設定し、各層の検出遺構の実測に備えた。

層位的な発掘調査の結果、A区は1～8層の自然堆積層からなる土壌で、各層には遺構はなかった。一方、B区では1～9層の堆積層があり、3層、4層、5層、8層面で遺構を検出した(9月7日～10月27日)。B区では第4層から南北棟1間×2間のSB1083 建物跡(9月25日)と SX1084 暗渠状瓦敷き施設(9月26日)を、5層からは東西棟2間×2間以上のSBI081 建物跡と SD1082 溝跡を(10月2日～5日)、8層面からは SA1080 掘立柱穴群を(10月8日～12日)、9層面からは SI1078 住居跡をそれぞれ発見した(8月17日～20日)。さらに第9層上に乗る SF1076 築地基礎地業を検出した(10月12日～10月25日)。最後に、最下層の9層を一部地山まで掘り下げ、地山面から掘り込む遺構が存在しないことを確認した(10月26日)。第9層には多賀城第II期の焼け瓦がかなり多く含まれていた。そのためこの地区的すべての遺構が第III期以降のものであることが判明した。すなわち、SK1076 土壌が掘られ、9層の埋土があり、その上に SF1077 築地基礎積土や SI1078 住

居跡が造営された事実が把握されたのである。

遺構検出と並行して、西地区の実測(10月9日～10月16日)と調査地区的四周及び主要遺構の土層断面図を作成した(10月20日～10月30日)。さらに補足調査の結果、西地区南端で、SB1095 建物跡かと思われる礎石の根石を検出した(10月29日～30日)。

10月30日には器材を撤収し、11月1日～11月10日に埋戻し作業を行い、全調査を終了した。

註1 五万崎地区の調査は第28・29・31次調査で実施されている。

「宮城県多賀城跡調査研究所年報」1976・1977

## 2 発見遺構

第33次調査で発見した遺構には掘立柱建物3、竪穴住居跡1、築地および築地基礎地業2、暗渠状遺構1、工房跡1、土壤、溝跡多数がある。以下、主要な遺構について東地区、西地区に分けて記述する(第35・36図)。

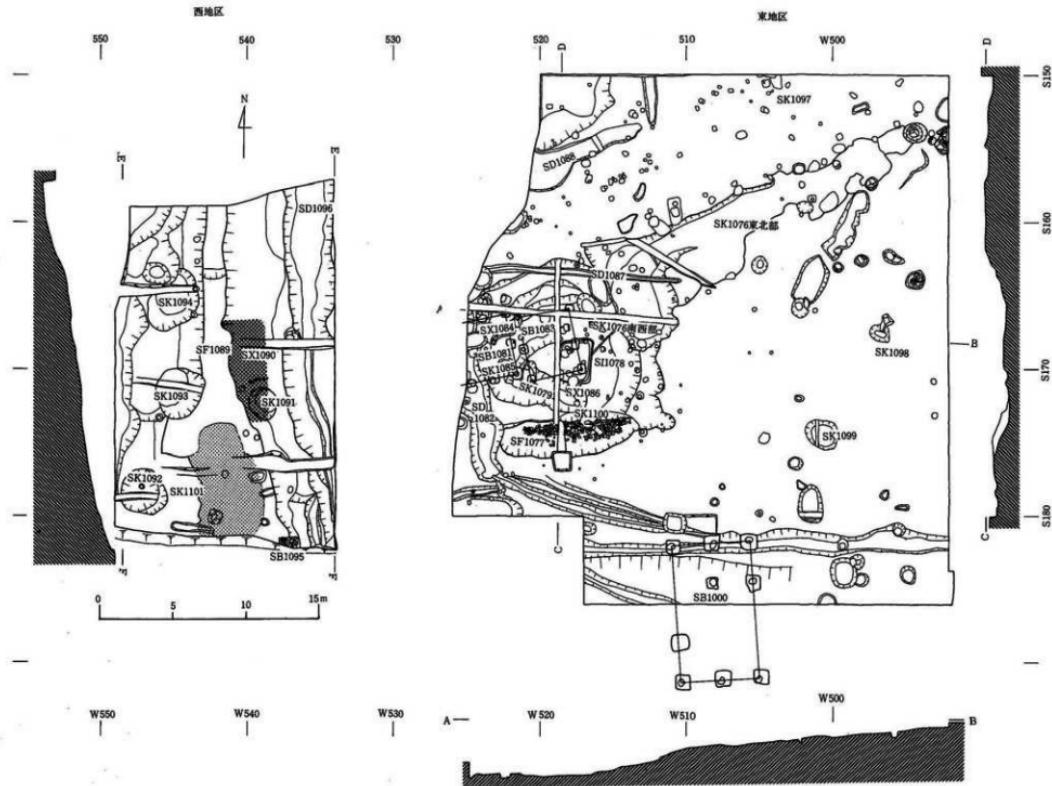
### A 東地区の遺構

#### (1) SB1000 門跡 (第37図)

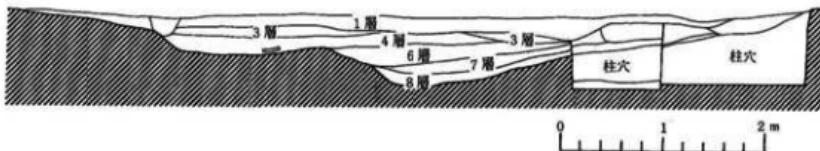
SB1000 門跡は南北棟2間×3間の掘立柱による八脚門である。この門は昨年度第30次調査で検出したものであるが、今回、再発掘したものである。柱穴の一部は後世の溝で完全に破壊され、消失している。残存する柱穴の柱抜穴を基に柱間寸法を復元すると、桁行は2.7m(9尺)等間、桁行は2.7m+4.0m+2.7m(9尺+13尺+9尺)になる。建物の方向は調査基準線に対し、北で約4度程西に振れる。柱穴はおおむね1.1m方形で、茶褐色粘質土で互層に埋められている。柱抜穴からは第III期の平瓦が出土している。

#### (2) SKI076 土壙跡 (第36図)

SKI076は調査地区的東北隅から西南隅にかかる大きな土壙跡である。土壙の東北部は巾4m、長さ19m、深さ約50cmの溝状をなす。一方、西南部は径14mの円形をなすが一連の土壙である。土壙は地山面から掘り込まれ、この地区での検出遺構の中では最も古い。土壙の底は凹凸があるが、東北から西南に向って傾斜し、最も深い西南部では地山面より1.2mを測る。土壙を挟んで、南の地山は岩石や礫が露出しており、北のそれは粘質土である。粘質土の分布する範囲に土壙が掘られていることを考慮すると、土壙の性格は土取り穴かとも考えられる。土壙の埋土は大略9層に分れる。この土壙の西半部の堆積



第36図 第33次発掘調査遺構全体図



第37図 SK1076 土壌東北半部の層位断面図

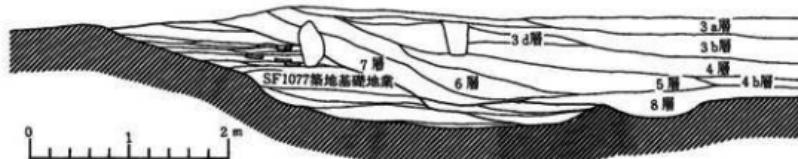
層からは主要な遺構が層を異にして検出されている。まず、土壌の層序関係を記載しておこう。

土壌東北半部の層位は1～8層に分れる(第37図)。1層は茶褐色の砂質土である。2層はやや淡い茶褐色土で、局部的に分布する。第3層は地山屑が分解した小粒の黄褐色土を斑点状に含む灰褐色の砂質土である。第4層はやや、粘土化した灰褐色の砂質土で、木炭粒をかなり含む。第5層は局部的に見られる黄褐色の粘質土である。第6層は灰色を帯びた黄色の砂質土で、小粒の地山層を含む土層である。第7層は大粒の黄色地山ブロックを多量に含む黄灰色の砂質土である。第8層は黄色地山ブロックと褐色地山ブロックがまだらに入る青灰色の粘質土である。

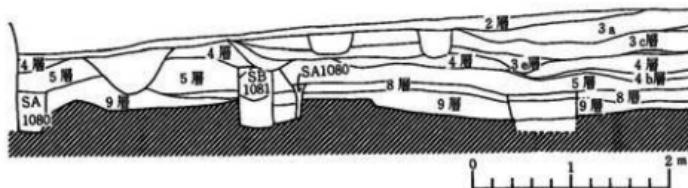
一方、円形を呈する西南半部の層位は大略9層に分けられる(第38・39図)。1層は灰白色土層であり、局部的に分布する。第2層は炭化物を若干含む褐色の砂質土で、土壌の東半部に厚く堆積している。第3層は基本的には若干の木炭粒を含む茶褐色の砂質土とみられるが、地山ブロックや木炭屑の含み具合、及び色調等の違いにより、3a層、3b層、3c層、3d層、3e層の5亜層に分れる。第4層は灰褐色の砂質土で、層中にはかなり多量の木炭粒を含む。第4b層は灰白色的粘土層で、厚さは3～5cm程と薄い。第5層は地山ブロックがフイリ状にまだらに混る黄褐色の粘質上層である。第6層は、やはり地山ブロックがフイリ状に入る暗褐色土である。第7層は黄色粘土の小粒を多く含む赤褐色の砂質土で、土壌の周壁付近で特に顕著にみられる。第8層は黄色粘土のブロックや灰白色の岩屑を含む、強く粘土化した暗青灰色の粘土層である。第9層は黄褐色土と灰褐色土が混在したフイリ状の土層で、中に若干の木炭が含まれる。

東北半部と西南半部の層位を、層の連続状況、土層の土質、色調をもとに対比した場合東北部の4層、5層、6層、8層はそれぞれ西南部の4層、5層、7層、8層にあてることができる。

この土壌の埋土、特に西南半部では、埋土の層を異にして、各種の遺構が存在する。層位ごとに検出遺構の主なものを述べると、3層面ではSX1086工房跡、4層面ではSB1083建物跡、SX1084暗渠施設、5層面ではSB1081建物跡、SD1082溝跡、8層面でSA1080



第38図 SK1076 土壌南北方向土層断面図



第39図 SK1076 土壌東西方向土層断面図

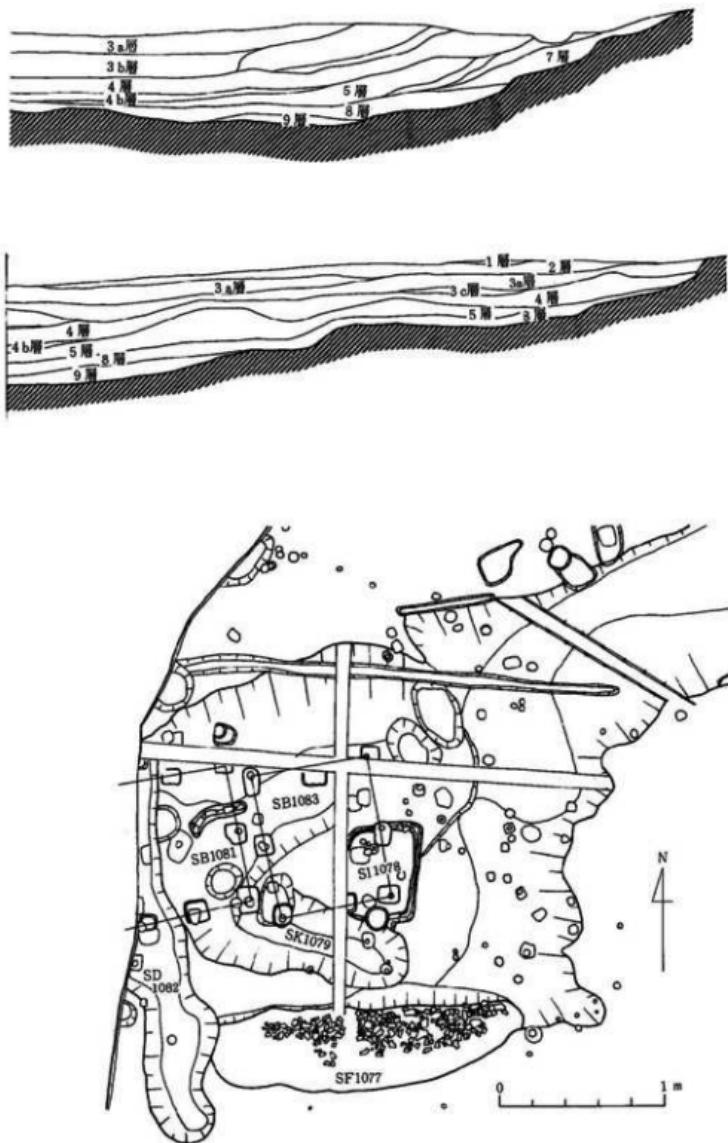
柱穴群、9層面でSI1078 壓穴住居跡、SF1077 築地基礎地業等があげられる。東北半部には、ほとんど遺構はない。

西南半部の層位と出土遺物の傾向を述べると、最下層には、2次的に火を受けた第II期の焼瓦がかなり出土し、6層までは第I期と第II期の瓦だけで占められる。5層、4b層ではそれに第III期の瓦が加わる。4層より上層では第IV期の瓦がさらに加わる。土器については第4b層より下層には須恵器と土師器に限って出土し、第4層より上層には須恵系土器が含まれる現象が注目される。

### (3) SF1077 築地基礎地業 (第38・40図)

SF1077はSK1067 土壌の南端に構築した築地の基礎地業と考えられる積土である。積土はSF1077の東半部ではSK1067 土壌の南斜面にあたる地山上に直にされ、西半部では積土の一部がSK1067 土壌埋土の第9層上に乗る。積土の範囲は東西長約9m、最大巾約2.5mの半月形で、南端はSK1067の縁端と一致するが、北端は一直線に延び、その方向はSB1000 門跡の桁行方向と直交する。

積土は大略2層に区分される。下層は黄褐色粘土・褐色砂質土・地山混じり赤褐色粘土を巾5cm程に粗い互層に積んだ、厚さ70cmの土層である。上層はやはり黄色粘土、褐色砂質土の互層であるが、積み方が非常に丁寧で、版築状を呈している。上層の上半部には第II期の平瓦や丸瓦を敷きつめている。直線的に延びる北端縁には20cm前後の河原石を並べて、補強している。



第40図 SF1077 築地基礎地業平面図

版築状の積土であることや、瓦敷きの北端が一直線になり、その方向が SB1000 門跡の桁行方向と直交することから、外郭西辺築地が折れ曲って、SB1000 門にとりつく築地の基礎地業と考えられる。後世の削平により、土壤の凹みに構築した部分を残すだけであり、寄柱等も検出できないため、基底巾はわからない。SB1000 門跡北妻柱と基礎地業北側線延長との距離は約 9m であり、外郭東門とのそれが 11m であるのに対し、やや短い。

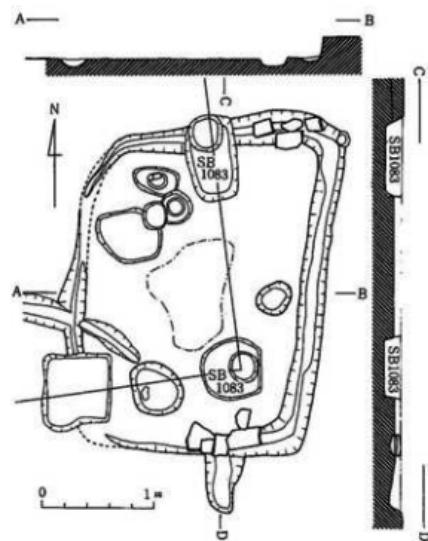
築地基礎に使用された瓦には軒平瓦 640 を始め、多量の第 II 期の平瓦、丸瓦がある。中には 2 次的に火を受けたものもあり、この地業は第 III 期の所産とみられる。

#### (4) SI1078 住居跡（第 40・41 図）

SI1078 は SF1077 の北 5m にある竪穴住居跡である。検出面は SK1067 土壌埋土第 9 層面である。住居跡の遺存状況は悪く、西壁はほとんど破壊されている。住居跡の埋土は地山ブロックを多く含む黄褐色土である。SK1067 土壌埋土第 8 層がこの住居跡の全体を覆っていることから、第 8 層堆積以前に大きな削平があったことを知る。住居跡の規模は東西約 2.4m、南北約 3m と小ぶりで、その平面形は隅丸長方形を呈す。床面はほぼ平坦で、掘り込まれた第 9 層が床になっている。床面中央部には、径 1m の範囲に木炭の分布が認められる。周壁は東で深さ 15cm、北壁で 20cm 残存しているだけであるが、ほぼ垂直に落ちる。周溝は断面が U 字形で、床面レベルで、周溝上には第 II 期の平瓦、丸瓦を敷いている。周溝の埋土は地山ブロック入りの黄褐色土である。柱穴は認められなかった。カマドと煙道は南壁の中央東寄りにとりつく。カマドの袖は破壊されており、煙道も底面部分がかろうじて残っており、現存する巾は 40cm、長さは 60cm である。床面や周溝埋土中からの出土遺物には施設瓦の他、土師器の妻等がある。

#### (5) SK1079 土壌跡（第 40 図）

SK1079 は SF1077 築地基礎地業と SI1078 住居跡の間にある東西方に向に長い溝状の土壌である。SK1076 土壌の埋土第 8 層から掘り込まれて



第 41 図 SI1078 住居跡平面、断面図

おり、その規模は長さ約 6m、巾 2m、深さ 0.3m である。土壤の埋土は暗青灰色の粘質土である。埋土には第 II 期の平瓦と須恵器の壊、甕の破片が含まれている。

#### (6) SA1080 柱穴群

SA1080 は SK1067 土壌埋土の第 8 層から検出した柱穴群である。SK1079 土壌の北約 6m にある。SBI081 建物跡の柱穴と一部重複して、これに切られている。柱穴は不揃いであるが、一辺約 70 cm 程度の方形のものが多い。柱痕跡を有するものもあるが、柱穴列か建物跡かは判然としない。

#### (7) SB1081 建物跡 (第 42 図)

SB1081 建物跡は SI1078 住居跡の西約 6m の位置にある東西棟 2 間 × 2 間以上の掘立柱建物跡である。建物跡の柱穴は SK1076 土壌の埋土 5 層より掘り込まれ、一部 SAI081 柱穴群と重複し、これを切る。南側柱列の東から二番目の柱穴を除き、すべてに柱痕跡がある。柱痕跡を基にした柱間寸法は梁行で

2.1m+2.1m、桁行 南側柱で東より  
1.61m+1.62m、北側柱で 1.50m である。  
東妻柱列で測定した建物跡の方向は北で  
約 13 度西に振れる。柱穴は一辺 65 cm 程  
の方形で、その壁は垂直に落ち、深さは  
60 cm を測る。柱穴の埋土はおおよそ 3 層  
に分かれる。上層から灰白色粘土ブロックを含む灰茶褐色土、地山ブロックを含む暗灰褐色土、黄色土ブロックを含む灰黄褐色土である。柱痕跡は径 20~30 cm の  
円形である。柱穴埋土中からは第 II 期の  
平瓦や須恵器壊が出土している。

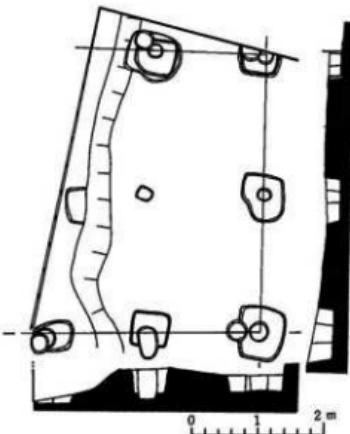
#### (8) SD1082 溝 (第 36・40 図)

SD1082 は東地区の西端にある長さ

13m、巾 2m、深さ 0.4m の南北方向の U 字素掘り溝である。溝は SK1076 土壌の埋土 5 層面から堀り込まれ、SB1081 建物跡の柱穴を切る。溝の埋土は地山ブロックを含む茶褐色土で、埋土中に第 II 期から第 IV 期の瓦が含まれている。

#### (9) SBI083 建物跡 (第 43・44 図)

SBI083 は SB1081 建物跡の東に位置する南北棟 1 間 × 2 間の掘立柱建物である。この建物は SK1076 土壌の埋土 4 層から検出された。建物跡の方向は東側柱列で測定して、北で約 13 度西に振れる。柱痕跡を基にした梁行の柱間寸法は北妻で 3.49m、南妻で 3.41 cm



第 42 図 SB1081 建物跡平面、断面図

と近似した数値を示す。桁行のそれは東側で北から $2.20m+2.07m$ 、西側で $2.11m+2.34m$ となり、かなりのばらつきがある。柱穴は方形で、残存する深さも60cm程度のものが多い。すべての柱穴に径20cm程度の柱痕跡がある。西南隅の柱穴には柱根が残る(第45図)。柱穴の埋土は灰褐色砂質土、黄褐色砂質土、青灰色粘土の3層に分れる。柱穴埋土から軒丸瓦220や第II期の平瓦、須恵器坏が出土している。

#### (10) SX1084 瓦敷き暗渠 (第45図)

SX1084はSB1083建物跡の西3mにある。

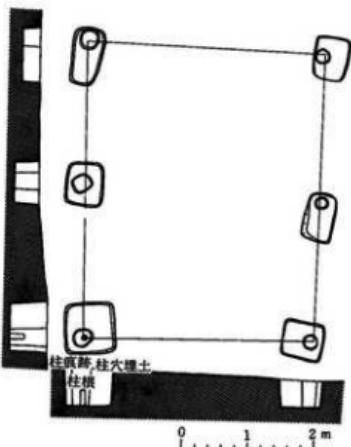
SX1084はSK1076土壤の埋土第4層上面に設置した東西1.4m、西で南に0.5m折れ曲る瓦施設である。その工程は、まず第4層面上に巾30cm、深さ10cmの浅い瓦を据付けるU字溝を掘り、そこに、玉縁付丸瓦の完形品を7個と平瓦1個とを、いずれも凸面を上に向けて連結する。さらに瓦の周囲を木炭粒が混じる暗褐色土で裏込めしている。伏せた丸瓦と据付溝の底面との間隙には若干グライ化した木炭混じりの淡い暗褐色土が詰っている。L字状に完結した溝状の施設であることから、暗渠状の施設と考えられる。完形の丸瓦の中には、廻と刻印した第II期の瓦がある。

#### (11) SK1085 土壙跡 (第36図)

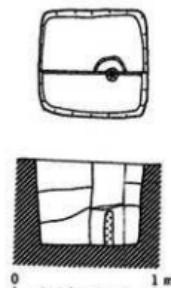
SKI085はSK1084暗渠状遺構の南1.5mにある。SKI076土壤の埋土4層より掘られ、その平面形は約1mの円形で、深さは35cmを測る。土壤埋まり土は暗灰褐色土で、中に若干の木炭を含む。第II期の平瓦が埋土中より出土している。

#### (12) SX1086 工房跡 (第46図)

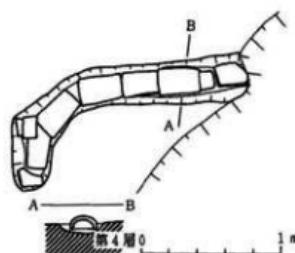
SX1086はSK1076土壤の埋まり土第3層を切る径70cmの円形ピットである。周壁は垂



第43図 SB1083 建物跡平面、断面図



第44図 SB1083 建物跡の柱穴



第45図 SX1084 瓦敷き暗渠

直に立ち、深さは 10cm ある。上端から 5 cm 程の周壁は焼けている。ピット中の堆積土は 2 層に分れる。下層は厚さ 2~5 cm の褐色砂質土で、上層は厚さ約 5 cm の木炭層であり、周壁の焼けた巾とほぼ一致する。このような例は、この地区の南約 90m の五万崎地区でも見られ(註 1)、工房跡かと考えられる。

#### (13) SD1087 溝跡 (第 36 図)

SD1087 は SK1067 土壙の北端部にある東西方向の U 字溝で、SK1067 土壙の埋土 3 層を切る。東西約 13.5m、溝巾 0.4m、深さ 0.2m の規模で、埋土は黒褐色の砂質土で、中に第 II 期の瓦と須恵器の糸切りの壊が含まれている。

#### (14) SD1088 溝跡 (第 36 図)

SD1088 は東地区の西北隅にある東西方向の U 字溝である。現存する長さは約 8m、巾は 1~2m と西で広がり、底は東から西に急斜している。埋土は地山ブロック混りの褐色土で、中に第 II 期の瓦や須恵器を含む。

#### (5) その他の土壙跡

その他の遺構として SK1097~1100 土壙跡がある。

SK1097 土壙は SK1076 土壙の東半部の北にある柱穴状の深い土壙である。

SK1098 は SB1000 門跡北妻の北東約 8m にある径約 2m の円形土壙で、埋土は黒色土である。地山の石の抜き穴かとも考えられる。

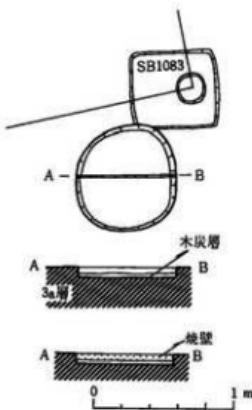
SK1099 土壙は SK1098 土壙の北東 10m にある径 1m、深さ 0.8m の土壙である。これも地山石の抜き穴である可能性が強い。埋土はやはり黒褐色土である。

SK1100 土壙は SK1076 土壙の南端にあって、SF1077 築地基礎地形の上層で発見した土壙である。SK1076 土壙埋土の第 3a 亜層から掘り込む径 1.5m 前後の深い土壙である。埋土は炭を若干含む茶褐色砂質土である。

## B 西地区の遺構

#### (16) SF1089 築地跡 (第 47・48 図)

SF1089 は外郭西辺築地跡である。後世の削平により、版築土は調査地区の西端から約 9m の範囲に残るだけである。築地基底部は地山切り出しによる。築地北半部で築地西側の寄柱穴が 4 個検出されている。寄柱穴は径 20~30 cm の円形で、柱穴の中心で測定した

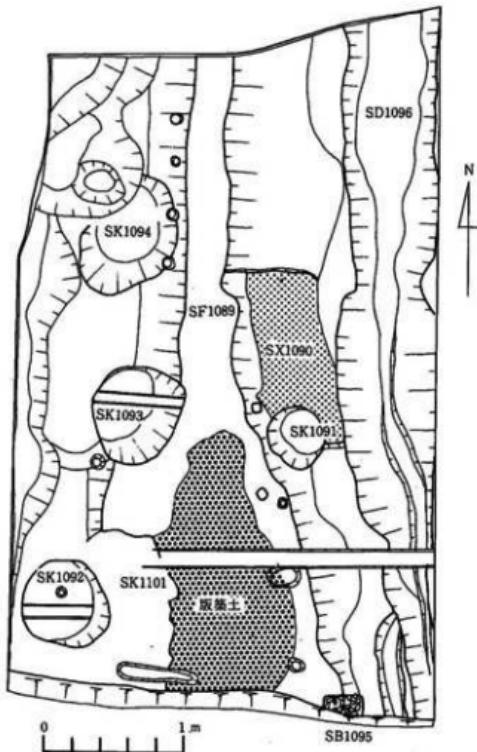


第 46 図 SX1086 工房跡

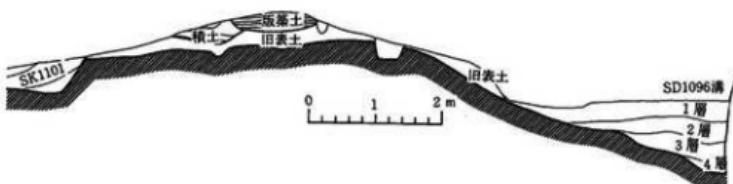
柱間寸法は北から  $1.6m + 1.95m + 1.7m$  である。版築は地山上の旧表土上に行われ、築土は大略 2 層に分かれる(第 48 図)。下層の積土は黄褐色粘質土や褐色土を厚さ 10cm 程度で互層に粗く積んだもので、その厚さは 30 cm を測る。上層の積土もやはり褐色粘質土、黄色粘質土を用いて、丁寧に版築したものであり、その厚さは 30 cm である。この版築土がさきの SF1077 築地基礎地業の北側線の延長より約 8m 程南に延びていることから、この版築は SF1077 築地基礎とは時期の異なるものである。調査地区の南端の、築地の中心より東 4m には、SB1095 磚石建物と考えられる根石がある。また築地東斜面の崩壊土上には SX1090 瓦積み施設が構築されている。

#### (17) SX1090 積土遺構 (第 47・49 図)

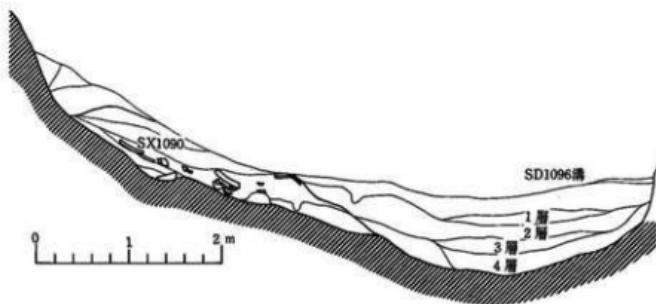
SX1090 は SF1089 築地崩壊土上に多量の瓦を含む褐色土や黒褐色



第 47 図 西地区の遺構平面図



第 48 図 SF1089 築地断面図



第49図 SX1090 積土遺構、SD1096 断面図

土で版築状に積土した遺構である。積土の範囲は SF1089 築地の東側の立上がりから巾 3.5m、長さ 6m である。積土の厚さは平均 40 cm で、積土は 4 層に分れる。積土の南端は SK1091 土壙によってこわされ、また東端は SD1096 溝によって切られている。積土中には 821(or 721)か軒平瓦を始め、第 II 期から第 IV 期の瓦が使われている。とりわけ、第 IV 期の瓦が圧倒的に多い。第 IV 期以降の積土遺構である。

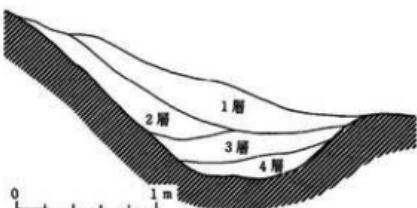
#### (18) SKI091・1092・1093・1094 土壙跡（第 47 図）

SKI091 は SX1090 積土遺構の南にあってこれを切る径約 2m の円形の土壙である。埋土は黒褐色土で、中に軒丸瓦 220 をはじめ、第 II 期から第 IV 期の瓦を多量に含む。

SKI092 は調査地区の西南隅にある径約 3m の円形の土壙で、その深さは約 1.5m を測る。地山面から掘り込まれ、その埋土は 4 層に区分され(第 50 図)、上層より軟かい褐色砂質土、黒褐色の砂質土、灰褐色の砂質土、地山ブロック混りの褐灰色粘質土の順になる。下位の 2 層からは、第 II 期から第 IV 期の瓦の他、須恵系土器の小皿や壺が多量に出土している。

SKI093 は SK1092 土壙の北 7m にある土壙である。平面形は径 3.5m の円形で、深さは約 80 cm を測る。埋土は黄褐色の砂質土で一手に埋っている。埋土中に、刻印瓦(伊・丸)などの他、やはり第 II 期から第 IV 期の瓦を含む。

SKI094 は SK1093 土壙の北 6m にある円形の土壙である。直径 3.5m の円形で、埋土は黄褐色の砂質土で一手に埋っている。埋土中から、II 期から IV 期の瓦



第50図 SK1092 土壙断面図

が出土している。

#### (19) SB1095 建物跡（第47図）

SB1095は調査地区の南端、SF1089築地の推定中心より約4.5m程東で検出した礎石式と考えられる建物である。根石の据穴は東西長1.4m、南北長は農道により削平されているが70cmを残す。東北、北西角より判断して平面形が方形をなすことから柱穴に壇地業をした根石と思われる。根石は15~20cmの割石が多い。根石とともに第II期以降の平瓦を含む（破片であるため確実な時期判定は出来ないが、第I期の平瓦ではない）。この根石の位置はSB1000門跡の北妻柱列の延長にほぼ一致する。またSD1096溝が根石の付近で立ち上がり平坦な地形になることやSF1089築地の版築土がSF1077築地地業北縁延長線より更に8mも南に延びていること等から、根石はこの版築土にとりつく門跡の柱穴かとも考えられる。SF1077築地基礎地形が第III期の所産であり、この根石据穴中に第II期以降の瓦が含まれることを考慮すると、この建物は第III期以降の門跡である可能性が強い。なお、農道の南切通しでは、根石とともにそれと重複する掘立柱穴を確認している。農道の南には土壇状の高まりが残り、ボーリング調査では根石状のものが存在しそうである。

#### (20) SD1096溝（第47・49図）

SD1096はSF1089築地の東にある巾約3mの大溝であり、SF1089築地、及びSX1090積土遺構を切っている。溝は南から北に向う急斜面に掘られているが、調査地区的南端で急に立ち上がる。溝の埋土は自然の堆積土で大略4層から成っている。最上層の埋土第1層は細かい岩くずのまじる黒褐色の砂質土である。第2層は黒色土がやや混る黄褐色砂質土である。第3層は地山の黄色ブロックを多量に含む黄褐色土である。第4層も地山ブロックを多量に含むが、第3層に比べて黄色の強い褐色砂質土である。

堆積層から多量の瓦と若干の土器が出土している。瓦では第III期、第IV期の平瓦、丸瓦が主体となる。埋土の第1層から4層の間で、瓦の種類、数量とも変化がみとめられない。したがって、この溝は第IV期以降に掘られ、しかもかなり短期間のうちに埋土が堆積したものと判断される。

#### (21) SK1101土壙跡

SK1092土壙の南にあって、SF1089築地積土を一部切る不定形の浅い土壙である。土壙の北端の輪郭ははっきりしない。埋土は若干の灰白色粘土を含む茶褐色土である。

註1 「宮城県多賀城跡調査研究所年報」1976・P23(第28次調査)でも方形の柱穴の周壁が焼け、埋土上層に木炭層、下層に粘土を詰めた施設があり、中から鉄滓等が出土している。本遺構の場合、平面形は異なるが、工法が同じであるため、工房跡と考えておく。

### 3 出土遺物

第33次調査の出土遺物には多量の瓦のほか須恵器、土師器、須恵系土器、土製品、石製品、鉄製品などがある。ここでは遺構および層位ごとに、出土遺物の傾向を述べ、さらに主要な遺物について説明する。なお、出土遺物についても遺構に合わせて東地区、西地区別けて説明する。

#### A 東地区の出土遺物

##### (1) SK1076 土壌の出土遺物

SK1076 土壌は東北半部と西南部に分れるが、東北部区からは微量の出土遺物があるだけで、特記すべきこともないため西南部B区について述べ、東北半部は割愛する。

SK1076 土壌内の堆積層は9層に大別され、その内の3・4・5・8・9層からは各種の遺構が発見されている。ここでは、層位ごとに出土遺物を説明する。

出土遺物の全体的な傾向としては、土壌埋土第9層から第6層までは多賀城第I・II期の瓦にかぎって出土している。第5・4b層ではこれに第III期の瓦が加わり、第4層から上層には第IV期の瓦が含まれる。また、土器では第4b層より下層からは須恵器と土師器に限って出土するのに対し、第4層から上層では須恵系土器が加わる。出土瓦のうち、時期の判別が可能な平瓦について、層ごとに出土点数を表示すれば、(表4)のようになる。

表4 SK1076 土壌埋土の層位別瓦出土量表

	平瓦					丸瓦
	第I期	第II期	第III期	第IV期	不明(I期以外)	
埋土1層	1	2	1	0	1	0
2層	2	40	25	4	0	44
3a層	5	137	54	13	12	163
3b層	4	127	12	6	20	104
3c層	0	13	1	6	0	7
3d層	0	33	2	0	0	23
3e層	0	6	0	0	0	0
4層	2	180	39	3	16	178
4b層	1	9	1	0	0	7
5層	2	18	3	0	2	63
6層	0	15	0	0	0	8
7層	2	52	0	0	0	31
8層	5	198	0	0	14	103
9層	0	43	0	0	0	18
計	24	873	138	32	65	749

#### (a) SK1076 土壌第9層の遺物

平瓦、丸瓦、須恵器、土師器などがある。平瓦(43点)はすべて多賀城第II期のもので、中には2次的に火を受けたものもある。須恵器には甕と壺の器種があるが、すべて破片である。甕の体部には凸面には平行叩き目、凹面にはアテ板の刻文圧痕を残すものと、凹面無文のアテ板痕を残すものの各1点がある。壺はヘラ切り1点である。土師器には甕がある。破片であるが、調整にはロクロを使用していない。底部は1点あるが、これには木葉圧痕がみられる。その他、縄文時代の磨製石斧(第73図1)がある。

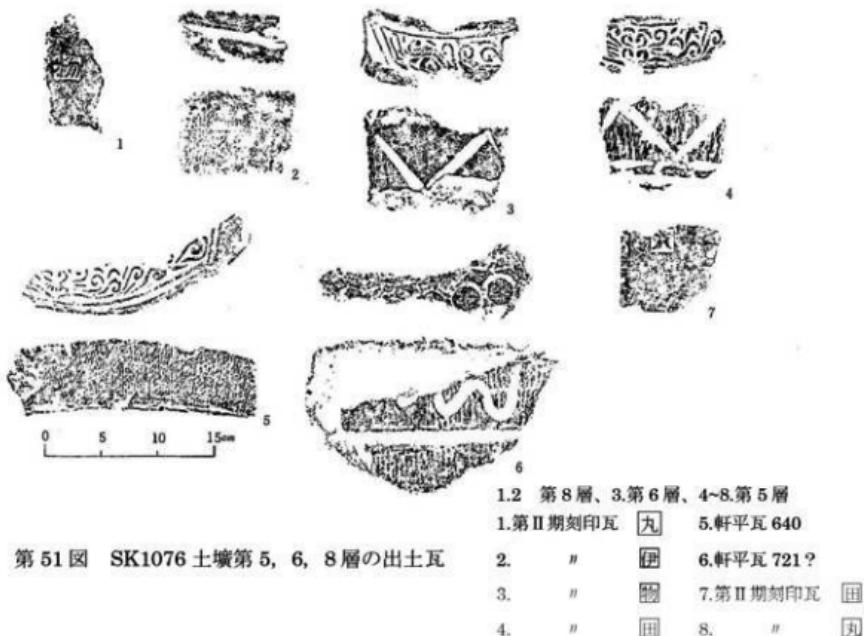
#### (b) SK1076 土壌第8層の出土遺物 (第51・52図)

第8層からは瓦、須恵器、土師器、硯、砥石などが出土している。瓦は第I期と第II期のものに限られる。中でも平瓦では第I期平瓦(5点)に対し、第II期平瓦(198点)が圧倒的に多い。第II期の平瓦には凹面に「丸」と押印したもの(図1)がある。図2は凸面に「伊」と押印した丸瓦である。軒平瓦640の破片が1点ある。須恵器には壺、高台壺、蓋、長頸瓶、甕などがある、壺はヘラキリのもの(10点)(第52図1~6)が主体を占める。破片ではあるが、糸切り後底部を回転ヘラケズリ調整したもの(1点)や糸切りのもの(1点)もある。ヘラキリの壺には底径に対して器高の低いもの(図1・2・3・5)と底径に対して器高の高いもの(図4・6)の2種がある。図5の内面は硯として転用されている。(図2)はヘラキリの壺の底部破片で「尹」と墨書している。高台壺はヘラ切り後、ヘラケズリした後、高台を付けたものである。蓋には返りを有するもの(第52図8)と口縁端がやや内に向かって折れ曲るもの(第52図9・10)がある。(10)には高い宝珠つまみがつく。長頸瓶は頸部、肩部、体部の破片である。甕には口縁部、体部、底部の破片がある。(第52図13)は口縁部の破片で、2本の隆縁を廻らし、下に波文を櫛描きしている。土師器は非常に少ないが、器種としては壺、塙、甕等がある。壺には糸切りのもの(1点)、切り離し後回転ヘラケズリ調整を加えたもの(1点)や底部と体部下端を手もちヘラケズリ調整したもの(第52図11)などがある。(11)の内面には漆が付着しており、漆作業に用いられた壺と思われる。塙は破片であり、内外面をヘラミガキしている。甕はすべてが破片である。口縁部の観察すると、ロクロ使用のものと、使用しないものとが混じっている。底部破片には木葉圧痕を残すもの(1点)がある。その他、円面硯の破片と砥石(2点)がある。

#### (c) SK1076 土壌7層の出土遺物

出土遺物は極めて少なく、すべて破片である。瓦と須恵器、土師器がある。瓦では第I期平瓦2点、第II期平瓦52点、丸瓦31点がある。須恵器には長頸瓶の体部破片(1点)と甕の体部の破片(9点)があるにすぎない。土師器では糸切りの壺が1点ある。

#### (d) SK1076 土壌6層の出土遺物 (第51図)

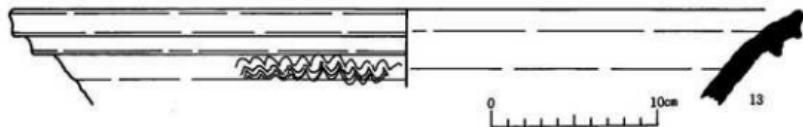
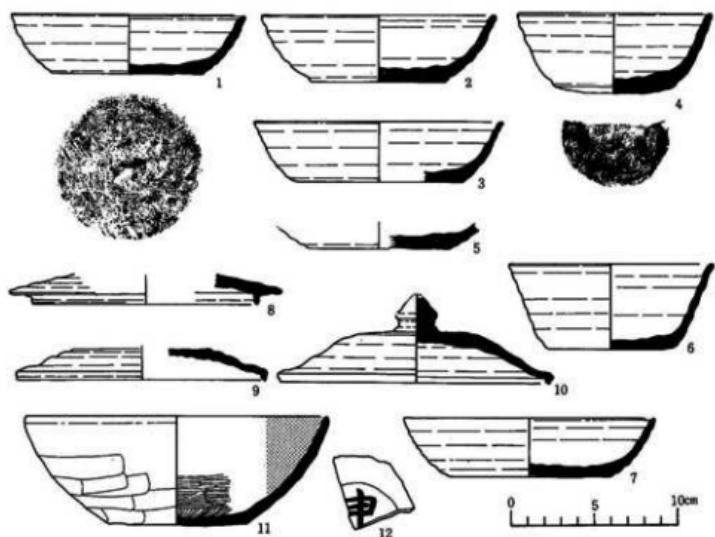


第51図 SK1076 土壌第5, 6, 8層の出土瓦

第6層からは瓦、須恵器、土師器などが出土しているが、破片のため図示できるものは少ない。瓦には第II期の平瓦15点と丸瓦8点がある。図6は回面に「物」と押印した平瓦である。須恵器には壺と甕がある。壺にはヘラキリ3点と底部全面を回転ヘラケズリ調整するもの(1点)がある。ヘラキリの壺には底部にヘラ記号をしたるものがある。甕は体部の破片である。土師器には壺(4点)と甕の体部破片が若干あるにすぎない。壺は底部が著しく磨耗しており、切り離し法等は判別できない。

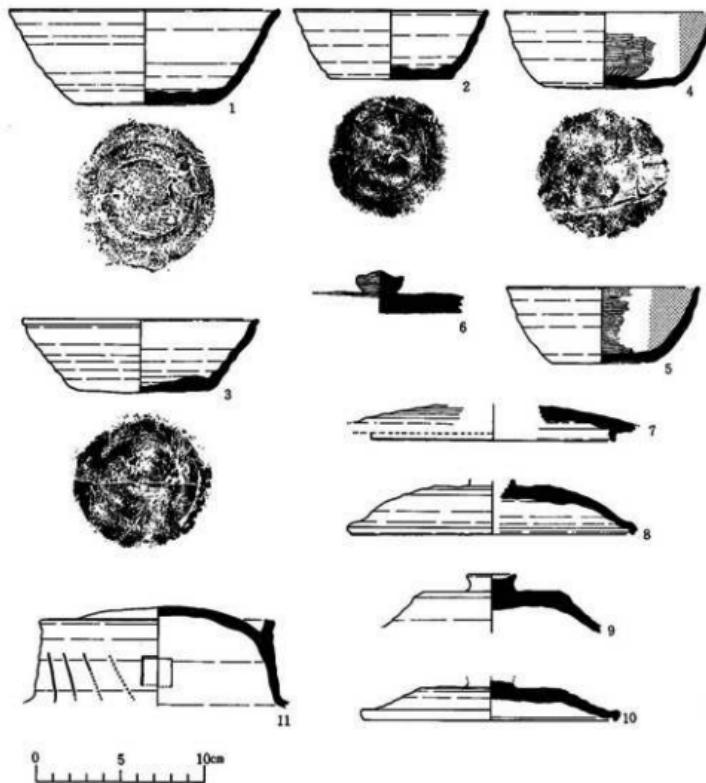
#### (e) SK1076 土壌5層の出土遺物 (第51・53図)

第5層からは瓦、須恵器、土師器、硯、砥石の他、縄文時代の「くぼみ石」やスクレーパーなどが出土地している。瓦には軒平瓦、平瓦、丸瓦がある。軒平瓦は2点ある。第51図5は第II期の軒平瓦640であって、図6は軒平瓦721かと思われる。平瓦は第I期のものの2点、第II期のもの20点、第III期のもの3点である。第III期の平瓦が出土する点が注目される。押印の瓦には平瓦回面に「丸」図8が3点、丸瓦凸面に「田」と押したもの(図



図番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	第8層	須恵器	壺	ヘラキリ 底部口径広く高さ低い
2	#	#	#	ヘラキリ 外面に重ね焼き痕跡あり
3	#	#	#	ヘラキリ 外面に重ね焼き痕跡あり
4	#	#	#	ヘラキリ 体部が高く小型
5	#	#	#	ヘラキリ 内面研に転用
6	#	#	#	ヘラキリ 外面に重ね焼き痕跡あり
7	第6層	#	#	#
8	第8層	#	蓋	返りのある蓋胎土に石英多し
9	#	#	#	天井部回転ヘラケズリ 外面に炭化物付着
10	#	#	#	# 内外面に重ね焼き痕跡あり
11	#	土師器	壺	底、体部下端を手もちヘラケズリ ミガキ放射状
12	#	須恵器	壺	ヘラキリ 底部事の墨書あり
13	#	#	甕	口縁部に下に隆帯、頸部に櫛描き波文

第52図 SK1076 土壌第6~8層の出土土器



図番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1~3	第5層	須恵器	壺	ヘラ切り 調整ナシ 2に重ね焼き痕跡あり
4・5	"	土師器	"	4は糸切り後手もちヘラケズリ 内面黒色処理 ヘラミガキ
6	"	"	蓋	内外両面黒色処理及びヘラミガキ
7	"	須恵器	"	造りアリ 天井部右回転ヘラケズリ
8	"	"	"	天井部回転ヘラケズリ 内面研に転用
9	"	"	"	中凹みの宝珠形つまみ 火燒き痕あり 内面研転用
10	"	"	"	天井部回転ヘラケズリ 内面に重ね焼き痕跡
11	"	円面鏡	"	4個の方形透し穴と縦方向の沈線隆が高い

第53図 SK1076 土壌第5層の出土遺物

7)2 点がある。須恵器には坏、高台坏、蓋、長頸瓶、甕などがある。坏にはヘラキリのもの(第 53 図 1~3)が 12 点、底部全面と体部下端を回転ヘラケズリしたもの 1 点、糸切りのもの 1 点がある。(2)は小型の坏で、外面口縁部付近で重ね焼きによる色調の違いが認められる。(3)は内面の底が磨耗しており、硯に転用された可能性が大きい。またヘラキリの坏の中には、底部に「メ」印をヘラ描きしたものもある。高台坏は破片であり、ヘラキリの坏に高台を付けたものである。蓋には返りのつくもの(図 7)1 点と末端部が垂れ下がるもの(図 8・9・10)9 点の 2 種がある。(8)の天井部には重ね焼きによる円形の色調の違いが認められるし、(9)では内外両面に火襖き痕がみられる。この蓋のつまみは中窪みの宝珠形である。なお(9・10)の内面は著しく磨滅しており、墨が付着しており、硯に転用されている。長頸瓶と甕はいずれも体部の破片であり、図示できるものはない。土師器には坏、蓋、甕がある。坏は 6 点あるが、底部の磨耗が著しく、そのほとんどは切り離し法を判定しえない。中には糸切り後底部を手もちヘラケズリしたものが 1 点ある(第 53 図 5)。図 6 は内外両面をヘラミガキし、さらに両面を黒色処理した蓋である。つまみは宝珠形で、つまみ部全面をヘラミガキしている。甕は体部の破片で極めて少ない。図 11 は脚の端部をぐく円面硯で周縁の上端径は 14 cm(推定)、残存高は 5.2 cm ある。陸部が周縁上端よりも高く、著しく磨滅している。脚部には一辺 1.7 cm 角(横の長さは破片にて不明)にヘラで切り取った方形の透し穴を 4 個配し、透し穴の間を 4 本または 5 本のヘラ描き沈線で埋めている。硯の脚部を含めて外面は暗灰色を呈す。内面には灰が溶解してざらざらしている。窯内の焼成時に逆さに置いたためかもしれない。その他、砥石が 2 点や縄文時代の凹み石 2 やスクレーバーがある。

#### (f) SK1076 土壙 4b 層の出土遺物

4b 層は厚さ 5 cm 前後の薄い灰白色粘土層であるため、出土遺物は極めて少ない。また、すべてが少破片であって図示できるものはない。4b 層からは瓦と須恵器の甕 1 点がある。平瓦、丸瓦の出土点数は(表 4)のとおりである。この層の出土遺物の中で特に注目すべきものは、漆こしの布片(図版 20 の 8)と漆膜片(図版 20 の 7)である。漆こしの布は麻布で、径 213 cm、長さ 12 cm のよじれた棒状に遺存している。布の織り方は経糸 20 本(2 cm 当り)、緯糸 14 本(2 cm 当り)の糸を一本越え一本潜りの平織である。織った糸の間隔には顕微鏡観察ではアメ色の漆がぎっしりとつまっている。漆をこし絞った布である(註 1)。(図版 20 の 7)は漆の膜状のものである。巾 1 cm 程度に縦線が刻まれ、しかもそれと直交して柾目状の圧痕が漆膜に付いている。その面は平滑なのに対し、裏面は漆状の粒子が付着し凹凸がある。柾目状の圧痕から推測すると、曲物の内側にとりついた漆膜だけが残存したものと思われる。しかし、曲物の内側に付着した場合、曲物側板の刻線は凹凸逆に表われるはずであるが、載線状をなしており、その点は不明である。

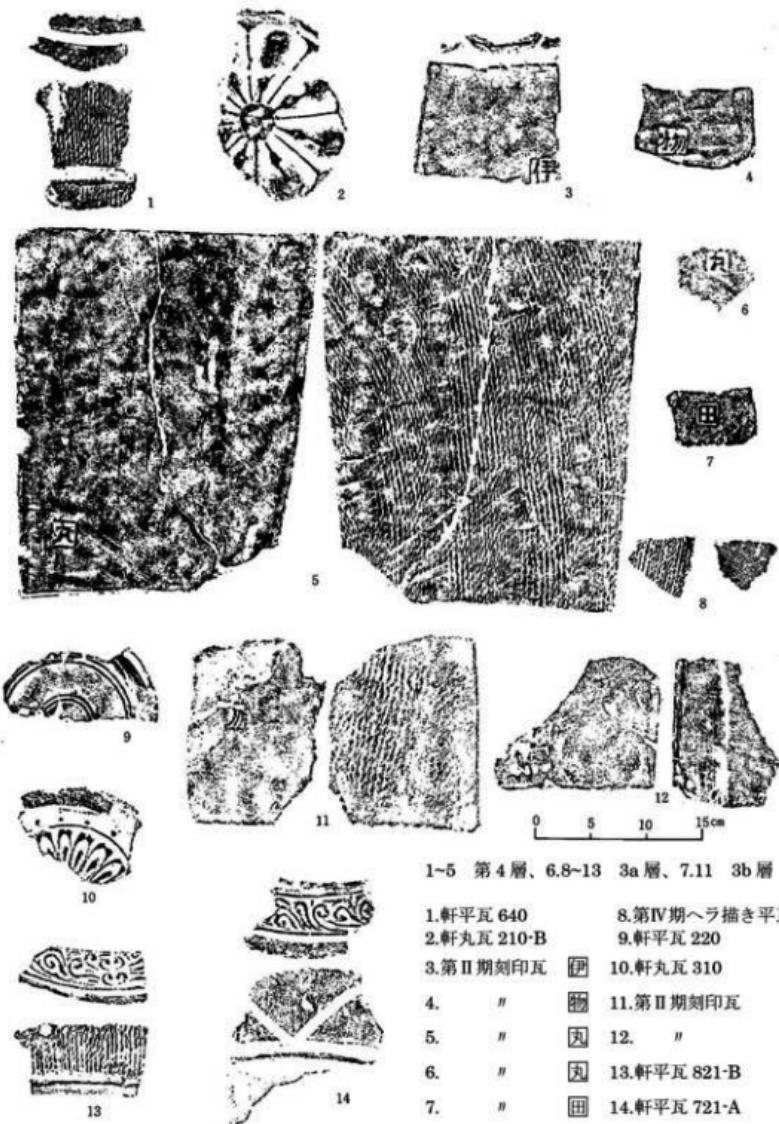
註 1 奈良国立文化財研究所編「平城京左京八条三坊発掘調査概報東市周辺東北地域の調査」1976年3月でもこれと同様の麻布が出土している。

(g) SK1076 土壌 4層の出土遺物（第 54・55 図）

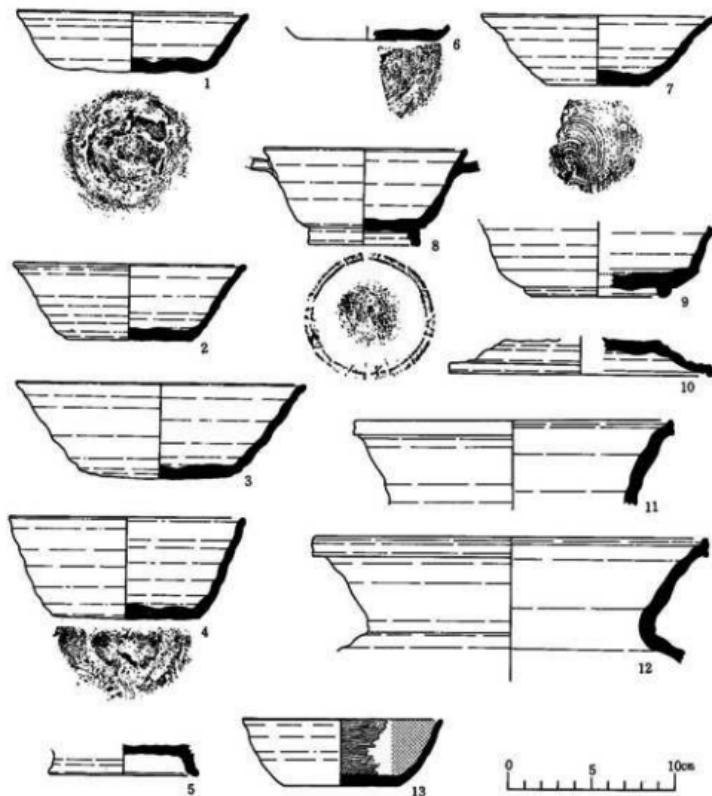
第 4 層からは瓦、須恵器、土師器、須恵系土器、砥石等の他、弥生式土器や縄文時代の石器が出土している。遺物の出土量も比較的多い。この層に若干ではあるが第Ⅳ期の平瓦や須恵系土器が含まれる点が注目される。

瓦には軒瓦 2 点、平瓦 240 点、丸瓦 178 点がある。第 54 図 1 は軒平瓦 640 であり、同図 2 は軒丸瓦 210-B で、ともに第Ⅱ期の軒瓦である。平瓦の時期別の内訳は第Ⅰ期 2 点、第Ⅱ期 180 点、第Ⅲ期 39 点、第Ⅳ期 3 点、不明 16 点(破片にて判別不能)となる。丸瓦、平瓦の中には押印した瓦もある。図 3 は丸瓦凸面に「伊」、図 4・5 は平瓦凹面に「物」「丸」と押印したものでともに第Ⅱ期の瓦である。

須恵器には壺、高台壺、蓋、長頸瓶、甕の器種がある。壺は総み 54 点ある。その内訳はヘラキリ 40 点、ヘラキリ後手もちヘラケズリするもの 6 点、糸切りのもの 9 点である。第 56 図 1~6 はヘラキリのものである。底径、口径、高さなどの違いでかなりの器形がある。図 2・3・4 の内外面には数条の火拂き痕が認められる。図 5 の底面には「丁」とヘラ描きが施されている。図 7 は糸切りの壺で底径が 6 cm と小さく、体部は大きく外に開く器形である。なお糸切りの壺の中には体部下端だけを手もちヘラケズリするもの 2 点を含んでいる。高台壺は 6 点ある。底部の切り離しのわかるものはヘラキリ 3 点と糸切り 1 点である。図 9 はヘラキリ後、回転ヘラケズリを行って、高台をつけた稜境である。図 5 は糸切りの壺に高台を付けた高台壺の脚と底部の破片である。底部の内外両面はともに明らかに磨耗しており、両面が硯として使用されたものである。図 8 は底径 7.2 cm、口径 12 cm、高さ 4.8 cm のヘラキリの壺に直線的に伸びる高さ 1 cm の高台を付け、さらに壺部上端に近い部分に把手を付けた双耳壺である。胎土が特徴的であり、白色と黒色の砂粒がかなり多くまじっている。把手は先端部が欠損している。蓋は破片ではあるが 12 点ある。図 10 は径 15.8 cm、高さ 2 cm の蓋で、上部を回転ヘラケズリしている。この蓋の内面は硯として転用されている。長頸瓶は口縁部 5 点、体部 30 点、底部 2 点で、すべて破片であり、図示できるものはない。肩部と頸部の境にリング状の凸帯を廻らした破片が 1 点ある。甕は口縁部破片 11 点、底部 9 点、体部は多数あるが図示できるものは少ない。口縁部では口縁端が「くの字」状に真っすぐに立上がるものの(図 11)や口縁部下端がいく分垂れ下がるもの(図 12)が多い。その他(第 52 図 13)と同様に口縁部に 2 本の隆帯を廻らし、下に波文を櫛描きしたものも 1 点ある。甕の体部の破片の中には、内面が磨耗し、硯に転用された



第54図 SK1076 土壌第4層、第3a、3b層の出土瓦



図番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1~4	第4層	須恵器	环	ヘラ切り 2・3に火難き痕跡あり
5	"	"	高台环	糸切り 内外両面を硯に転用
6	"	"	环	ヘラ切り 底部に「丁」のヘラ描き
7	"	"	糸切り	胎土に石英多く含む
8	"	"	双耳环	胎土に黒雲母と石英多し 耳は一部欠損
9	"	"	高台环	疊塊 体部下端を回転ヘラケズリ
10	"	"	蓋	胎土に黒雲母含む 内面を硯に転用
11	"	"	甕	特にナシ
12	"	"	口縁端立つ。体部内面に同心円のアテ板痕	
13	"	土師器	环	底部全面を回転ヘラケズリ 磨耗著しい

第55図 SK1076 土壌第4層の出土土器

ものもある。その1片には朱が付着している。第56図は底部が欠損した、口径31cmの鉢型の甕である。体部下半部には縦方向のヘラケズリ痕がみられ、内面には横方向のカキ目痕がみられる。

土師器には壺、高壺、甕がある。壺は16点ある。その内訳は、底部全面を回転ヘラケズリするもの11点、底部全面を手もちヘラケズリするもの3点、糸切り2点である。糸切りの1点は体部下端を手もちヘラケズリしている。図13は底部全面を回転ヘラケズリした壺で内面底部を放射状に、体部を横向に向かってヘラミガキしている。高壺は脚部の破片である。外面には縦方向の丁寧なヘラミガキが施されている。甕は底部(10点)、口縁部、体部の破片である。ロクロを使用したものが大半を占めるが、底部に木葉圧痕を残すものが2点ある。須恵系土器の壺は7点あるがすべて破片である。その他、砥石2点や弥生式土器の甕破片や縄文時代のスクレーパー等が微量ながら出土している。

#### (h) SK1076 土壌3層の出土遺物

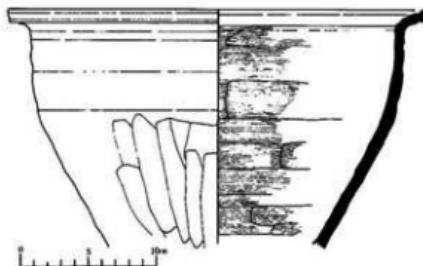
第3層は上層から3a・3b・3c・3d・3eの5亜層からなる。以下下位の亜層から順に主な出土遺物について記載する。

##### (イ) 3e層の出土遺物 (第57図)

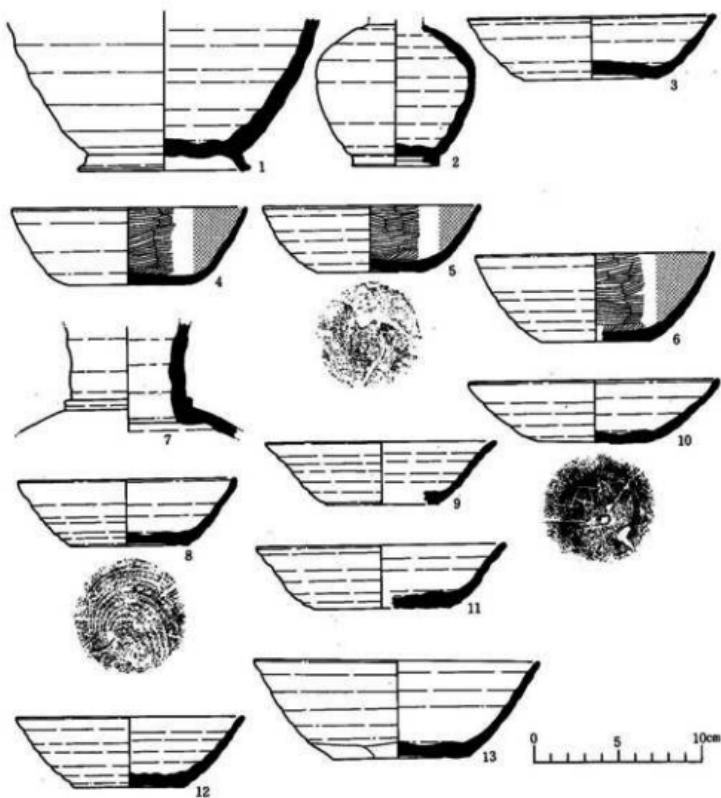
3e層からは瓦、須恵器、土師器などが出土しているが、量は極めて少ない。瓦には第II期の平瓦6点があるだけである。須恵器には壺、高台壺、蓋、長頸瓶、甕の器種がある。壺には糸切りのもの2点(図8・9)、ヘラキリのもの11点(図10~12)、ヘラキリ後手もちヘラケズリしたもの1点(図13)がある。そのうち、10の底部には「平」のヘラ書き文字がある。11の内面は磨滅しており、硯に転用されている。他の器種はすべて破片である。甕の体部片には内面を硯に転用しているものもある。土師器には壺と甕の器種があるが、すべて小破片である。

##### (ロ) 3d亜層の出土遺物 (第57図)

3d亜層からは瓦、須恵器、土師器が出土している。瓦には平瓦(35点)と丸瓦(23点)がある。平瓦の時期別の内訳は第II期33点、第III期2点である。須恵器には長頸瓶と甕の破片がある。図7は長頸瓶の肩部から頸部にかけての破片であるが、その境界部分に凸帯を廻らしている。胎土に特徴があつて、白濁した長石粒と黒雲母の小粒をかなり多量に含ん



第56図 SK1076 土壌第4層出土土器



図番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	第3b層	須恵器	長頸瓶	底部ヘラキリ後高台付す。胎土に長石入る
2	"	"	小型長頸瓶	胎土に石英・黒雲母を含む
3	"	"	环	糸切り
4	第3c層	土師器	"	底部全面手もちヘラケズリ ミガキは放射状
5・6	第3d層	"	"	糸切り手もちヘラケズリ ミガキは放射状
7	"	須恵器	長頸瓶	頭部に凸帯廻る
8・9	第3e層	"	环	糸切り 8に火律き痕あり
10~12	"	"	"	ヘラキリ (10)は底部にヘラ描きあり
13	"	土師器	"	体部下端から底部 手もちヘラケズリ 内面

第57図 SK1076 土壌第3b,c,d,e層の出土土器

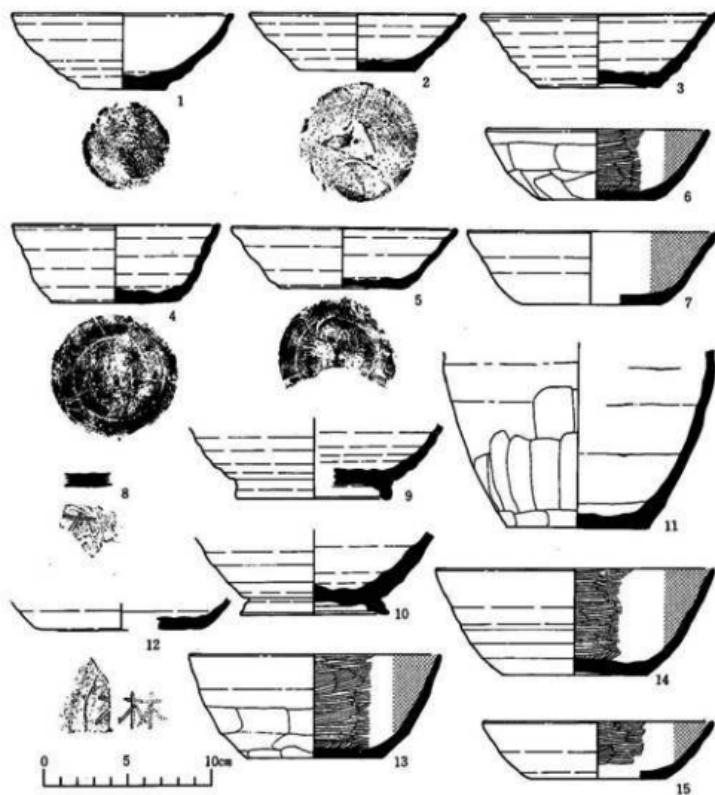
でいる。甕は体部破片が若干出土している。そのうち 1 点の内面は硯に転用され、磨滅している。土師器には壺と甕がある。壺の底部は 12 点ある。内訳は底部全面を回転ヘラケズリするもの 5 点、手もちヘラケズリするもの(図 6)2 点、糸切り後、周縁部を手もちヘラケズリするもの(図 5)1 点、糸切りのもの 1 点、底部が磨耗して判別できないもの 3 点である。5・6 の内面のヘラミガキは中心部分が放射状に、体部内面は平行状に行っている。甕は体部の破片でロクロ使用のものである。

#### (ハ) 3c 亜層の出土遺物 (第 57 図)

3c 亜層からは瓦、須恵器、土師器、須恵系土器が出土している。瓦には平瓦 20 点、丸瓦 7 点、軒丸瓦 220 の破片 1 点がある。平瓦は時期別に第 II 期 13 点、第 III 期 1 点、第 IV 期 6 点となる。須恵器には壺、長頸瓶、甕がある。壺はヘラキリ 1 点の他は体部の破片である。長頸瓶、甕も体部の破片が数点みられるだけである。土師器には壺、塊、甕がある。壺の底部は 15 点で、全面を回転ヘラケズリするもの 1 点、手もちヘラケズリするもの 1 点、(第 57 図 4)、磨耗により判別不能のもの 13 点となる。4 の体部外面には黒斑が所々に認められる。内面のヘラミガキは底部を放射状に、体部を平行に行っている。内面には漆が付着している。塊は体部から底部にかけての破片であり、内面をヘラミガキした内黒のものである。甕は体部の破片が若干ある。ほとんどがロクロ成形である。須恵系土器の塊体部の破片も若干出土している。

#### (ニ) 3b 亜層の出土遺物 (第 54・57・58 図)

3b 亜層からは瓦、須恵器、土師器、須恵系土器、灰釉陶器、土製品などがある。瓦には平瓦 169 点、丸瓦 104 点がある。平瓦は第 I 期 4 点、第 II 期 127 点、第 III 期 12 点、第 IV 期 6 点、不明 20 点である。中には第 II 期平瓦の凹面に「物」と刻印したもの(第 54 図 11)2 点や丸瓦凸面に「田」と刻印したもの(図 7)が含まれている。須恵器には壺、高台壺、蓋、長頸瓶、甕等がある。壺の底部は 38 点あり、そのうち、糸切りは 13 点、ヘラ切りは 24 点、全面を手もちヘラケズリするものが 1 点である。第 57 図 3 は糸切りの壺で、内面に漆が付着している。第 58 図 12 はヘラ切りの壺の底部破片であり、底部に「林」とヘラ描きしている。内面には火襷き痕が見られる。高台壺は 3 点ある。ヘラ切り後、回転ヘラケズリし、高台を付けたもので、うち 1 点は稜塊である。蓋は天井部の破片が 2 点あるだけである。長頸瓶は体部、底部の破片が若干ある。第 57 図 1 は底部から体部にかけての破片である。底径は 10-2 cm で、外にふんばる高さ 1 cm の高台がある。高台付着のため体部下半を左回転のロクロヘラケズリをしている。胎土に特徴があって、白濁した長石粒をかなり含む。第 57 図 2 は小型の長頸瓶で、頸部から上を欠く。高台径 5.2 cm、最大体部径 9.5 cm で、高さ 7 mm の内の上がる高台がついている。底部はヘラ切りで、体部下端から底



図番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	第3a 亜層	須恵系土器	环	糸切り 赤褐色を呈す
2~5	〃	須恵器	〃	2・3 糸切り 4・5 ヘラキリ 火拂きあり
6~7	〃	土師器	〃	6は底部全面手もちヘラケズリ
8	〃	須恵器	〃	底部にヘラ描き「不明」あり
9	〃	高台坏	〃	糸切り後高台付着 体部下端にヘラ描き沈線
10	〃	長頸瓶	〃	胎土に白濁した長石粒を多く含む
11	〃	土師器	甕	体部下端タテのヘラケズリ 内面に粘土細痕
12	第3b 亜層	須恵器	环	底部全面手もちヘラケズリ「林」のヘラ描きあり
13・14	〃	土師器	〃	体部下半、底部とも手もちヘラケズリ
15	〃	〃	〃	底部を回転ヘラケズリ

第58図 SK1076 土壌第3a、3b 亜層の出土土器

部の周縁を回転ヘラケズリし、高台をつけている。胎土に白濁した長石粒や黒雲母の粒子をかなり含む点が特徴である。甕はすべてが体部の破片であり、外面の叩き目は平行叩き目が多く、若干格子叩き目のものがまじる。そのうち、2片の内面は硯として転用され、明らかに磨耗している。土師器には坏、高台坏、鉢、甕がある。坏の底部は32点ある。その内訳は糸切り5点、全面を回転ヘラケズリするもの23点、糸切り後底部周縁を手もちヘラケズリするもの2点、磨耗のため、判別できないもの2点である。中には底径5cm程度の小型の坏も2点ある。第59図13は口径15cm、底径8cm、高さ6.1cmの深い器形の坏で、糸切り後手もちヘラケズリをしている例である。また、第59図14・15は底部全面を回転ヘラケズリしているものである。内面のヘラミガキは底面を放射状に体部を平行に行っている。高台坏は1点あり、糸切りである。鉢は体部の破片で、ヘラミガキし、内面を黒色処理している。甕は口縁部、体部、底部の破片である。底部は16点あり、そのうち3点は糸切りである。体部破片はほとんどがロクロ成形のもので、中には平行叩き目を観察できるものが若干ある。把手も1点ながら出土している。須恵系土器の坏も10点出土している。灰釉陶器としては長頸瓶の破片が若干ある。中には刷毛ぬりのものも含まれる。第59図の2は土錐である。直径5.8cm、長さ10cmの円筒形で、中に1.2cmの円形の孔がある。

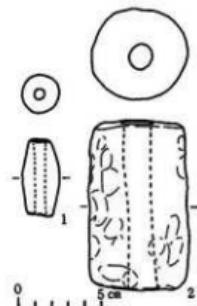
#### (ホ) 3a 亜層の出土遺物 (第54・58図)

3a層からは瓦、須恵器、土師器、須恵系土器、土製品等が出土している。瓦には軒瓦、平瓦、丸瓦がある(第54図)。軒瓦には軒丸瓦220(図9)、軒丸瓦310(図10)、軒平瓦721-A(図14)、軒平瓦821-B(図13)が各1点ある。平瓦、丸瓦の時期別の出土量は(第4表)のとおりである。図6は第II期平瓦凹面に「因」と押印したものである。図7は第II期丸瓦凸面に「画」と押印したものである。図8は第IV期の平瓦である。須恵器には坏、双耳坏、高台坏、蓋、長頸瓶、甕の器種がある。坏にはヘラ切り30点(第58図4・5・8)、糸切り22点(図2・3)、底部全面を回転ヘラケズリするもの2点がある。8の底部には「ナ」のヘラ描きがある。双耳坏では把手が2点ある。高台坏も2点ある。図9は糸切り後、底部周縁をヘラケズリし、高台をつけたものである。高台と体部下端との境に一条の沈線をヘラ描きしている。内面を硯として転用している。高台坏の他の1点はヘラ切りである。蓋は天井部の破片が5点ある。長頸瓶は体部、底部を合わせて51破片出土している。図10は体部下端から底部を回転ヘラケズリし、外にふんばる高台を付けたものである。甕はほとんど小破片であり、図示できるものはない。土師器には坏、高台坏、高坏、甕等がある。坏には糸切り12点、全面を回転ヘラケズリしたもの12点、手もちヘラケズリしたもの7点(図6)、底部が磨耗して判別不能のもの44点がある(中に底径5cm程の小型坏2点を含む)。高台坏は1点ある。高坏は脚部の破片で、外面はタテ方向にヘラケズリし、内面

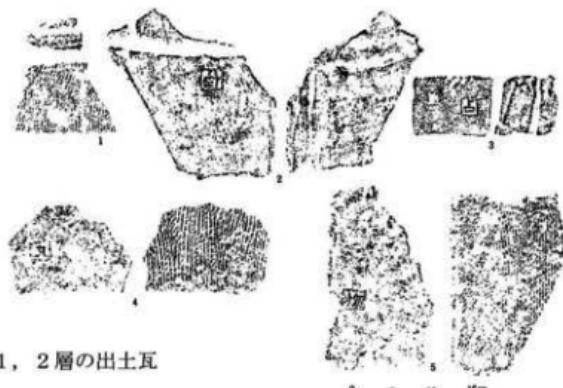
を横方向にヘラケズリしてかきとっている。甕は底部の破片でみると 21 点を数える。うち 3 点に木葉压痕がみられる。4 点は糸切りの小型の甕である。体部破片の中には、平行叩き目を残すものもある。図 11 は体部下端を縦方向にヘラケズリし、さらに末端部を横方向にヘラケズリしている。内面には巾 2~3 cm の粘土紐痕がよく残る。この他、小型の内面を黒色処理した甕の体部破片が若干あり、調整にはロクロを使用している。須恵系土器には壺(図 1)と高台壺がある。1 は底径 5 cm、口径 8.1 cm、高さ 4.5 cm の赤橙色を呈し、内面には粘土紐痕がかすかに残る。その他の遺物として砥石 1 点と土錘(第 59 図 1)がある。土錘は長さ 4.4 cm の胴張りの形を呈し、最大巾は 2.2 cm を測る。中心部には 0.6 cm の孔が貫通している。

#### (i) SK1076 土壙 1・2 層の出土遺物 (第 60・61 図)

第 1 層、第 2 層からの出土遺物には瓦(第 60 図 1~5)、須恵器、土師器、須恵系土器があるが、出土量は極めて少ない。第 1 層からは須恵器、土師器の甕等があるが破片で図示できるものはない。第 2 層からは須恵器の壺、高台壺、甕等がある。壺の内訳は糸切り 3 点、ヘラ切り 7 点、回転ヘラケズリを施すもの 2 点である。第 62 図はヘラミガキをした高台壺である。体部外面と高台外面上半部を横方向に、高台下端部を縦方向にヘラミガキしている。さらに壺部内面底部を放射状に、体部を横方向にヘラミガキしている。高台内



第 59 図 土錘 1-3a 層、2-3b 層



第 60 図 SK1076 土壙 1, 2 層の出土瓦

- 1.2 第 2 層、3~5 第 1 層
- 1.640 軒平瓦 4. 第 II 期刻印瓦 内
- 2. 第 II 期刻印瓦 壁 5. 第 II 期刻印瓦 物
- 3. 第 II 期刻印瓦 内

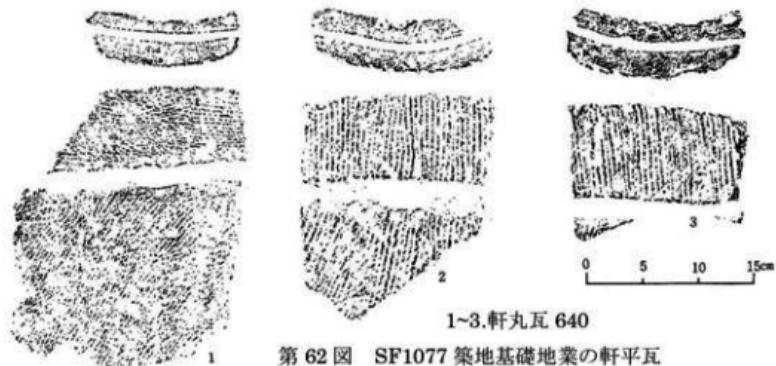
にはヘラミガキがない。土師器には壊、蓋、甕があるがいずれも小破片である。須恵系土器の壊が5点出土している。

#### (2) SF1077 築地基礎地業に使用された瓦 (第62図)

SF1077 築地基礎地業の中に使用された瓦は軒平瓦640が5点(第62図)と多量の平瓦、丸瓦である。



第61図 SK1076 土壌第2層出土器



第62図 SF1077 築地基礎地業の軒平瓦

平瓦は第I期の平瓦3点の他はすべて第II期のものである。第II期の平瓦の中には2次的に火を受けたものもある。

#### (3) SI1078 住居跡の出土遺物

主な遺物は住居跡の周溝上に敷いた瓦である。平瓦が14点、丸瓦が10点ある。平瓦はすべて第II期のものである。この施設瓦にまじって土師器のロクロを使用しない甕の体部破片が1点ある。床面からも同様の破片が1点ある。

#### (4) SK1079 土壌跡の出土遺物

SK1079 土壌からは瓦と須恵器が出土している。瓦には平瓦と丸瓦があり、その内容は第I期平瓦1点、第II期平瓦4点、丸瓦3点である。須恵器には壊と甕の破片がある。

#### (5) SB1081 建物跡の出土遺物

SB1081 建物跡の柱穴埋土からは瓦、須恵器、土師器が出土している。すべてが小さな破片であるため図示できるものはない。瓦は第II期の平瓦3点と丸瓦2点である。須恵器には壊の体部破片3片、甕の体部破片5片がある。土師器の甕体部破片も1点ある。

柱痕跡からは遺物は出土していない。

#### (6) SD1082 溝跡の出土遺物

SD1082 溝からは瓦、須恵器、土師器が出土している。瓦には平瓦と丸瓦(19点)がある。

平瓦の内容は第II期 11点、第III期 9点、第IV期 4点、不明 1点である。丸瓦には凹面に「了」とヘラ描きしたものもある(第 65 図 3)。須恵器には壺、長頸瓶、甕がある。壺は 2 点あり、いずれもヘラ切りである。長頸瓶は頸部と体部の破片である。甕には口縁部と体部の破片が若干ある。土師器には壺と甕がある。壺は 6 点あるが、すべて回転ヘラケズリを施したもので、切り離しのわかるものはない。甕は体部と底部(2 点)の破片がある。うち 1 点は糸切りである。須恵系土器としては、壺(第 64 図 7)の底部破片が 1 点ある。

#### (7) SB1083 建物跡の出土遺物

SB1083 の柱穴埋土と柱痕跡の埋まり土から遺物が出土している。柱穴埋土からの遺物として瓦・須恵器・土師器がある。瓦には第II期の平瓦 4点と丸瓦 2点がある。須恵器には壺、長頸瓶、甕がある。壺はヘラ切りの底部破片 4点と体部破片 1点である。長頸瓶と甕の体部破片各 1片がある。土師器の甕は体部の破片 1片である。

柱痕跡埋まり土からは土師器の壺の体部破片が 1点出土している。

#### (8) SX1084 暗渠状施設の出土遺物

SX1084 の暗渠に使用された瓦は丸瓦 4点と平瓦 2点である。平瓦は第II期のものであり、丸瓦のほとんどは完形品である。第 63 図上は長さ 35 cm の玉縁付丸瓦の完形品で、凸面の玉縁下に「匂」と押印している。第 63 図下は施設の裏込め土から出土した須恵器の鉢型の甕である。推定口径 28 cm で、体部はやや湾曲して伸び、頭部で「くの字」に曲り、口縁端はやや内に向って細まる。体部には平行叩き目が残り、下半部には縦方向のヘラケズリが行われている。外面の叩き目と内面のアテ板痕はロクロナデで一部消されている。また須恵器の壺体部破片 3点、土師器の壺体部破片 3点と甕の体部破片 2点、須恵系土器壺の体部 1点が出土している。

#### (9) SD1087・1088 溝の出土遺物

SD1087 からは第II期の平瓦 5点と須恵器の壺、甕の破片がある。壺は糸切り 2点である。

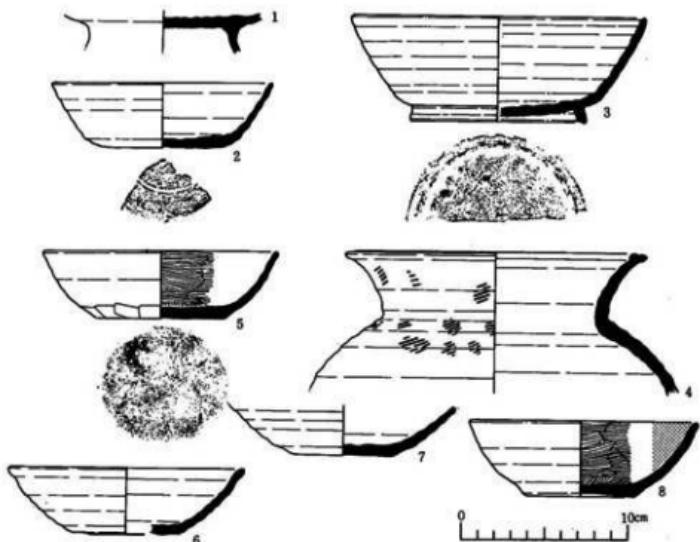
SD1088 からは瓦、須恵器、土師器が出土している。瓦には第II期の平瓦 26点と丸瓦 7点がある。その他、須恵器の壺、甕、土師器の壺、甕の破片が出土しているが、図示できるものはない。



第 63 図上 SX1084 暗渠施設瓦



第 63 図下 SX1084 暗渠裏込めの土器



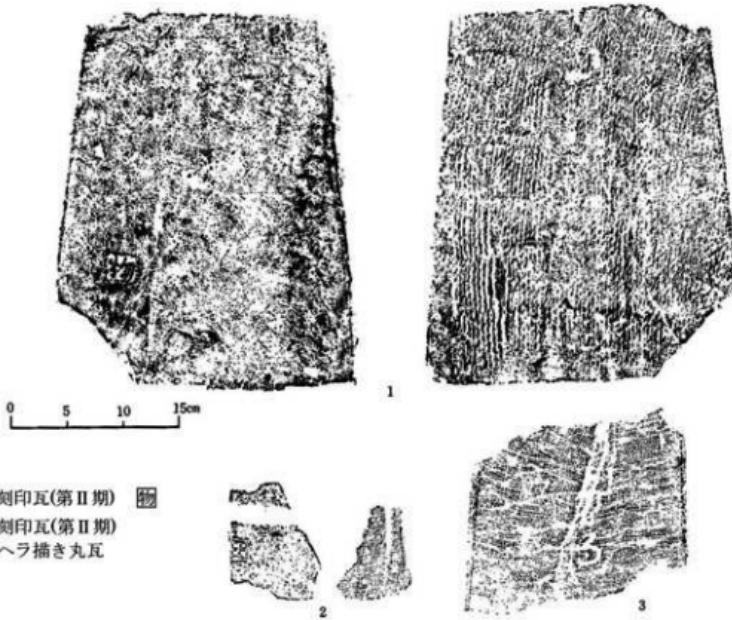
図番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1	SK1098	須恵器	高台环	内面を硯に転用
2	SK1099	"	环	ヘラキリ 外面口縁部に重ね焼きの色調違いあり
3	"	"	高台环	底部、体部下端回転ヘラケズリ 「林」のヘラ描き
4	"	"	甕	口縁部内に凸出あり 頸部に叩き目残す
5	SK1100	土師器	环	底部、体部下端手もちヘラケズリ
6	"	須恵器	"	糸切り 外面に重ね焼き痕跡残す
7	SD1082	"	"	糸切り
8	SD1096	土師器	"	糸切り 内面放射+平行のヘラミガキ

第 64 図 SK1098,1099,1100,SD1082,1096 出土の土器

(10) SK1085・1097~1100 土壙跡の出土遺物 (第 64・65・66 図)

SK1085 からは第 II 期の平瓦 4 点と丸瓦 1 点が出土している。

SK1097 からは瓦と須恵器の甕が出土している。瓦には平瓦と丸瓦がある。平瓦の内訳は第 II 期のもの 9 点、第 III 期のもの 18 点、第 IV 期のもの 24 点、判別不能のもの 35 点である。第 II 期の平瓦には凹面に「圓」と押印したもの(第 66 図 10)が含まれている。須恵器の甕の体部破片が 1 点ある。

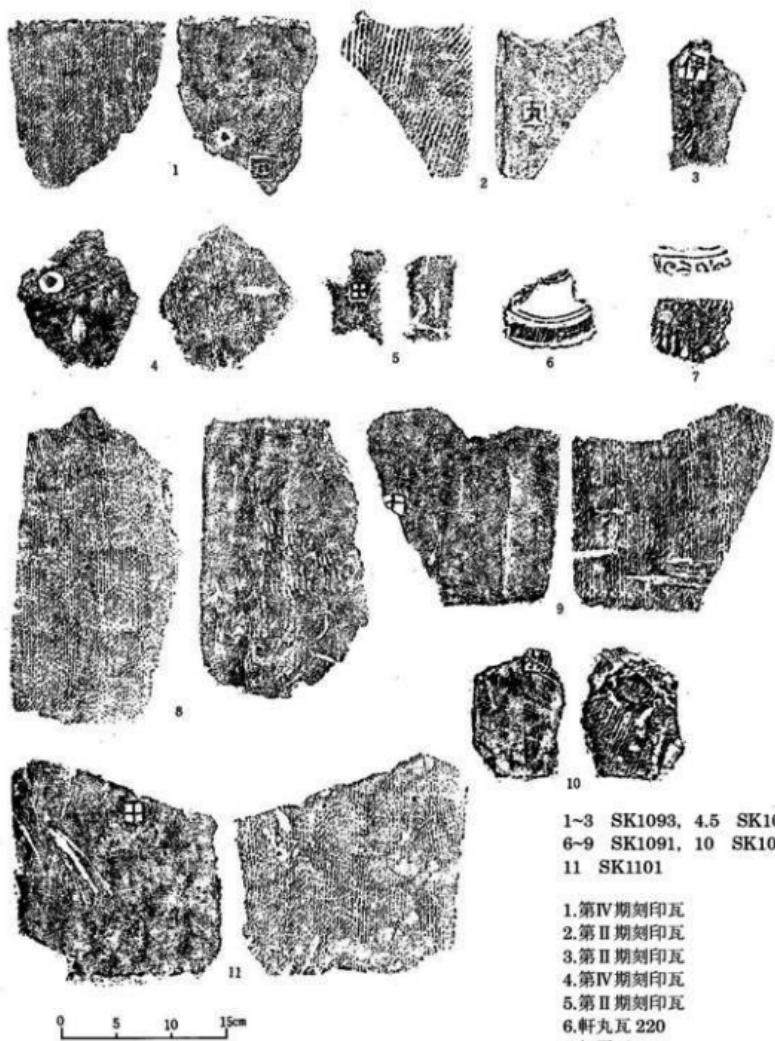


1.SK1102 刻印瓦(第II期)  
2.SD1088 刻印瓦(第II期)  
3.SD1089 ヘラ書き丸瓦

第65図 SK1102,SD1088,1089 溝の出土瓦

SK1098 からは瓦と須恵器の高台壺(第64図1)が出土している。瓦には平瓦(20点)と丸瓦(18点)がある。平瓦には第II期のもの9点、第III期のもの6点、第IV期のもの5点がある。図1の高台壺は底部から高台にかけての破片である。ヘラ切りの壺に高台を付したもので、壺部の内面は明らかに磨滅しており、硯として転用されたと思われる。

SK1099 からは瓦、須恵器、土師器、中世陶器が出土している。瓦には第II期の平瓦4点と丸瓦1点がある。須恵器には壺、高台壺、蓋、甕がある。壺は4点あるが、いずれもヘラ切りのものである(第64図2)。高台壺は2点ある。第64図3は口径17.5cm、高台径10.5cm、高さ6.3cmで、壺底面の全面を回転ヘラケズリした後、高台を付けている。底部に「林」とヘラ書きしている口蓋は天井部の破片が1点ある。甕は体部の破片である。土師器には壺2点と甕の体部破片がある。壺の1点は糸切りのものである。図版21の1は中世陶器で、甕の体部破片である。



第 66 図 土壌の出土瓦

1~3 SK1093, 4.5 SK1092  
6~9 SK1091, 10 SK1097  
11 SK1101

1. 第IV期刻印瓦
2. 第II期刻印瓦
3. 第II期刻印瓦
4. 第IV期刻印瓦
5. 第II期刻印瓦
6. 軒丸瓦 220
7. 軒平瓦 821
8. 第IV期へラ描き瓦
9. 第IV期刻印瓦
10. 第II期刻印瓦
11. 第IV期刻印瓦

**SK1100** からは瓦、須恵器、土師器が出土している。瓦には平瓦と丸瓦がある。平瓦の内訳は第II期のもの4点、第III期のもの1点である。丸瓦は3点ある。須恵器には壺、長頸瓶、甕がある。壺は7点ある。そのうち、4点は糸切り(第64図6)、2点はヘラ切り、1点は底部全面を手もちヘラケズリしたものである。長頸瓶、甕は体部の破片である。土師器には壺と甕がある。壺の底部は6点あり、うち3点は全面を回転ヘラケズリ調整したものの(第64図5)、3点は磨耗のため判別不能のものである。甕は体部の破片であり、これにはロクロを使用しているものとしないものがある。

## B 西地区の出土遺物

### (H) SF1089 築地跡・SX1090 積土遺構の出土遺物 (第67図)

**SF1089** 築地旧表土からは縄文前期(大木2式か)の土器が2片出土している。

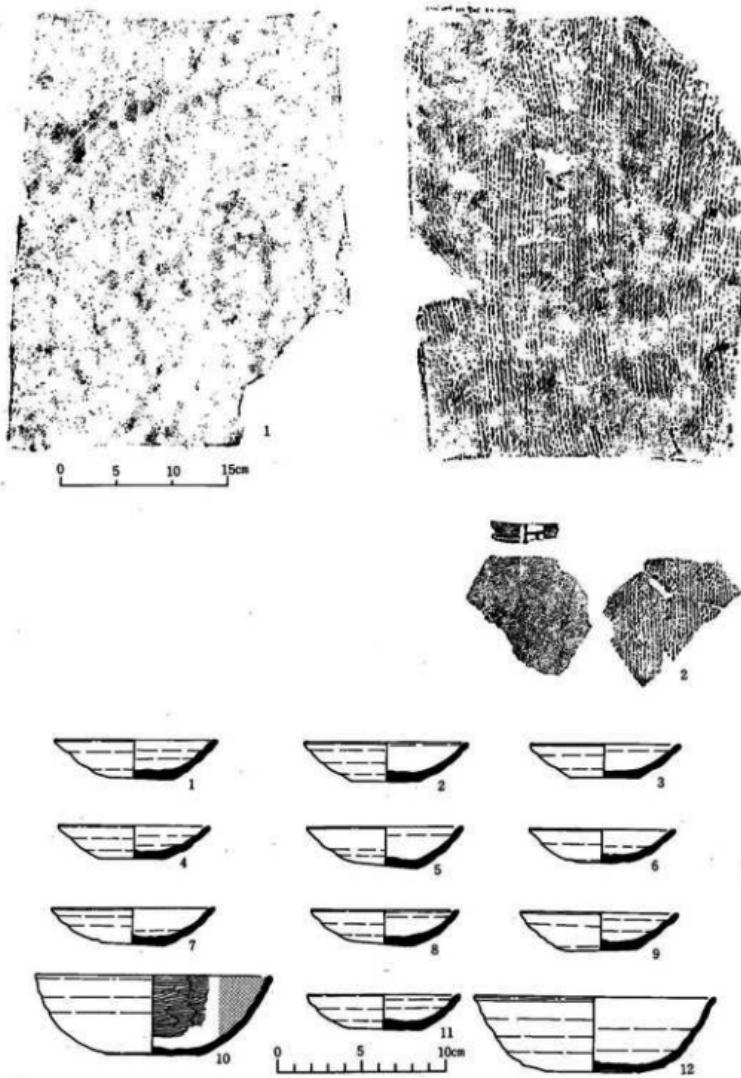
**SX1090** からは平瓦、丸瓦(225点)、軒瓦が出土している。平瓦の内容は第II期39点、第III期36点、第IV期202点、不明35点で圧倒的にIV期の瓦が多い。(図1)は第IV期のほぼ完形の平瓦である。第IV期の平瓦には木口部に田と押印した瓦(図2)が3点含まれる。この他、平瓦凹面にヘラ描きしたものも1点ある。軒瓦では、721か821軒平瓦かと思われる軒平瓦が1点ある。

### (12) SK1091 土壌の出土遺物 (第66図)

**SK1091** からは瓦と須恵器が出土している。瓦には平瓦(457点)、丸瓦(445点)、軒平瓦2点、軒丸瓦1点がある。平瓦の時期別の数量は第II期44点、第III期189点、第IV期149点、不明75点である。第IV期の平瓦には凹面にヘラ描きしたもの(図8)や「田」と押印したもの(図9)が含まれている。軒丸瓦には220(図6)、軒平瓦には821と思われる(図7)ものがある。須恵器では、長頸瓶の体部破片が2片ある。

### (13) SK1092 土壌の出土遺物 (第66・68図)

**SK1092** からは瓦、須恵器、土師器、須恵系土器がある。中でも須恵系土器の皿は一括遺物として注目される。瓦には平瓦、丸瓦がある。平瓦の内訳は第II期25点、第III期51点、第IV期36点、不明56点で、第III期、IV期のものが多い。第66図4は第IV期平瓦の凹面に刻印した瓦である。須恵器には壺(第68図12)長頸瓶、甕の体部破片がある。土師器には壺、高台壺、甕がある。壺には糸切り3点の他、磨耗してよく判定できないが糸切りと思われるものがある(図10)。高台壺は糸切りの壺に高台をつけたものである。須恵系土器には皿と壺がある。図1~9は小皿で、計14点ある。口径9cm、底径4.5cm、高さ2cm前後前後のものが多い。6には油状の黒茶色の炭化物が付着している。灯明皿として使用されたものと思われる。壺は4点出土しているが、いずれも破片である。その他、砥石が出土している。



図番号	遺構・層位	種類	器種	特徴
1~9・11	埋土	須恵系土器	皿	条切り 3に油脂付着 灯明顯か
10	"	土師器	壺	外面口縁部付近に黒斑 内面放射+平行のミガキ
12	"	須恵器	壺	底部を条切り後手もちらへラケズリ

第 68 図 SK1092 土壌出土の土器

#### (14) SK1093 土壙の出土遺物 (第 66 図)

SK1093 からは平瓦と丸瓦(69 点)が出土している。平瓦の内容は第 II 期 13 点、第 III 期 15 点・第 IV 期 67 点、不明 34 点である。1 は第 IV 期の平瓦凹面に「回」の押印をしたものである。2 は第 II 期の平瓦凹面に団を押印したものであるし、3 は丸瓦凸面に団と押印したもので 2 点出土している。

#### (15) SD1096 溝の出土遺物

SD1096 溝の埋まり土は 4 層からなる。出土遺物の大部分は瓦である。土器の出土量は極めて少なく、しかも破片のため図示できるものはない。上層の 1 層から下層の 4 層まで、第 III 期・第 IV 期の瓦が主体となって出土する。以下、下層から順に主な出土遺物について記載する。また出土した平瓦、丸瓦の量を層ごとに表示すれば、以下のようになる。

表 5 SD1096 溝堆積層別出土瓦量表

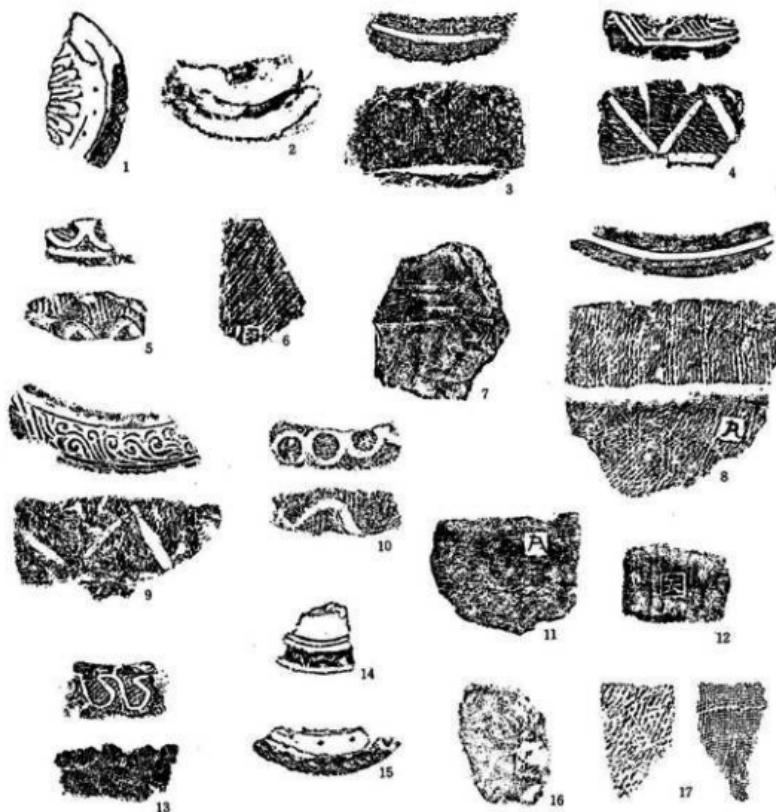
	平瓦					丸瓦
	第 I 期	第 II 期	第 III 期	第 IV 期	不明(Ⅰ期以外)	
堆積 1 層	2	193	139	79	132	367
2 層	5	91	57	125	121	195
3 層	1	77	312	286	301	408
4 層	0	19	86	111	75	127
計	8	380	594	591	629	1,097

#### (a) 第 4 層の出土遺物 (第 69 図)

第 4 層からは瓦と須恵器が出土している。瓦には平瓦、丸瓦、軒瓦がある。表 5 のように、平瓦では第 II 期のものが少なく、第 III、IV 期のものが圧倒的に多い。第 II 期の瓦には平瓦凸面に団(図 6)、凹面に団や団(図 7)と押印したものが各 1 点含まれている。軒瓦では軒丸瓦 310(図 1)2 点と判定不明な軒丸瓦(図 2)や軒平瓦 640(図 3)、721-A(図 4)、821-A、831-A(図 5)がある。須恵器には長頸瓶、甕の破片が 5 片あるにすぎない。

#### (b) 第 3 層の出土遺物 (第 64・69 図)

第 3 層からは瓦、須恵器、土師器、須恵系土器が出土している。瓦では第 III 期、第 IV 期のものが圧倒的に多い。平瓦、丸瓦の時期別の出土量は(表 5)のとおりである。第 II 期の平瓦には凹面に団(図 11)、団(図 12)、団(図 16)の刻印瓦が含まれている。第 IV 期の平瓦の中には凹面(図 18・19)や凸面(図 17)にヘラ描きしたものもある。軒丸瓦では 220(図 14)2 点、310 か 410 に属するもの(図 15)が 1 点ある。軒平瓦には 640(図 8)、721-A(図 9)、821-A(図 10)、911(図 13)などがある。(図 8)の平瓦部凹面には団の刻印が押されている。(図 13)は頸当面を縄叩きした後、曲線をヘラ描きし、頸面には細い巾の狭い波状文を描い



0 5 10 15cm

1~7 第4層、8~19 第3層

- |             |                   |
|-------------|-------------------|
| 1.軒丸瓦 310   | 11.第II期刻印瓦 九      |
| 2.軒丸瓦       | 12.第II期刻印瓦 矢      |
| 3.軒平瓦 640   | 13.軒平瓦 911        |
| 4.軒平瓦 721-A | 14.軒平瓦 220        |
| 5.軒平瓦 831-A | 15.軒平瓦 31~410     |
| 6.第II期刻印瓦 伊 | 16.第II期刻印瓦 物      |
| 7.第II期刻印瓦 物 | 17.~19.第IV期ヘラ書き平瓦 |
| 8.軒平瓦 640   |                   |

第69図 SK1096溝第3、4層の出土瓦

ている。須恵器には壊・長頸、甕の破片がある。すべて体部または頸部の破片であり、図示できるものはない。土師器には壊がある(第 64 図 8)。これは糸切りの壊で、内面のヘラミガキは底部を放射状に、体部を平行に行っている。須恵系土器には壊と高台壊の小破片が若干あるにすぎない。

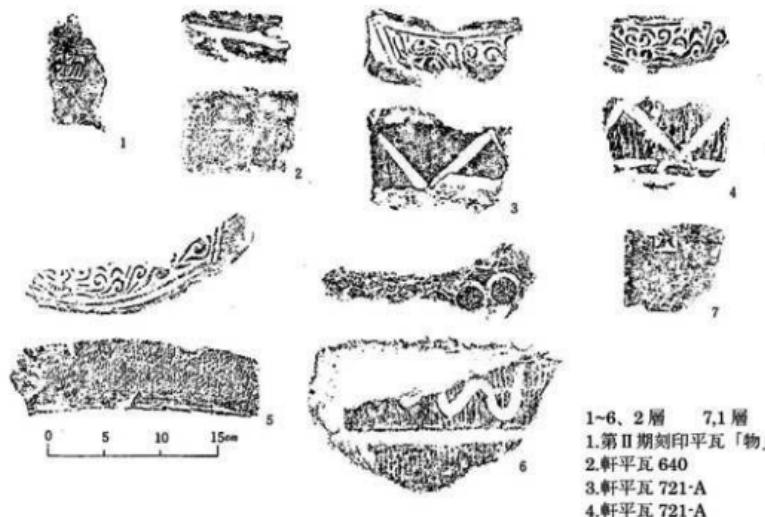
#### (c) 第 2 層の出土遺物 (第 70 図)

第 2 層からは瓦・須恵器・土師器が出土している。瓦には丸瓦、平瓦、軒平瓦がある。平瓦では第 IV 期のものが圧倒的に多い。時期別の数量は(表 5)のとおりである。図 1 は平瓦凹面に圓と押印した瓦である。軒平瓦には 640(図 2)、721-A(図 3・4)、821-B(図 5)、831-A(図 6)がある。須恵器には壊(ヘラ切り)1 点、高台壊 1 点、長頸瓶、甕の体部破片が若干あるにすぎない。土師器の壊は糸切りのもので 1 点ある。須恵系土器の壊は底部の破片である。

#### (d) 第 1 層の出土遺物 (第 70 図)

第 1 層からは瓦・須恵器・土師器がある。瓦には平瓦、丸瓦、軒平瓦がある。時期の判別ができる平瓦の時期別数量は(表 5)のとおりである。第 II 期の平瓦には平瓦の凹面に圓と押印した瓦(図 7)が含まれる。須恵器には壊(糸切り)1 点、高台壊 1 点、長頸瓶の体部破片がある。土師器壊の底部破片が 1 点出土している。

#### (16) SK1101 土壌跡の出土遺物 (第 66 図)



第 70 図 SD1096 溝 1, 2 層の軒瓦、刻印瓦

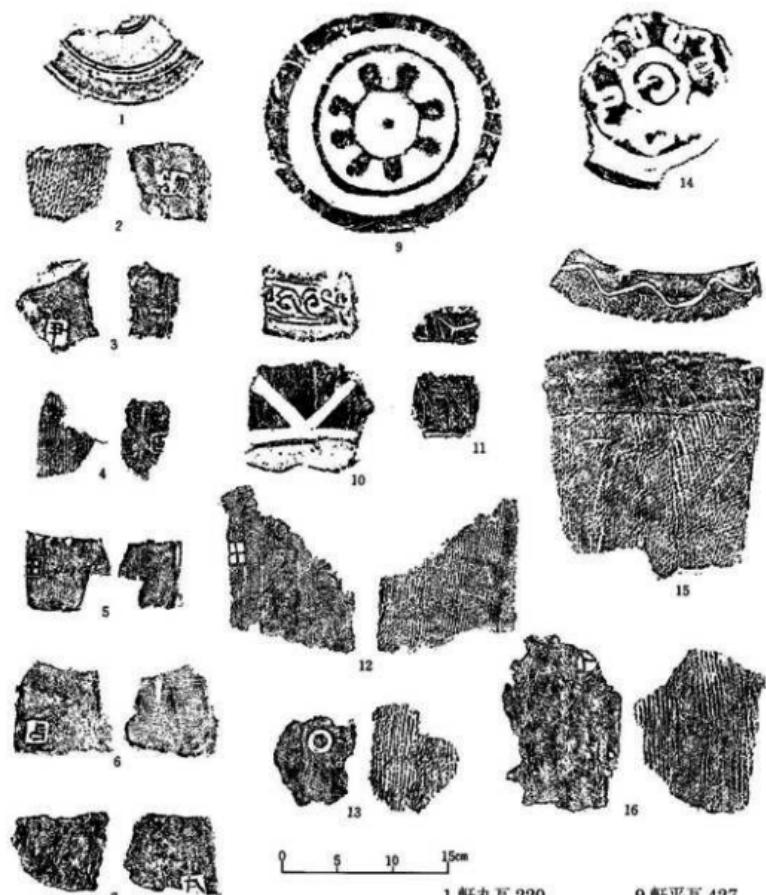
SK1101からは瓦、須恵器、土師器が出土している。瓦は平瓦 20 点と丸瓦 13 点である。平瓦の内訳は第Ⅱ期のもの 2 点、第Ⅲ期のもの 3 点、第Ⅳ期のもの 7 点、判別不能のもの 8 点である。第Ⅳ期の平瓦には凹面に「田」と押印したもの(図 11)が含まれている。須恵器では蓋の天井部と甕の体部破片がある。土師器の内黒塗の体部破片も若干ある。

### C 表土の出土遺物 (第 71・72 図)

表土については東地区、西地区を一括して記載する。

表土からは瓦、須恵器、土師器、近世、現代の陶磁器、石器などがある。中でも瓦が多く、平瓦と丸瓦を合わせて平箱約 100 箱分出土している。ここでは、特に主要なものについてだけ記載することにする。瓦には軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦がある。軒丸瓦(第 71 図)には 220(図 1)、427(図 9)、423(図 14)がある。軒平瓦(第 71 図)には 721-A(図 10)、911(図 11)、911(図 15)がある。平瓦は第Ⅰ期から第Ⅳ期まである。主なものとしては刻印瓦(第 71 図)とヘラ描きの瓦(第 72 図)がある。刻印瓦には第Ⅱ期の平瓦凹面に「匁」(図 2)、「匱」(図 4)「匱」(図 7・8)と押印したもの、第Ⅳ期の平瓦凹面に「田」(図 12)、「◎」(図 13)、「◎」(図 16)と押印したものがいる。ヘラ描きの瓦(第 72 図 1~4)はすべて第Ⅳ期の平瓦であり、凹面に記している。第Ⅱ期丸瓦の刻印瓦としては「匁」、「匱」、「匱」(第 73 図 3・5・6)がある。須恵器には壺、長頸瓶、甕があるが、ほとんどは破片である。壺には「團」と墨書したヘラ切りの底部や糸切り後、手もちヘラケズリした後「林」とヘラ描きしたものがある。土師器には甕の体部破片が若干ある。その他施釉陶器として緑釉の塗や灰釉塗がある。近世陶器はすべて幕末期以降の染付による陶器である。また縄文時代前期の大木 2b 式の甕形の土器片や弥生中期、後期の壺形土器片が出土している。縄文時代の石器もわずかにある。



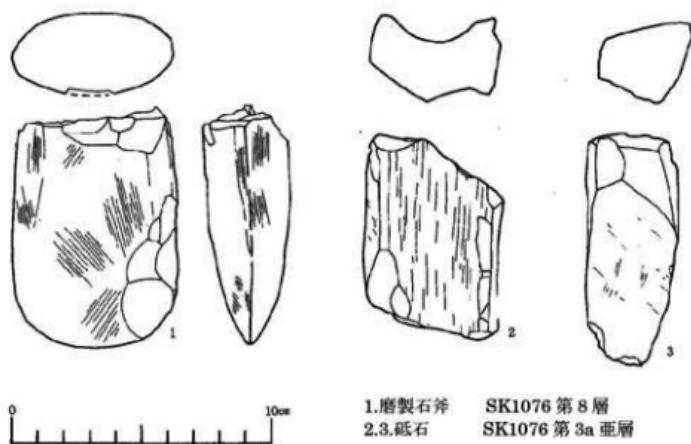


- |           |              |
|-----------|--------------|
| 1.軒丸瓦 220 | 9.軒平瓦 427    |
| 2.第II期刻印瓦 | 10.軒平瓦 721-A |
| 3. "      | 11.軒平瓦 911   |
| 4. "      | 12.第IV期刻印瓦   |
| 5. "      | 13. "        |
| 6. "      | 14.軒平瓦 423   |
| 7. "      | 15.軒平瓦 911   |
| 8. "      | 16.第IV期刻印丸瓦  |

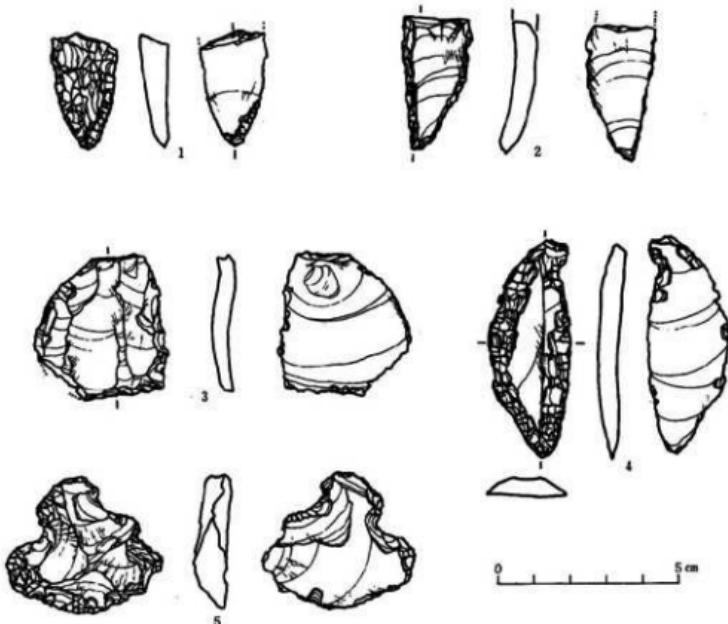
第71図 表土からの出土瓦



第72図 表土出土の第IV期ヘラ描き平瓦



第73図 石器、石製品



1.SK1076 第3b層、石匙 3・5.スクレーパー  
2.1層の石匙 4.SK1076 第7層、石匙

第74図 第33次調査出土の石器

#### 4 考察

第33次調査の最大の課題はSB1000門と外郭西辺築地の連結状況を把握することであった。これまで、個々の発見遺構については、前項で詳しく述べてきた。ここでは、その事実関係を踏まえて、主眼を門と築地のとりつき状況とその変遷に置いて、若干の考察を試みることにする。

##### (1) 西辺築地と西門との連結状況

これに関連する遺構としてはSF1089築地跡、SF1077築地基礎地業、SB1000門跡、SB1095建物跡などがある。このうち、SF1089築地については、その南端9mの範囲に

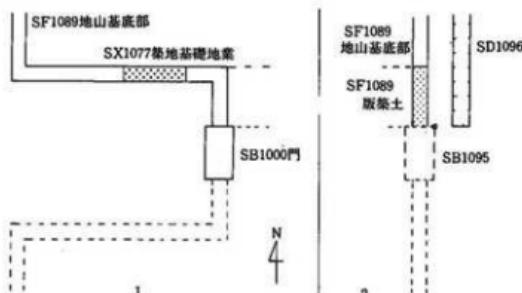
存在する版築土と、その北に連なる地山切り出しによる基底部とがあり、時期的な差違が存在する可能性が極めて強い。そこで、この考察の項では、煩雑さを防ぐため、前者を SF1089 版築土、後者を SF1089 地山基底部と仮称して論を進めることにする。

a 「コの字形」の配置（模式図参照）

第 30 次調査で外郭西辺築地から約 35m 東で SB1000 門を発見したが、その時点で外郭東門と同様に築地が「コの字状」に内に入り門にとりつく配置が予想されていた。しかし、SB1000 門付近は削平が著しく、門から出る築地等の遺構は全く検出できなかった。ところが、今調査で SF1089 地山基底部と SB1000 門との間に SF1077 築地基礎地業が発見され、両者の連結状況が具体的に推定できるようになった。SF1077 は東西方向に約 9m 延びる積土層で、積土には瓦が敷きめられていた。この瓦敷きの北縁は色々が玉石で補強され、直線状を呈する。北縁の方向は SB1000 門の北妻と平行し、その西への延長線はさきの SF1089 地山基底部の南端にとりつく。このことから SF1077 は西辺築地が東に折れて SB1000 門にとりつく築地の一部であったと考えられる。とすれば、西辺築地は西門と「コの字形」にとりつくのであり、外郭東門と同様の配置、構成をとることになる。多賀城の相対する東門と西門が同一の配置をとることは造営計画を考える上で特に注目すべきであろう。

次に西門地区が「コの字形」配置をとる時期について述べよう。

SF1077 築地基礎地業は SK1076 土壌の第 9 層上に構築している。この第 9 層には焼け瓦を含む第 II 期の瓦が圧倒的に多く、第 III 期以降の瓦は全く含まれていない。また SF1077 築地基礎地業に使用された瓦、および、この地業を覆う SK1076 土壌第 6 層までの各堆積層中に含まれる瓦の組成は第 9 層の場合と同様で、第 III 期以降の瓦を全く含んでいない。以上の事実から、この SF1077 築地基礎地業は間違いなく第 III 期の所産といえる。従って、「コの字形」の配置は、少なくとも第 III 期には取られていたという事が推測できるのである。



西門・築地の配置模式図

る。この配置が東門の場合と同様に創建期まで遡るか否かについては現段階で断定的に結論づけるほどの資料を得ていない。

#### b 西辺築地と門が直線状になる配置

西門地区の配置上の変遷を考える上で、無視できないのが SB1095 建物跡である。この建物は調査地区の南端で 1 個の根石を検出しただけで、その性格や規模については推測の域を出ない。しかし、この根石が、ほぼ SB1000 門跡の北妻延長線上にあることや SF1089 版築土がここから始まり、さきの「コの字形」配置の屈曲部まで延び、あたかも開口部をふさぐように存在することを考慮すると、この版築土はさきの「コの字形」配置とは時期を異にし、SB1095 建物に直接とりつく新しい築地とも考えられる。とすれば、SB1095 建物は門とも考えられ、築地が直線的に門にとりつく配置の存在が推定されてくるのである。また、模式図に示すとおり、西辺築地の東 3m には、これと並行する SD1096 溝がある。SB1095 の根石、SD1096 溝の南端、SF1089 版築土の南端がほぼ一致する点からこれらは相關する遺構の可能性もある。

さて、この配置の時期について次に推察してみよう。SB1095 建物跡は根石据穴の中に第 II 期以降の瓦がつめ込まれていることから、第 II 期以降の年代が与えられることは確かである。また、SD1096 溝が SB1095 建物跡と組合うものとすれば、SD1096 溝が第 IV 期の瓦を含む SX1090 積土遺構を切ることから、この配置は当然ながら、第 IV 期以降のものとなる。調査地区全体の出土瓦の量的傾向として、東地区では第 IV 期の瓦は極めて少なく、西地区では圧倒的に多い傾向がうかがわれる。この現象は SB1000 門から SB1095 建物への変遷時の様相を反映しているものかもしれない。

以上のように、西門の配置および所属年代等について若干の推論を試みた。その詳細については今後の調査で明らかにしてゆきたい。

#### (2) その他の遺構について

SK1076 土壙埋土第 9 層から SI1078、第 5 層から SB1081、第 4 層から SB1083 建物跡等が発見されている。これらは時期を異にはするが、ほぼ同じ位置に存在している。東地区では、この地点に限って建物が集中しており、他の地域は遺構のない空白地域となる。SB1000 門に近いことから、門に関連する遺構かと思われる。

なお、第 30 次調査で検出した SB1000 門から東に通ずる道路遺構の北にある平安時代前半の建物群は今調査地区には延びておらず、建物群の東をかぎる SK978～988 土壙を考慮すると、この官衙はある時期には極めて小規模な構成をとることが注目される(第 36 図)。

## IV 環境整備

### 1 現在までの経過

多賀城跡の環境整備事業は、1966 年度より多賀城廃寺跡(事業主体－多賀城町 当時)が、続いて 1970 年度より多賀城政庁跡等(事業主体－宮城県)を実施してきて、すでに 10 年以上が経過している。その概要は次の通りである(表-6)。

表 6 環境整備実施状況

	年度	環境整備地域	面積 (m <sup>2</sup> )	事業費 千円
廃寺跡	1966	多賀城廃寺跡	13,855	33,000
	1967	"		
	1968	"		
多賀城跡第一 か年計画 第一次 五	1970	政庁地区(南門・東脇殿他)	3,519	10,000
	1971	" (正殿他)	7,256	20,000
	1972	" (北門・西脇殿他)	14,669	25,000
	1973	" (西北部)・外郭東門地区	9,415	20,000
	1974	六月坂地区	8,326	20,000
次 多賀城跡第 五 年 計 画	1975	外郭東南隅地区	3,606	20,000
	1976	"	6,430	10,000
	1977	外郭南辺中央部	1,975	16,000

これらのうち、多賀城廃寺跡の整備については、すでにその詳細が「多賀城跡調査報告 I－多賀城廃寺跡」(1970 年宮城県教育委員会、多賀城町)の中で正式に報告されている。また、1970 年度以降の政庁跡等の既整備分については未報告である。

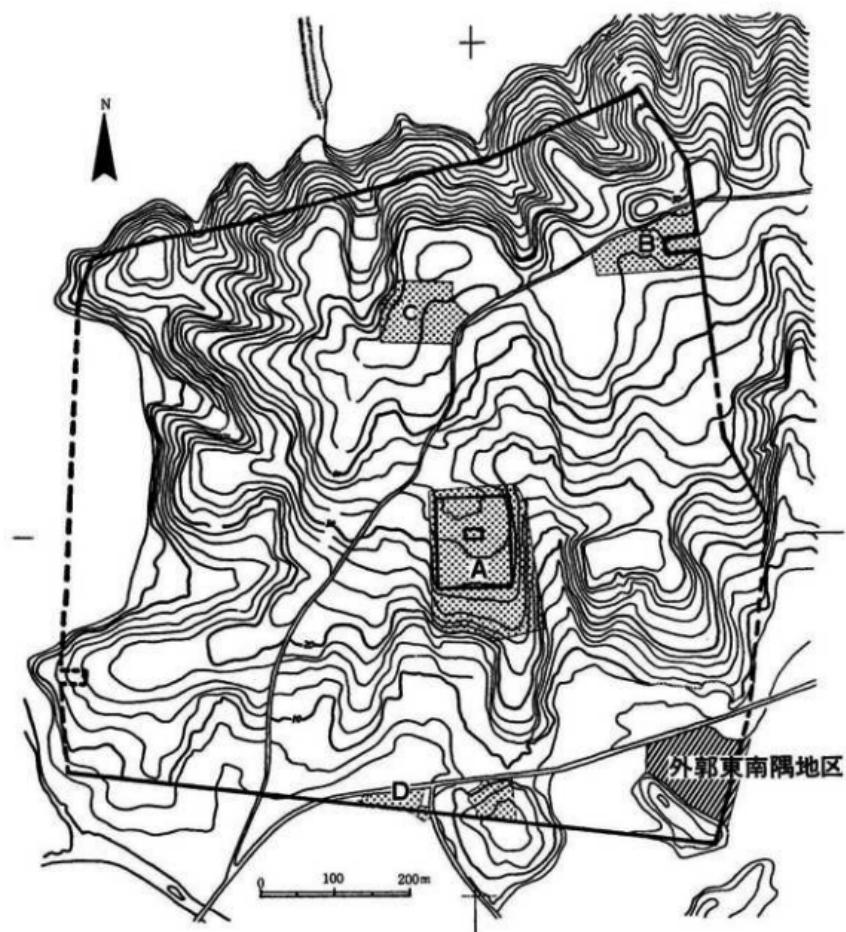
環境整備事業に対する報告の要望もあり、本年度より整備が終了した地区について順次概略を述べてゆく予定である。しかし、環境整備計画と発掘調査や土地公有化事業の進展が一致せず、各整備地区が単年度で終了する訳ではない。そのため、かならずしも年度報告という形にはこだわらず報告してゆきたい。

### 2 既整備地区の実施概要

今回報告するのは多賀城跡東南隅湿地帯の整備についてである。

他の未報告分のうち、政庁跡についてはその整備を 1973 年度までに終了しているが、近く刊行が予定されている「多賀城跡調査報告 II－多賀城政庁跡」(仮称)の中で詳細な報告を予定している。また、その他の既整備地区については、今後の環境整備の進展に応じ

て後日概報または本報告を行う予定である。



第 75 図 多賀城跡全体図

なお、本年度は整備報告を行うのははじめてであり、整備内容の全体的把握の便を考慮して 1977 年度までの各地域(多賀城廃寺跡および今回概報分を除く)の整備計画について簡単に記しておく。

#### 2-1 政庁跡 第 75 図-A

この地区は多賀城跡のほぼ中央部で高さ約 30m の台地状の丘陵上に位置する。

1973 年度(第 19 次調査)までの発掘調査により周囲を区画する東西約 105m、南北約 118m の築地跡および正殿、脇殿、南門、翼廊、石敷広場、その他建物跡、排水溝等が検出され、これらには、第 I 期より第 V 期にわたる変遷が確認されている。

本地区は 1970 年度より 4 カ年で環境整備を終了しており、第 III 期の遺構を中心とし、その規模、配置等を平面的に復原表示した(図版 23 上)。その実施概要は以下の通りである。

- ・ 築地遺構は埋戻した後、同位置に断面が台形状(基底幅約 2.5m、上端幅 0.6m、高 1・8m)となるようソイルセメント合材にて、かさ上げして幾分立体的に表示し、表面をリシン吹付にて保護した。
- ・ 建物跡基壇上面は原則としてカラーアスファルト舗装とし、軒廻りと建物内は色分けして区別した。
- ・ 磐石、石敷広場、排水溝等は遺構を直接露出し、石の欠失した箇所には同質の自然石を補充した。
- ・ 既存樹木については、遺構を破壊する危惧のないものは緑陰の確保のため極力残した。

#### 2-2 東門跡 第 75 図-B

当門跡は多賀城外郭東側を区画する築地に取付く東門である。この地区は古くから「東門跡」と通称されており、数個の磐石とともに「コ」の字状に内側に入り込む築地跡がかなり高く遺存していた。

第 13 次発掘調査(1971 年度)により 2 時期にわたる門跡およびそれに取付く基底幅約 2.7m の 3 時期にわたる築地遺構が良好に遺存していることが確認されている。また第 14 次発掘調査(1971 年度)により門の西方約 70m のところで同時代の竪穴住居跡が検出されている。

本地区では 1973 年度に環境整備を実施し、東門、築地、およびそれに伴う道路遺構等の規模、配置、また竪穴住居跡の位置等を平面的に復原表示した(図版 23 の下)。その実施概要は以下の通りである。

- ・ 門跡は欠失した磐石を同質の自然石にて補充し、盛土にて基壇を復原した後、その上面をカラーアスファルトで舗装した。また門であるため、軒廻りと側柱列内は色分けしなかった。
- ・ 築地跡は保存のため現遺構上に盛土し、地被植物(シゲザサ)によって緑化・保護した。

- ・住居跡は埋戻しの後、同位置に床面をソイルセメント舗装で表示し、赤練瓦にて周囲を目地切りして、その平面的規模・位置を表示した。
- ・道路遺構は砂利敷舗装(長約 130m、幅約 18m)とし、園路としての利用も考慮した。

#### 2-3 六月坂地区 第 75 図-C

この地区は政府跡西北方にある丘陵上で、政府中軸線の西側、旧塩釜街道の北側にあたる。従来この地区には礎石と思われる自然石群が一部露出し、建物群の存在が推定されていた。

第 12 次(1971 年度)、第 18 次(1972 年度)の発掘調査により平安時代の四面廂 2 棟を含む掘立柱建物約 10 棟、倉庫跡と推定される礎石建物 2 棟、道路跡などが確認された。

1974 年度に外郭官衙遺構として初めて環境整備を実施し、掘立柱建物および礎石建物、道路遺構などの遺構を平面的に表示した(図版 24 の上)。その実施概要は以下の通りである。

- ・礎石建物については、礎石が欠失した箇所には同質の自然石を補充し、基壇面はカラーアスファルト舗装した。また、高床建物と推定されるため側柱列内外は色分けしなかった。
- ・掘立柱建物はすべて表示し、重複しているものについてはその新旧関係を表わした。また、柱位置には地表にわずかに出る程度に木柱を設置し、建物の内外が区別できるよう側柱列に目地切石を付設した。
- ・道路遺構は、東門地区にあわせ砂利敷舗装とし、将来の園路としての利用を考慮した。

#### 2-4 外郭南辺築地跡 第 75 図-D

多賀城跡中軸線上の外郭南門跡の西方約 80m のところに位置する通称「鴻の池」と呼ばれる低湿地である。

第 8 次(1970 年度)、第 20 次(1973 年度)発掘調査により、基底幅約 2.7m の外郭築地跡、その基礎地業である長約 80m、幅約 18m、厚約 1.6m の盛土整地層、およびしがらみ遺構、また檜跡と推定される築地に取付く張出し基壇などが確認されている。この地区は 1977 年度より環境整備を実施しているが(図版 24 の下)、その実施概要は以下の通りである。

- ・盛土整地層は、調査結果に従って幅約 18m に盛土復原したが、盛土厚については現況地盤面を切土しないように配慮した。
- ・築地は上記盛土南端部の、遺構と同位置に幅約 2.7m、高約 2.5m に常緑樹(イヌツゲ)を植栽し、断面台形状に刈込み、その位置と規模を幾分立体的に表示した。
- ・盛土北端土留のしがらみ遺構は保存のため埋戻し、法面は張芝にて保護した。

### 3 外郭東南隅地区の環境整備

#### 3-1 概要

当地区は多賀城跡外郭の東南部にあたり、北部丘陵南端から通称「雀山」と呼ばれる小丘を結ぶ低湿地である。

この地区の環境整備は、先の発掘調査(第11次、第24次発掘調査)によって確認された丸太材列や建物跡土居桁等の保存、および周辺湿地の修景を目的として1975年度より実施した(第76図、図版25の上)。その経過は以下の通りである(表-7・8・9)。

表7 1975年度実施状況

	保 存 施 工			排水工(注1)	標識工(注2)
	土 工	排水施設工	湧水施設工		
数 量	3,600 m <sup>2</sup>	220m	20基	195m	2基
工費(千円)	6,153	878	488	4,761	801

(注1) U形側溝-168m、雨渠-27m、県道-造構南部排水路間

(注2) 造構説明版(アルフォト写真)

表8 1976年度実施状況

	排水工(注1)	園路工(注2)	緑化工(注3)	木橋工 他
数 量	51m	172m	5,110 m <sup>2</sup>	1式
工費(千円)	632	5,830	1,205	822

(注1) 県道沿前年度補足分 U型側溝

(注2) 外郭築地造構東南隅-県道間(新設)

(注3) イグサ(湿地)、クマザサ(園路沿丘陵斜面)、樹木(湿地周辺)

表9 1977年度実施状況

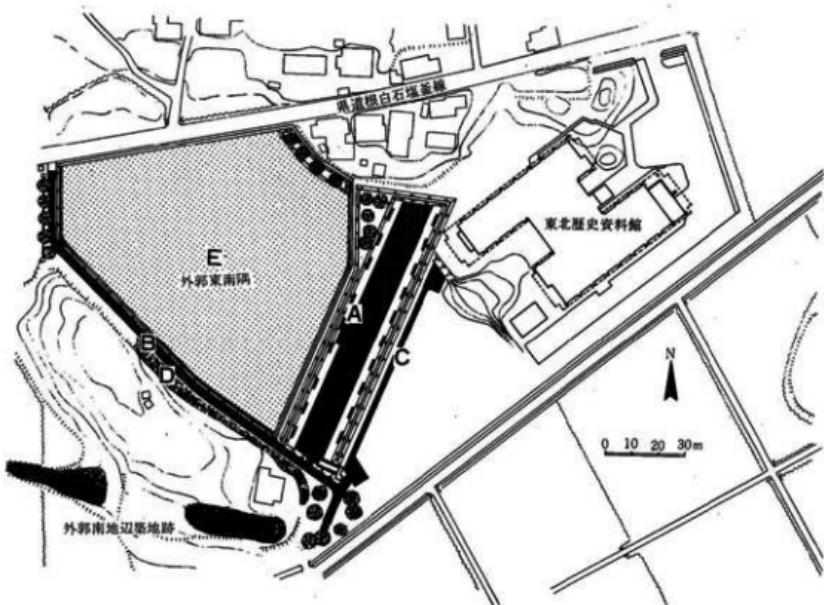
	排水工(注1)	園路工(注2)	緑化工(注3)
数 量	35m	82m	1,840 m <sup>2</sup>
工費(千円)	568	548	2,641

(注1) 濡地灌漑用導水路 U型側溝

(注2) 外郭築地造構東南隅-資料館間(仮設)

(注3) ショウブ(湿地)

なお、1978年度には補足工事として園路の県道取付部に階段および標柱を付設した。



第 76 図 外郭東南隅全体図

### 3-2 整備前の状況

第 11 次(1970 年度)・第 24 次(1974 年度)の発掘調査により、外郭東辺築地基礎地業と判断される長さ 100m 強および 2 列の丸太材や、一辺約 4m の建物跡土居桁の遺存が確認された。

丸太材列は、径約 30cm 前後のクリ材を一列に密接して立て並べたもので、2 時期からなる土居桁は幅約 0.3m、厚約 0.2m ほどの角材をせいろ組みにしたもので、土居桁の直下に建物の沈下を防止するため、多数の角材が敷き込まれている(宮城県多賀城跡調査研究所年報 1970・1974 に詳述)。

これらの遺構(以下木質遺構と呼ぶ)は水田粘土層およびその下層のスクモ層中に良好に遺存しているが、この低湿地は公有化が終了しており、公有化前は水田として使用されていた。また、その南側は東北歴史資料館建設に伴い盛土整地が終了している。

低湿地部分は、公有化に伴う水田放棄のため荒地化しており、ヨシ、ガマ、ミゾソバ、その他の湿地雜草が繁茂していた。一方、排水路の崩壊による人家からの汚水流入があり、木質遺構の二次腐朽の進行、また周辺環境の変化による地下水位の低下等が心配されていた。

### 3-3 環境整備計画

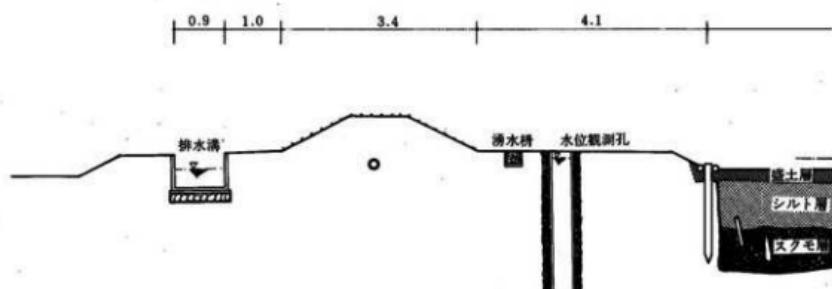
当木質遺構は全国的にも稀な例であり、環境整備計画を立案するにあたってその前例がなく、保存活用法を種々検討したが、遺構の保存を第一義とし、現時点では積極的整備計画をひかえ、以下のような基本方針に基づいて実施した。

1. 木質遺構の重要な遺存条件と推定される湿地環境を変えないよう考慮する。
2. 水田放棄に伴い、遺存地区に民家からの汚水が流入しているため、新たに排水路を設け流入を防止し、加えて人為的な給水施設を設置する。
3. 軟弱地盤のため遺構上には原則的に盛土せず、圧密等による水位の低下等を防止する。
4. 木質遺構北部の湿地は、遺構に伴う当時の自然環境として保存し、湿地植物等によつて園地化する。
5. 現段階では遺構表示等の活用面での整備が困難である。よって、写真、図版等による説明板を設置する。

### 3-4 環境整備工事概要

#### 〈木質遺構保存施設工〉

湿地の北部には約 20 戸ほどの民家があり湿地全域に生活汚水が流入していた。水田放棄により崩壊していた既存の素掘側溝を利用して、コンクリート製の U 型側溝(幅 0.9m、深 0.61m)を延長約 246m にわたって付設し、湿地南部の排水路へ接続した。また、途中木質遺構を横断する箇所があり、遺構の破壊を最小限にするため発掘調査結果に基づき、遺構の最も遺存しない箇所(遺構南端部)を選んで計画したが、基礎床掘施行時に下層より同類遺構(宮城県多賀城跡調査研究所年報 1975)が発見された。そのため、一部設計変更し、



第 77 図 保存施設横断図

同遺構保存のため砂土にて埋戻し、この箇所のみ基礎地業を最小限におさえ約 27m にわたり函渠(幅 1.0m、高 1.0m)を付設した。

一方、周辺環境の変化による遺存条件(特に水位)の悪化を防止するため、木質遺構の遺存する地区(約 2,500 m<sup>2</sup>)に新たに給水施設を設けた(第 76 図-A)。当地区は極めて軟弱な地盤であり、盛土圧密による水位の低下が予想されたため、木質遺構上の幅 10m、延長 110m の範囲は一切盛土せず貯水部(水深約 0.1m)とし、その両脇は水の流失防止のため土手状の盛土を行った。その内側にそって湧水井 10 基ずつ計 20 基の給水施設を配した(第 77 図)。

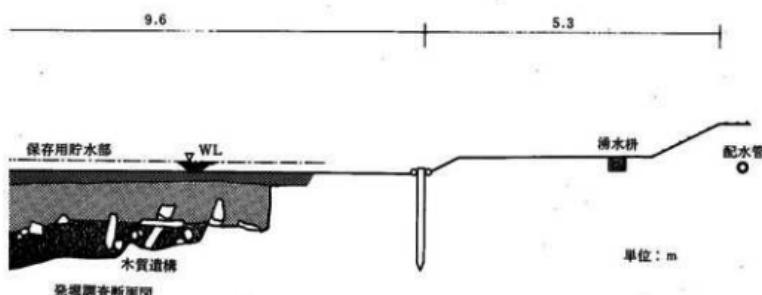
湧水井は幅 0.24m、深 0.24m、長 5.2m のコンクリート製 U 型溝の底部に 3 本一組にした湧水管(モノドレーン)を挿入し、砂利にて埋め、井の上部より湧水するようにした(第 78 図)。湧水井は 2 基を一組としてバルブを取り付け、水量を個々に調節できるようにした。配水管は直径 20 mm の硬質塩ビ管を用い、湿地北部、県道下を通る上水道本管より導水し、給水能力は約 20m<sup>3</sup>/h を見込んだ(第 79 図)。

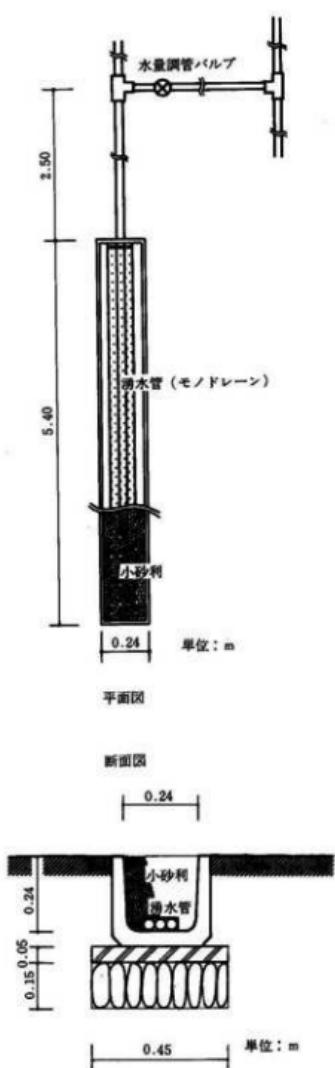
また給水の便に供するため水位観測孔(径約 0.4m、深 2.5m)を設置した。

#### 〈園路工〉

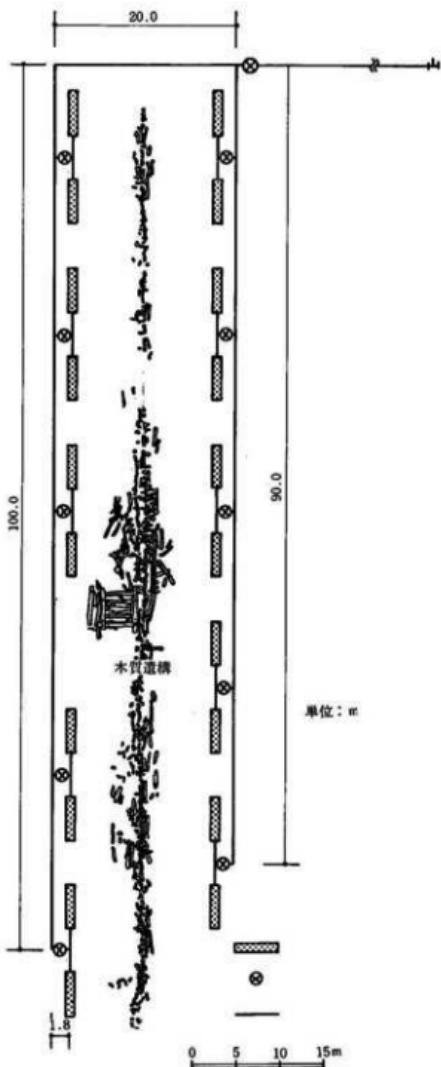
城内の幹線道路として県道根白石塩釜線、市道市川線があるが、共に交通量が多いため城内散策路としての利用が期待できない。

既整備地区を連絡する園路の設置が必要となってきたため、その一環として外郭築地遺構東南隅より県道根白石塩釜線まで、通称「雀山」の丘陵東側据部に沿って延長約 172m、高約 0.5m に盛土の後、幅員 2.5m の砂利敷舗装園路を新設した(第 76 図-B)。また、湿地のため盛土護岸はしがらみとした(第 80 図、図版 25 の下左)。さらに同園路と資料館連





第 78 図 溝水施設詳細図



第 79 図 排水施設系路平面図

絡のため、延長 82m、幅員 2.5m の砂利敷舗装園路を仮設した(第 76 図-C)。

なお、同園路は将来延長し、資料館と外郭南門地区、政庁地区等を結ぶ史跡巡路とする予定である。

#### 〈緑化工〉

園路沿いの緑化を図るため、ケヤキ、ヤマザクラ、ハンノキ、ヤマツバキ等の高木 49 本、ドウダンツツジ等の低木 350 本の他、ミヤギノハギ 95 株を植栽した。いずれも既存緑地を考慮に入れ、それに補植するようなかたちで配植した。

また、園路沿いの丘陵東側傾斜地 360 m<sup>2</sup>(幅 4m、延長 90m)

は緑地保全のため、クマザサ 2,160 株を既存のものに加えて植栽した(第 76 図-D)。

木質遺構北部の湿地域は、前述の通り現在の状態で整備する方針であるが、かなり荒地化が進んでおり周辺住民から整備の要望が強かつたため、湿地の東半部にイグサ、西半部にショウブを仮植した(第 76 図-E)。

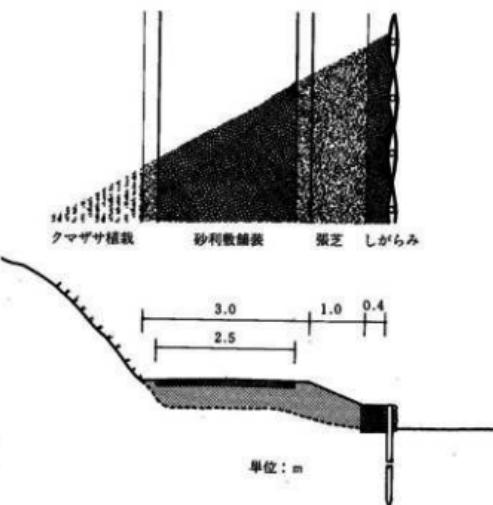
イグサは 1 m<sup>2</sup>あたり 4 株(間隔 0.5m)で 4,750 m<sup>2</sup> に約 19,000 株を植栽した。

ショウブは後の管理を考慮して、地表より深約 0.2~0.3m 堀り下げ、幅 1.2m、長 3.0m の下げ床式の植床とし、これに 20 株を植えつけた。このような植床を、面積約 2,750 m<sup>2</sup> に計 288 床造成し、総計 5,750 株を植栽した。ショウブの品種は、赤城、大神楽、るばたま、胡仰の春等、比較的野性種に近い約 30 種を選択した。

これらはいずれも仮植であり、3~4 年後の株分時に湿地全域の園地化を図るために配植しなおす予定である。

#### 〈その他〉

現段階の遺構保存を第 1 義とした基本方針により、来訪者の史跡理解への配慮が困難なため、遺構検出時の写真をアルミ板に焼付した説明板を設置した(図版 25 の下中)。



第 80 図 園路詳細図

また、園路の県道根白石塩釜線への取付部分に標柱を設置し、多賀城跡における位置の表示を行った(図版 25 の下右)。その他、園路沿いにベンチ等の便益施設を若干設置した。

#### 4 今後の課題

当外郭東南隅の環境整備は、前述木質遺構の保存のみを目的として実施したものである。これは、今まで遺構の遺存に係ってきたと推定される自然環境の悪化を防止するための整備であり、その根拠も種々の経験的範囲にとどまっている。

当遺構は、東北地方城柵に特徴的なもので全国的にあまり例のない貴重な遺構である。暫定的予防処置ではなく、早い時期に再度恒久的な保存処置が必要かと思われる。

また一方、現段階では来訪者の史跡理解の便に供する等の活用面での整備計画にも種々の検討すべき問題がある。

以上の事を考慮し、1978 年度より 5 ヶ年計画で当木質遺構の遺存要因に係る調査研究を実施中である。今後これらの成果に基づく、適切な保存管理法の確立や活用面での整備技法の開発により、本来の史跡整備の目的に則し、より積極的な環境整備が必要である。

## V 付章

### 1 第2次5か年計画の総括

当研究所では昭和44年創設以来、発掘調査の5か年計画を立案し、それにもとづいて発掘を実施してきた。第1次5か年計画は、すでに昭和48年度に終了している。昭和49年以降は第2次5か年計画により調査を継続してきたが、本年度をもってそれを終了した。実施状況については、各年度の発掘調査概報に記述したとおりであるが、第2次5か年計画を終えるにあたって、実施状況の全体について簡単に総括しておきたい。

#### (1) 計画の概要

当研究所が立案し、昭和48年6月2日の第8回多賀城跡調査研究指導委員会で承認された発掘調査第2次5か年計画は、つぎのとおりである。

##### 1 調査目的

宮城県多賀城跡調査研究所が行う、多賀城跡の発掘調査の目的は、多賀城跡の実体を明らかにするとともに、その保護対策に資することにある。

##### 2 全体計画

発掘調査の対象となる地域は、多賀城跡と多賀城廃寺跡の特別史跡指定地全域およびその周辺の地域等である。これらの地域に対して、周囲の開発状況あるいは遺跡の保護対策上の必要等の条件を考慮して立案した年次計画にもとづき調査を実施する。

##### 3 第2次5か年計画について

昭和49年度を初年度とする第2次5か年計画は、第1次5か年計画の成果を踏まえながら、計画を立案する。すなわち、第1次5か年計画では多賀城跡のみを対象として、中央の内城地区および外郭線上の主要個所と外郭内地域の主要地点約9,000坪について発掘調査を行い、多賀城跡の規模・構造や変遷の概略を把握することに努めた。第2次5か年計画では、多賀城跡の発掘調査を続行するとともに、都市計画により住居地域に指定されている多賀城跡南方の低地(市川橋遺跡)、および多賀城廃寺跡の従来調査できなかった周辺地域についても発掘調査を実施する。

(1) 多賀城跡……多賀城跡については、土地公有化の進捗状況および環境整備の実施を考慮しながら、多賀城中軸線上の諸地区および、台地上の遺構群を広範囲に発掘調査し、各時期の遺構群の配置や性格を究明する。

(2) 多賀城廃寺跡……多賀城廃寺跡は、伽藍中枢部の発掘調査と環境整備が完了しているが、南大門跡および僧坊跡の北方については調査が実施されていない。最近、南大門跡

推定地の土地公有化が進捗してきており、一方、僧坊跡北方の台地上で開発の計画があるため、発掘調査し、遺構の究明を行う。

(3) 多賀城外南方の低地(市川橋遺跡)……多賀城跡の南方の低湿地の地下に古代の遺物包含層が存在することは、砂押川の改修工事や高圧電線用鉄塔工事の際に墨書き土器や木製品が出土していることから知られている。しかし、従来水田となっていたため発掘調査されることができなかった。近年、これらの低地帯は都市計画の住居地域に指定され、住宅建設が予想されるため、数か所について事前調査して遺跡の状況を把握するとともに、多賀城内と城外の遺構・遺物等の比較を行う。

多賀城跡発掘調査第2次5カ年計画表

年次	発掘調査計画地区	発掘予定面積	予想経費
昭和49年度	(1)外郭南門周辺地区	19.8a(600坪)	82.5a (2,500坪) 17,000千円
	(2)外郭東部地域北部(字大畠)	33.0a(1,000坪)	
	(3)多賀城外南方低地(高崎地区)	29.7a(900坪)	
昭和50年度	(1)多賀城廬寺跡南大門推定地	19.8a(600坪)	82.5a (2,500坪) 18,000千円
	(2)多賀城廬寺跡僧坊北方地区	23.1a(700坪)	
	(3)外郭東辺南部(東北歴史資料館隣接地)	19.8a(600坪)	
	(4)多賀城外南方低地(砂押川西岸)	19.8a(600坪)	
昭和51年度	(1)外郭東部地域中央部(字作貫)	66.0a(2,000坪)	82.5a (2,500坪) 18,000千円
	(2)陸奥総社宮境内	16.5a(500坪)	
昭和52年度	(1)外郭中央地域北部(字六月坂)	29.7a(900坪)	82.5a (2,500坪) 20,000千円
	(2)外郭中央地域中央部(内城地区北方)	16.5a(500坪)	
	(3)外郭中央地域中央部(内城地区南方)	16.5a(500坪)	
	(4)多賀城外南方低地(砂押川東岸・東北本線北側)	19.8a(600坪)	
昭和53年度	(1)外郭西部地域南部(字五万崎)	62.7a(1,900坪)	82.5a (2,500坪) 20,000千円
	(2)多賀城外南方低地	19.8a(600坪)	
合計	14地区	412.5a(12,500坪)	93,000千円

#### 4 その他

玉造柵跡・桃生城跡の推定地などの宮城県内に所在する古代城柵跡や、日の出山窯跡・木戸窯跡などの多賀城に関連した生産遺跡の発掘調査については、第2次5か年計画と切り離して別個に行う。

第1次5か年計画にもりこまれていながらまったく未着手のままに終えた箇所としては1.外郭西部地域南部(字五万崎)、2.外郭東部地域中央部(字作貫)、3.北辺築地中央部などがあった。このうち3については、大野城の百間石垣状の石壁を想定したのであるが、そういった可能性がなくなったのでとりやめたものである。本計画では、第1次で実施できなかつた部分ももりこんでいる。

## (2) 計画の実施

本計画の二年次を終えた段階で、台地上の遺構群については、大畠地区、六月坂地区、金堀地区などで官衙ブロックの一端を把握した。特に大畠地区では、東門の西に門と2棟の南北棟を検出し、官衙地域の北部をとらえた。総社宮神社境内も小部分ではあるが着手した。さらに多賀城廃寺についても、懸案であった中門前方一帯の調査を実施した。

一方未着手のまま残った箇所としては、一つには外郭中央地域中央部(字作貫)がある。本地区は予定していた民家の移転が実現しなかったので調査を実施できなかつたものである。二つには、多賀城の中心線上の外郭南門周辺、中央地域北部(六月坂)、中央地域中央部(政府北方)などである。三つには、城外南方の低湿地がある。

この段階では上記のような状況であったが従来野外調査に力点が置かれ、ややもすると室内におけるデータ類や遺物等の整理が手うすになりがちであった。そして定期的に刊行を予定していた政府跡、外郭線などの正式報告書も未刊のままであった。もし、昭和51年度以降も第2次5か年計画にもとづいて従来どおり発掘を継続したならば、整理事業の立遅は決定的なものとなつたかと思われる。こういった実態に対する危惧をわれわれはようやく認識するようになり、また、昭和48年10月の第11回指導委員会においても、整理事業の正当な位置づけを行つたうえ、適正な発掘期間を設定すべきであるとの指導があつたので、第2次5か年計画の一部を改訂することとした。昭和51年6月4日の第12回指導

委員会に提出し、承認を得た改訂計画は下表のとおりである。

改訂計画表

年度	調査地区	調査面積	予想経費
昭和51年度	(1)外郭西地域南部(五万崎X28次)	23.1a (700坪)	46.2a
	(2)外郭西地域南部(五万崎X29次)	23.1a (700坪)	(1,400坪)
昭和52年度	(1)五万崎地区(30次)	19.8a (600坪)	39.6a
	(2)五万崎地区(31次)	19.8a (600坪)	(1,200坪)
昭和53年度	(1)外郭中央地域中央部(内城北側)	33.0a(1,000坪)	22,000千円
合計	11地区	247.5a(7,500坪)	105,000千円

改訂の主眼点は

A: 昨年度の第11回の指導委員会における諸委員の指導にもとづき、整理事業を正当に位置づけ、また定期的に正式報告を刊行してゆくため、調査面積、期間を限定する。

B: 外郭内の官衙ブロックを具体的に把握するため、最も可能性の高い五万崎地区に重点をおいて調査をすすめてゆく。

などであった。

本計画では、城外の低湿地、外郭中央地域中央部(字作貫)、中心線上のとくに南門と政

庁との間の部分などの調査は実施できることになる。これらについては、昭和 54 年度以降の第 3 次 5か年計画で具体化してゆくこととした。

以上、計画にはやや曲折があったが、実績は下表のとおりである。

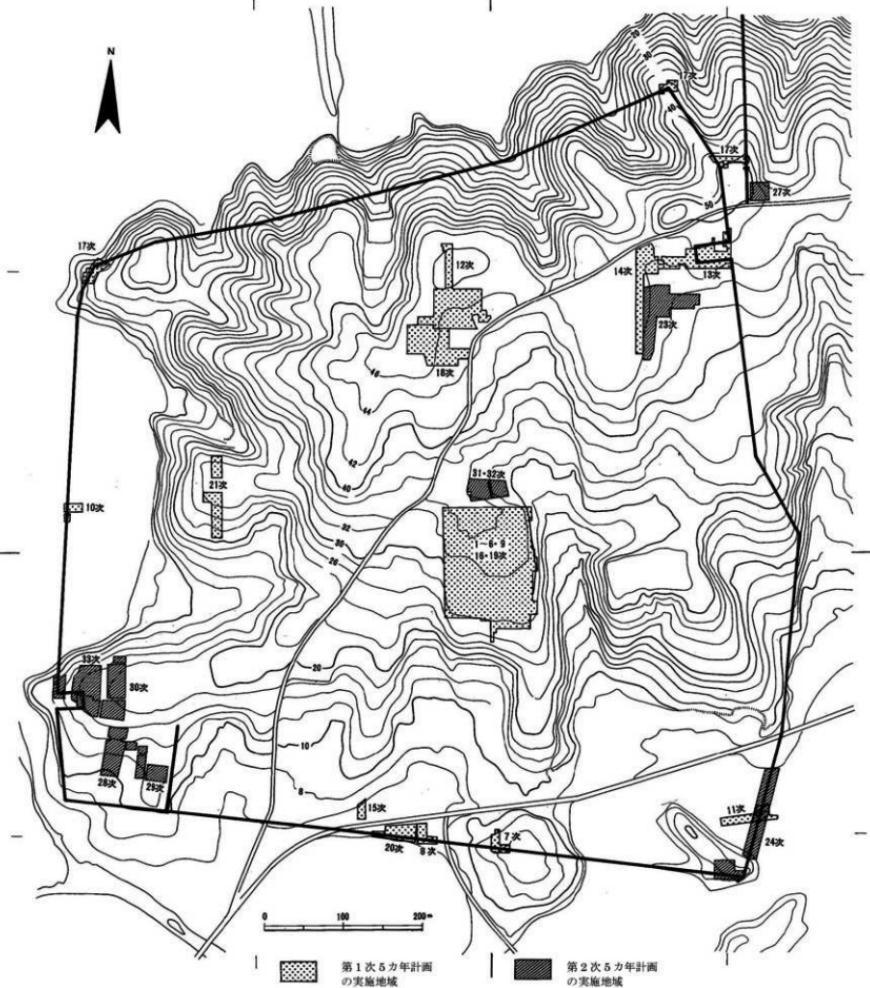
第 2 次 5か年計画実績表

	発掘調査地区	発掘面積		予算	備考
昭和 49 年度	(1) 外郭東地域北部(字五万崎)	33.0a(1,000坪)	82.5a (2,500坪)	17,000千円	宮城県事業研究所定数 6名
	(2) 外郭東南隅(字五万崎)	26.4a(800坪)			
	(3) 多賀城廃寺南大門推定地	23.1a(700坪)			
昭和 50 年度	(1) 多賀城廃寺南大門推定地(25次)	23.1a(700坪)	82.5a (2,500坪)	22,000千円	宮城県事業研究所定数 6名
	(2) 多賀城廃寺南大門・東邊築地跡(26次)	23.1a(700坪)			
	(3) 妙社宮西隣市川大久保地区(27次) :緊急調査として	6.6a(200坪)			
昭和 51 年度	(1) 外郭西地域南部(字五万崎)	18.0a(545坪)	38.0a (1,152坪)	22,000千円	宮城県事業研究所定数 6名
	(2) 外郭西地域南部(字五万崎)	20.0a(606坪)			
昭和 52 年度	(1) 外郭西地域南部(字五万崎)	25.0a(756坪)	37.0a (1,121坪)	22,000千円	宮城県事業研究所定数 6名
	(2) 政府北方地域(字五万崎)	12.0a(364坪)			
昭和 53 年度	(1) 政府北方地域(字五万崎)	8.5a(258坪)	26.5a (803坪)	25,000千円	宮城県事業研究所定数 6名
	(2) 桧郭西地域南部(字五万崎)	18.0a(545坪)			
合計	12 地区	230.2a(6,975.8坪)		107,000千円	

すなわち計画段階での発掘調査面積は 11 地区 247.5a であったのに対して、実際に実施した調査地区的総面積は 230.2a(対計画比 93.0%)であった。しかし当初計画の 14 地区 412.5a と実績とを対比するならばその達成率は 55.8%となり、当初の計画自体やや実現困難なものであったと認めざるを得ない。なお、単位面積あたりの費用は、1 m<sup>2</sup>あたり 4,648 円(坪当り 15,338 円)であった。

### (3) 第 2 次計画 5か年間の成果

5か年間の成果としては、第 1 に城内の台地上の遺構群を把握したことを挙げることができよう。まず外郭西地域南部(字五万崎)についてであるが、本地区は南北約 200m、東西約 150m の範囲である。その西および南は多賀城の外郭築地が区画しており、また、東側にも築地状の高まりがある。一方、中央部にも東西方向の築地状高まりが認められた。これらの築地状の高まりでとり囲まれた本地区の南半は東西 130m、南北 120m の規模であったため、政府にも匹敵する一区画ではなかろうかと推定されていた。調査の結果、中央部の高まりは近世以降の土手であり、本地区を画するものではないことが判明した。本地区に対する当初の予測は大きく狂うこととなつたが、一方、中央部やや西寄りに、東門と同様城内に入りこんだ西門が発見され、この五万崎地区は西門およびそれに通ずる道路状遺構により、大きく南北に二分されて利用されていることを把握することができた。また北半には、第 III・IV 期の遺構群がみられた。それに対し南半では、これまで発見例の少



第81図 発掘調査地域

ない第V期の遺構群が検出された。このように本地区では、南半と北半とで時期を異にする利用がなされていたことを知ることができたのである。両者は共に官衙風の遺構群であるが、南半部ではそれらに工房跡等も加わっていた。

つぎに、外郭東地域中央部(字大畑)では東門を経て城内に入った間近な位置に奈良時代の官衙ブロックの一端を把握することができた。すなわち北側の道路状遺構に面した、奈良時代と考えられる八脚門および、規則的に配された二棟の南北棟を検出したのである。また、本地区では、先の第1次5か年計画で実施した第13・14次調査の成果をも併せ考へるならば、平安時代以降は、竪穴住居が密集して営まれるようになる事も明らかになった。このように本地区では、奈良時代と、平安時代とで、その在り方が大きく異なる事をとらえることができた。

さらに政庁の北に隣接する地域では、本概報に詳述したような興味深い事実を知ることができた。

台地上の遺構群に関しては上記のとおりの成果をあげることができた。

5か年の成果の第2としては、懸案であった多賀城廃寺中門前方地域の実体を把握したことを挙げることができる。多賀城廃寺は、中枢部が従来の調査で明らかにされていたが、その周囲の実体は判然としていなかったのである。調査は中門の前方および、東南方の広範囲を対象として実施したが、南大門や伽藍域を画す築地等の施設は何ら発見されなかつた。多賀城廃寺には本来、伽藍の四至を区画する施設が存在しなかつたのではないかと推定されるにいたつたのである。

また5か年の調査で多量の瓦、土器等の遺物が出土した。これらの中で特に注目すべきものとしては漆紙文書がある。これらは、大半が第1次5か年計画の調査実施中に発見されたものであるが、近時、遺存のプロセスを解明し、また100点を越す資料の解読に成功したものである。これらは内容的にも豊富で具注暦、売進文書、請求文書、田籍関係文書など興味深いものが多い。さらに、外郭東辺南端の低湿地の調査では50点に及ぶ木簡が発見された。これらの中には「急々律令」と記された呪術的意味あいのものや、白河団から、兵士の動員を示す木簡も含まれていた。

このように多賀城の台地上の遺構群の実体、多賀城廃寺の四至に関する新知見などを把握することができた。第2次5か年計画は90%以上達成することができたといえよう。ただし、本計画は、先にもふれたとおり、中途で改訂を余儀なくされたものであって、当初の計画にまで立ち戻って考えるならば、いくつかの問題点が残ったといわざるを得ない。その内の最も大きな事柄は、城外の調査がまったく手つかずのままに終ってしまったことであろう。城外とくに前面は、都市計画法の市街化区域であるため、小規模な宅造などの

開発が急速に進みつつある。こういった状況を放置するならば、丘陵から低湿地にまたがっている多賀城の立地上の特徴が完全に失われてしまうことになる恐れも十分にある。この点に関し、われわれは「調査研究を実施し、多賀城の保護対策に資する」の研究所設立趣旨に立ちかえり、今後の第3次5か年計画に十分にもりこんで、積極的に対処してゆきたいと考えている。

## 2 調査成果の普及と関連研究活動

### (1) 説明会の開催

当研究所では調査成果を広く一般に還元するため折々説明会を開催しているが、本年度は解説に成功した漆紙文書に関して6月24日(土)、25日(日)の両日にわたって、東北歴史資料館講堂を会場に、説明会を開催した。

説明者 研究第一科長 桑原滋郎

研究員 平川南

### (2) 伊治城跡推定地の発掘調査

多賀城を十分に理解するためには、多賀城のみならず関連する遺跡をも解明してゆく必要がある。そこで当研究所では多賀城関連遺跡調査第1次5か年計画を立案し、昭和45年度を初年度として調査に着手している。本年度はその最終年次として、宮城県栗原郡築館町城生野に所在する伊治城跡推定地について7月3日より8月4日まで発掘調査を実施した。なお11月11日から13日にかけて、奈良国立文化財研究所の協力を得て電気探査を実施した。詳細は『伊治城跡II——昭和53年度発掘調査報告——』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊)当研究所1979年3月を参照されたい。

### (3) 他機関への発掘調査協力

#### 1 城生遺跡

主体者 中新田町教育委員会

所在地 宮城県加美郡中新田町

期間 昭和53年4月・5月

協力所員 桑原滋郎、高野芳宏

#### 2 城輪棚遺跡

主体者 酒田市教育委員会

所在地 山形県酒田市城輪

期間 昭和53年7月・9月

協力所員 後藤勝彦(調査委員)

3 鹿原遺跡

主体者 宮城県教育委員会

所在地 宮城県加美郡小野田町

期間 昭和 53 年 8 月

協力所員 鎌田俊昭

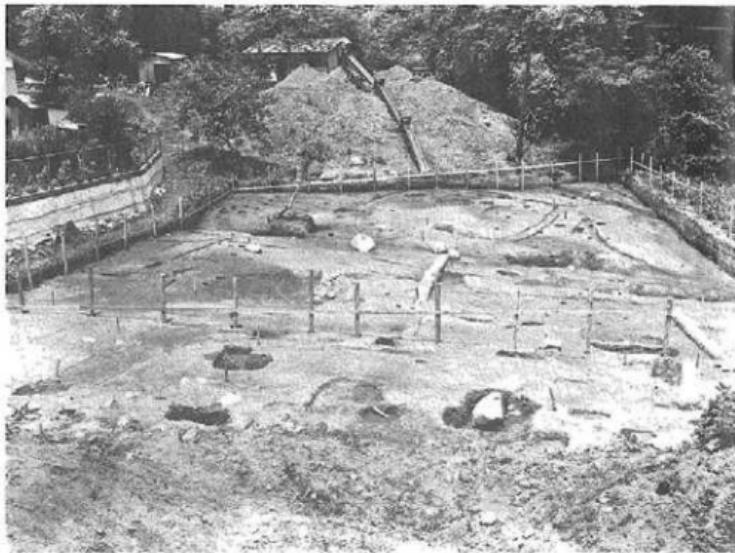
4 関和久遺跡

主体者 福島県教育委員会

所在地 福島県西白河郡泉崎村関和久

期間 昭和 53 年 10 月・11 月

協力所員 後藤勝彦、桑原滋郎、進藤秋輝、平川南、白鳥良一、鎌田俊昭、高野芳宏  
古川雅清



図版1 第32次調査全景

上 西から

下 南から

図版 2

上 第 31 次調査  
SB1013 建物跡  
(東から)



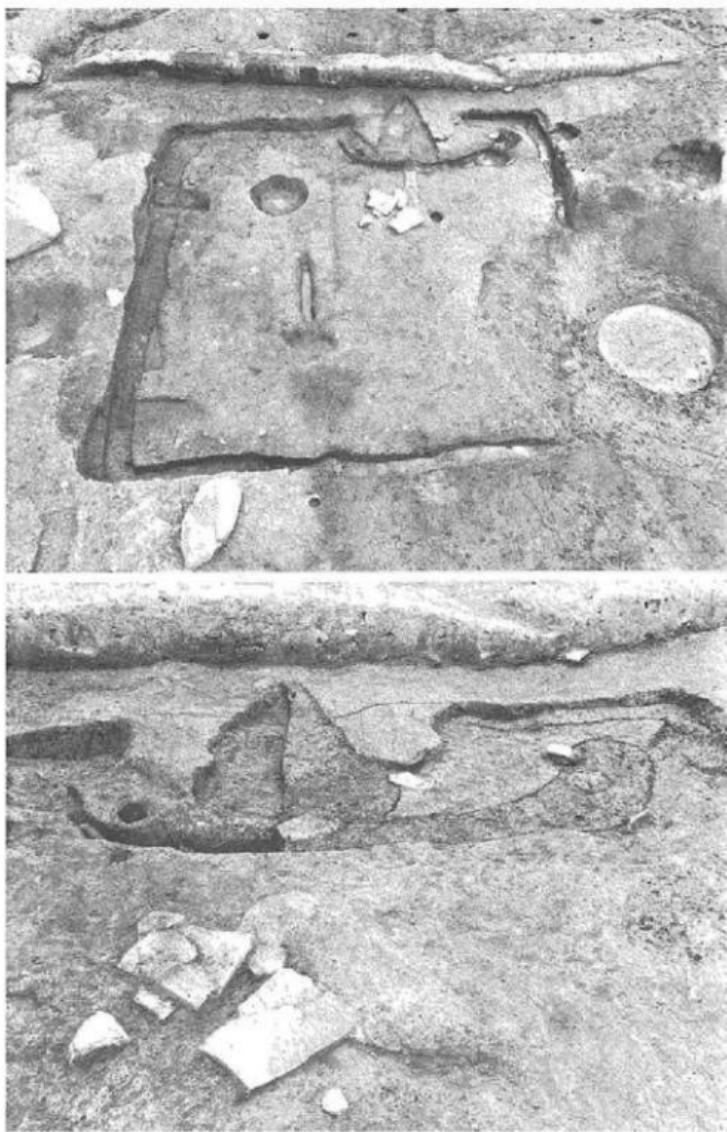
下 第 32 次調査  
SB553 と SB1013  
建物跡(東から)





圖版 3 第 32 次調查

上 SB553 建物跡柱穴 下 SB1013 建物跡柱穴



図版4 第32次調査

上 SI1063 住居跡(西から) 下 SI1063 住居跡カマド細部(西から)

図版 5 第 32 次調査

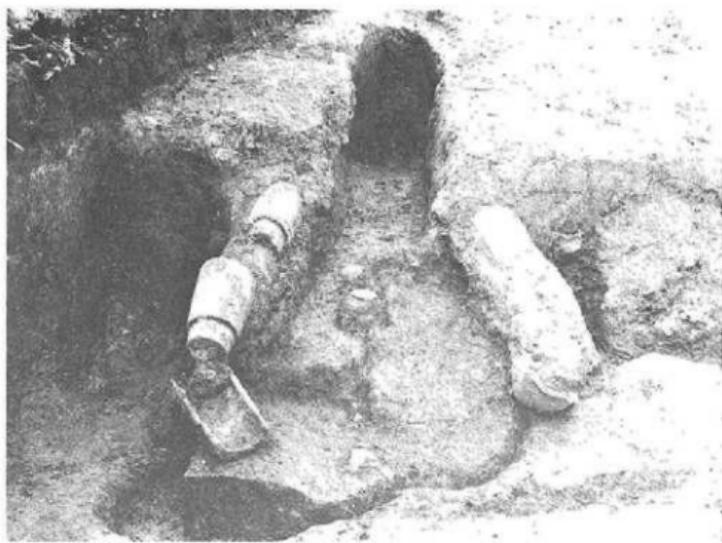
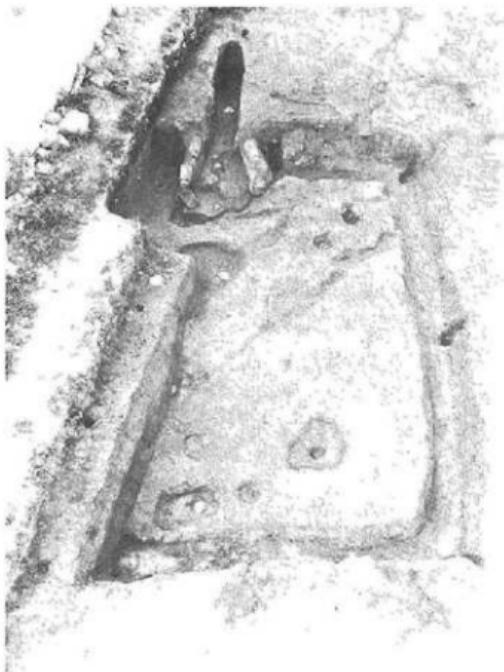
上 SI1065 住居跡

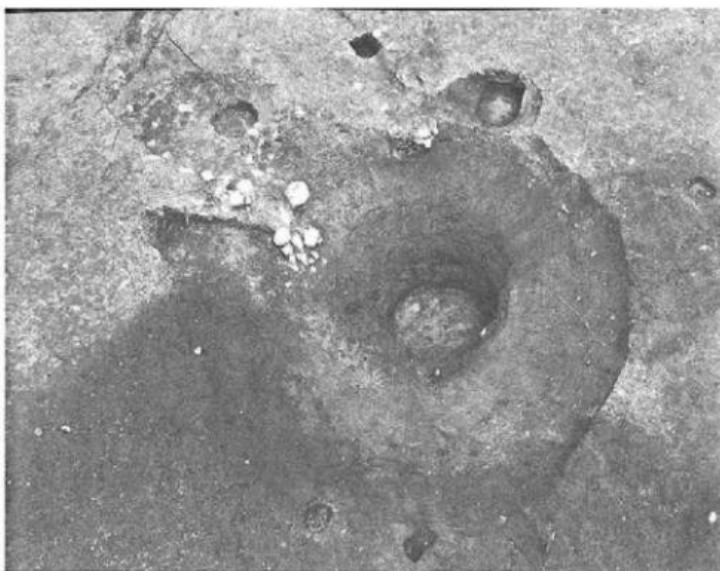
(南から)

下 SI1065 住居跡

カマド細部

(南から)

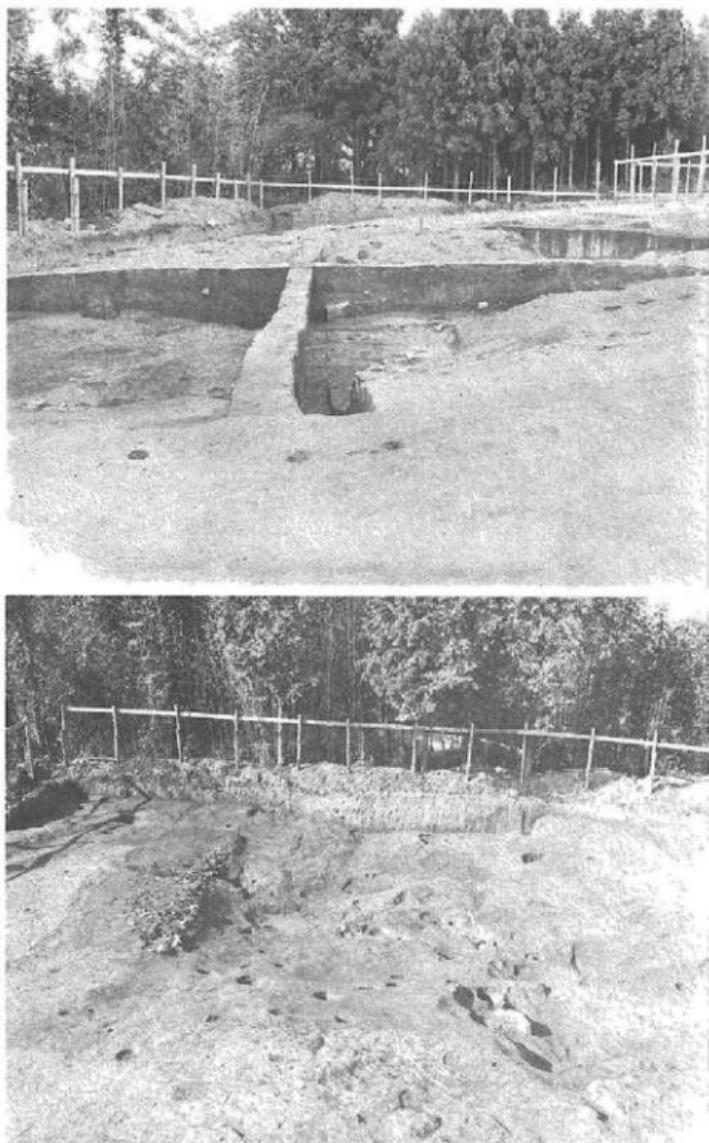




図版 6 第 32 次調査

上 SE1066 井戸跡(西から)

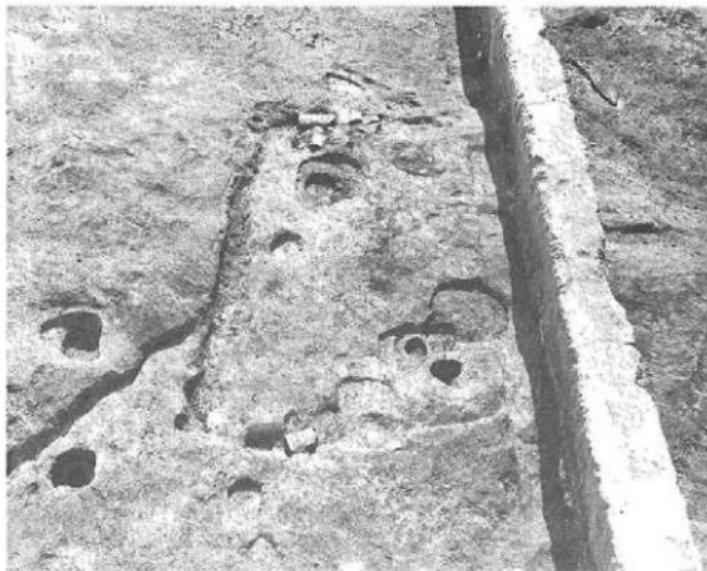
下 SK1060 土壌跡(東から)



図版7 第33次調査地区

上 SK1076 土壙跡(南から)

下 SK1076 " (東から)



図版8 第33次調査地区

上 SF1077 築地基礎地業(東から)

下 SI1078 壁穴住居跡(北から)



図版9

第33次調査地区

上 SB1081,1083

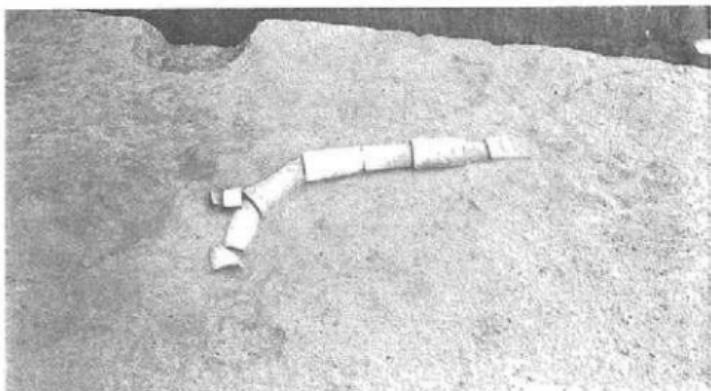
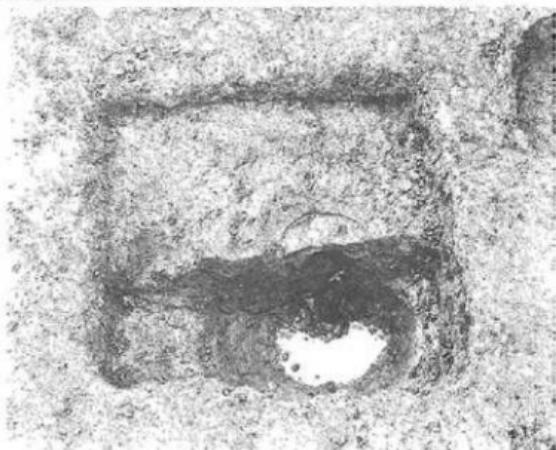
建物跡(南から)

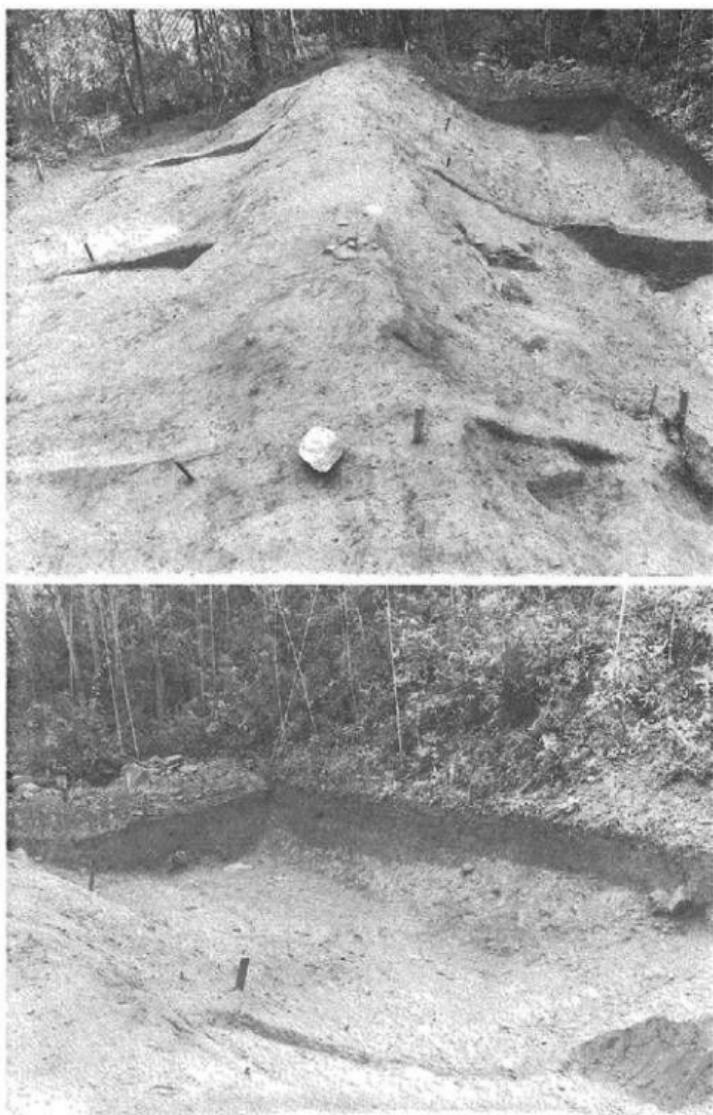
中 SB1083 建物跡の

柱穴断面(西から)

下 SX1084 瓦敷暗渠

(南から)





図版 10

上 SF1089 西辺築地(南から)

下 SD1096 溝跡(南から)



図版 11 第 32 次調査

SI1063 住居跡出土土器

1,6 土師器、2~5 須恵器

1 第 22 図 4

2 第 21 図 2

3 第 21 図 1

4 第 22 図 3

5 第 22 図 1

6 第 20 図 3



1

2



3



4



5

### 図版 12 第 32 次調査

SI1065 住居跡出土遺物

- 1,2 須恵器甕内面漆付着
- 3 須恵器杯、4 土師器杯
- 5 土師器甕 カマド支脚

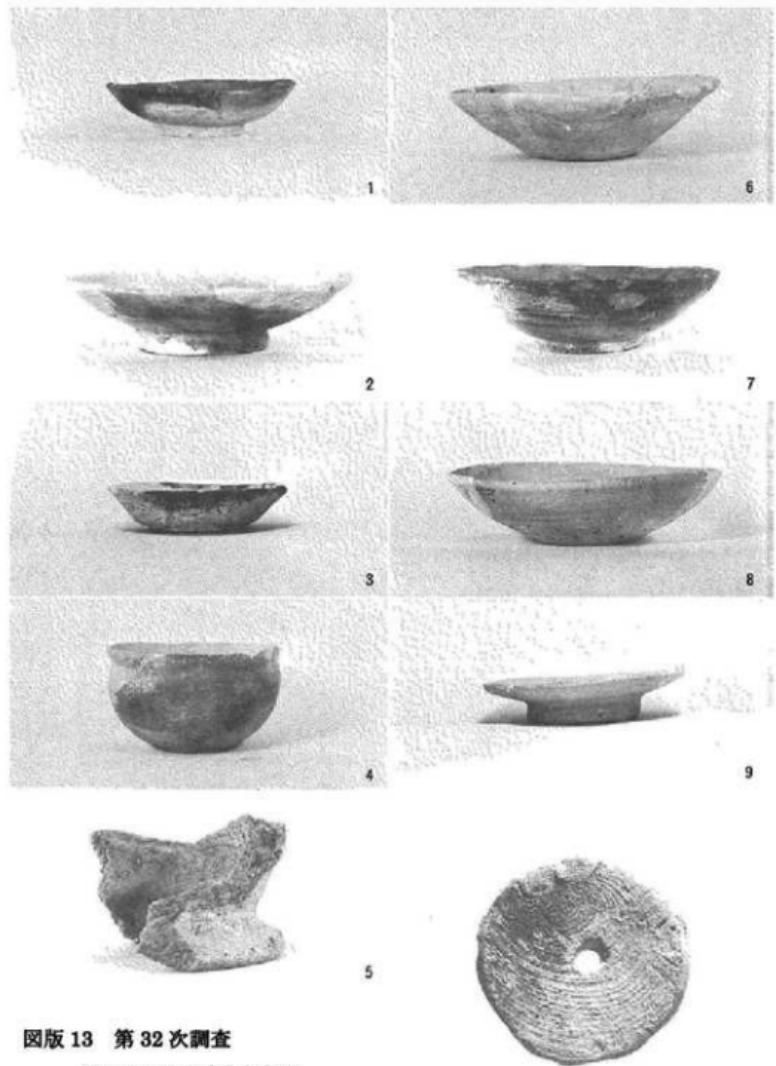
1 柱穴埋土

2 埋土IV層

3 第 23 図 2

4 第 23 図 4

5 第 23 図 6



図版 13 第 32 次調査

SE1066 井戸跡出土土器

- |             |              |
|-------------|--------------|
| 1 第 16 図 6  | 6 第 17 図 11  |
| 2 第 16 図 17 | 7 第 17 図 17  |
| 3 第 16 図 13 | 8 第 18 図 1   |
| 4 第 17 図 13 | 9 第 18 図 3   |
| 5 第 17 図 18 | 10 第 17 図 15 |

10



1a



1b



2a



3



図版 14 第 32 次調査

2b

1 漆膜 第 6 層

2 第 24 図 2 須恵器

3 第 33 図 2 須恵器

4 鉄製品

a 第 26 図 4、b 第 26 図 3、c 第 26 図 2

5 第 26 図 1 土錐

6 第 24 図 3 須恵系土器



5



6



1



5



2



6



3



7



4



8



9

### 図版 15 第32次調査

#### 各堆積層出土土器

1,3,5,7,8 須恵系土器、4,6 土師器、9 須恵器、

2 白磁

- |         |         |
|---------|---------|
| 1 第25図1 | 6 第27図2 |
| 2 第25図6 | 7 第27図4 |
| 3 北区第2層 | 8 第27図7 |
| 4 第25図9 | 9 第27図9 |
| 5 第25図8 |         |



3

1a

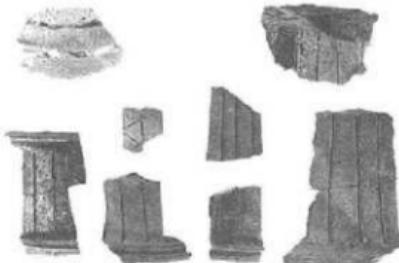


4

1b



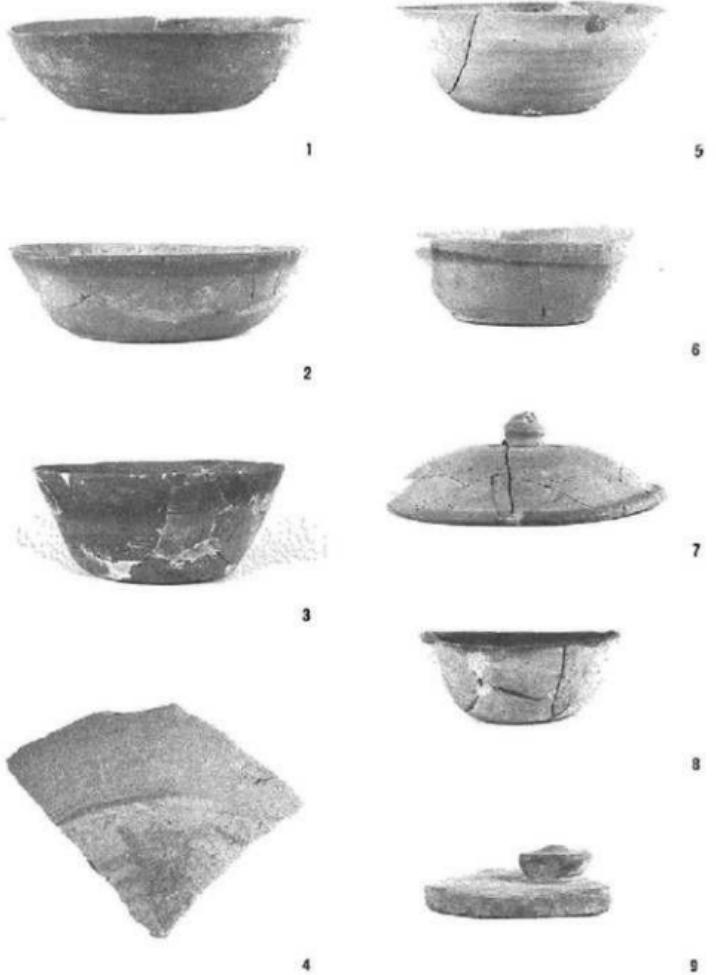
5



2

#### 図版 16 第 32 次調査

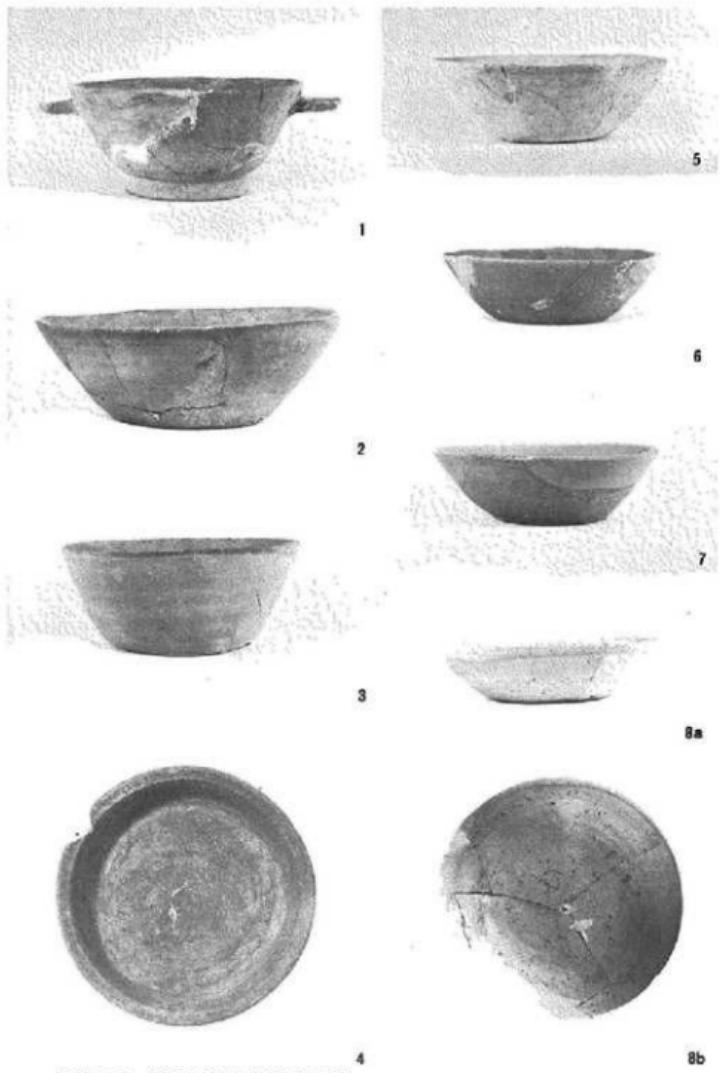
- 1 第 28 図 3 文様壇
- 2 各地出土 円面硯
- 3 第 32 図 10 陰刻文字瓦
- 4 第 32 図 3 ヘラ書き文字瓦「玉」
- 5 第 33 図 1 風字硯



图版 17 第 33 次調查出土土器

1~4 SK1076 土壙第 8 層、5~9 第 5 層

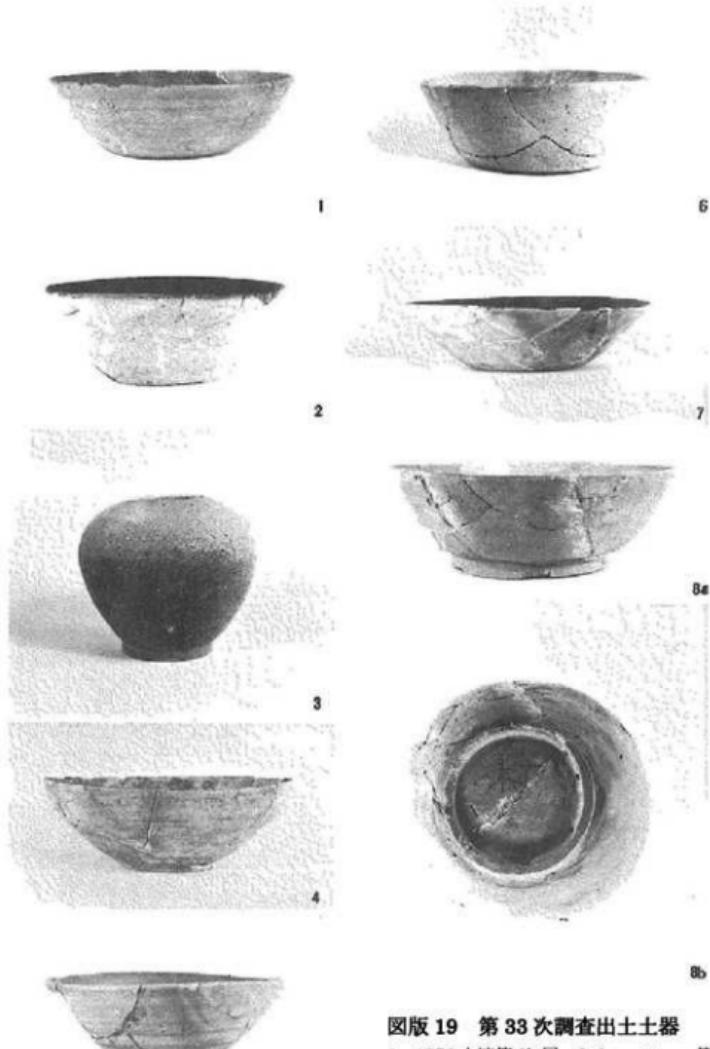
1 第 51 図 1	2 第 51 図 2	3 第 51 図 4	4 第 51 図 12 墨書「」
5 第 53 図 1	6 第 53 図 2	7 第 53 図 7	8 第 53 図 5
9 第 53 図 9			



国版 18 第 33 次調査出土土器

1~4 SK1076 土壌第 4 層、5~8 同土壌第 3e 層

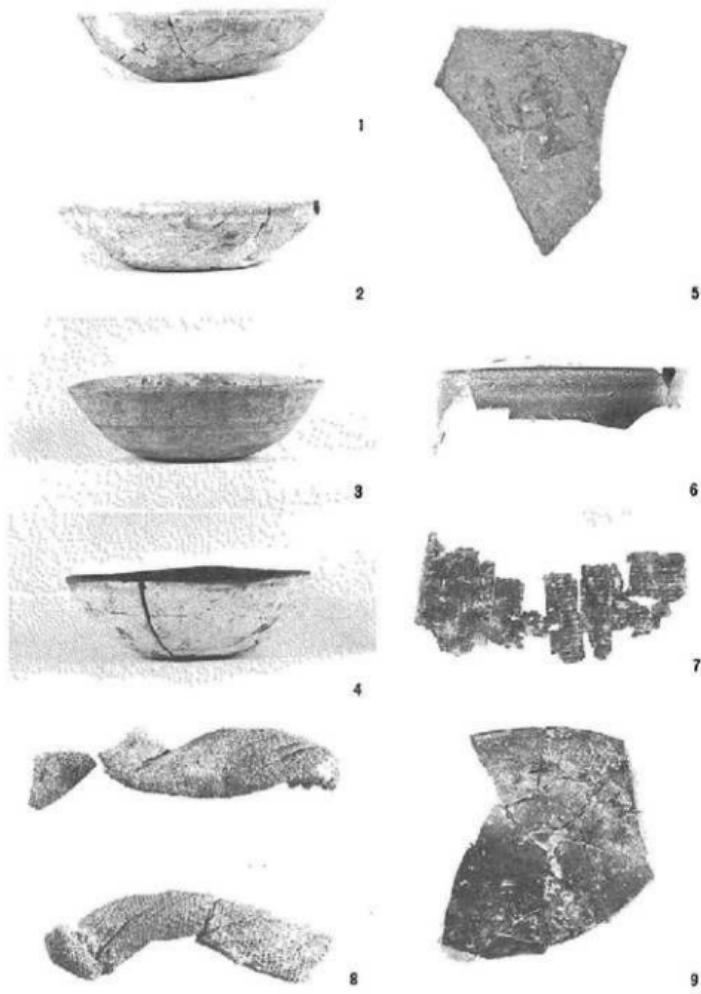
1 第 55 図 8 2 第 55 図 2 3 須恵器杯 4 第 55 図 5  
5 第 57 図 13 6 第 57 図 8 7 第 57 図 12 8 第 57 図 10(ヘラ描き)



図版 19 第 33 次調査出土土器

1 第 1076 土壌第 3b 層、2・3 " 第 3c 層  
4~7 " 第 3a 層、

1 第 48 図 4 2 第 58 図 14 第 58 図 2  
4 第 58 図 1 5 第 58 図 3 6 第 58 図 4  
7 土師器杯 8 第 64 図 3 ヘラ描き「林」



図版 20 第 33 次調査出土遺物

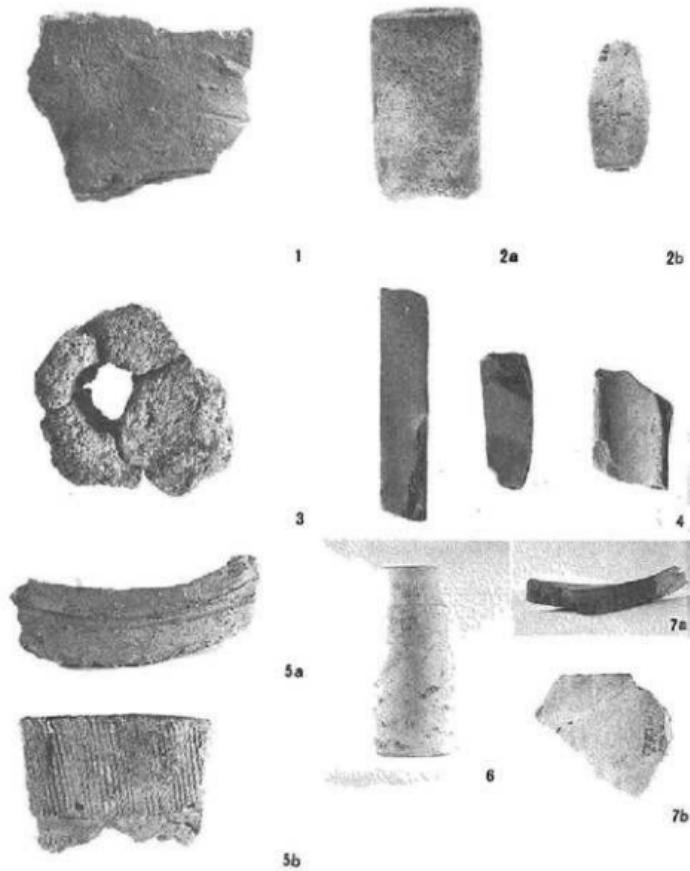
1~4 SK1092 土壌、5 表土、6 SK1076 土壌第 5 層、

7,8 SK1076 土壌第 4b 層、9 同第 8 層

1 第 68 図 5、2 第 68 図 9、3 第 68 図 12、4 第 68 図 10

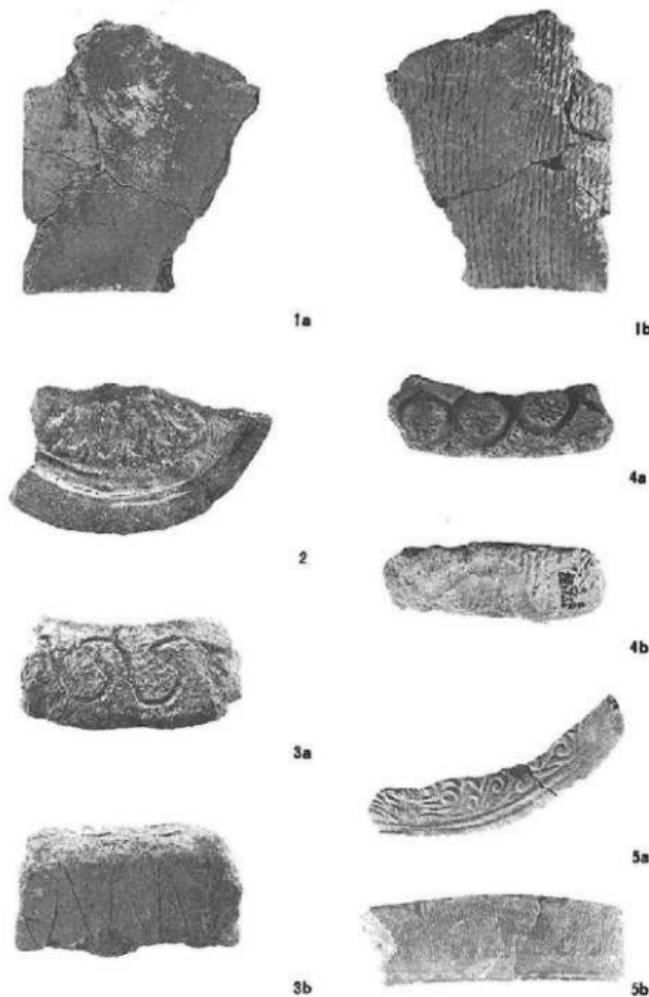
5 墨書き土器「団」、6 円面硯第 53 図 11、7 漆膜、8 漆をこした麻布

9 漆の付着した土師器第 52 図 11



図版 21 第 33 次調査出土遺物

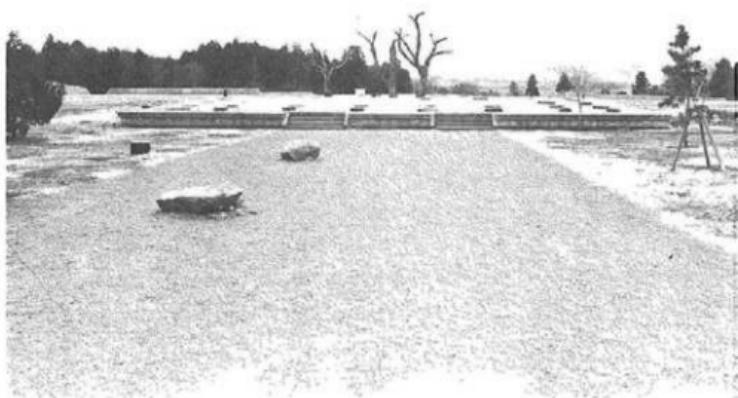
- |                             |                          |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1 中世陶器 SK1098 土壌            | 6 SX1084 瓦敷暗渠施設瓦 第 63 図下 |
| 2 土鍤 a 第 59 図 2             | 7 SX1090 積土の刻印瓦 第 67 図 2 |
| b 第 59 図 1                  |                          |
| 3 フイゴの羽口                    |                          |
| 4 砥石、左 SK1092 中表土 右第 73 図 2 |                          |
| 5 軒平瓦 640 SF1077 築地基礎地業中    |                          |



図版 22 第 33 次調査出土瓦

1 SK1076 土壙、2~5 SD1096 溝

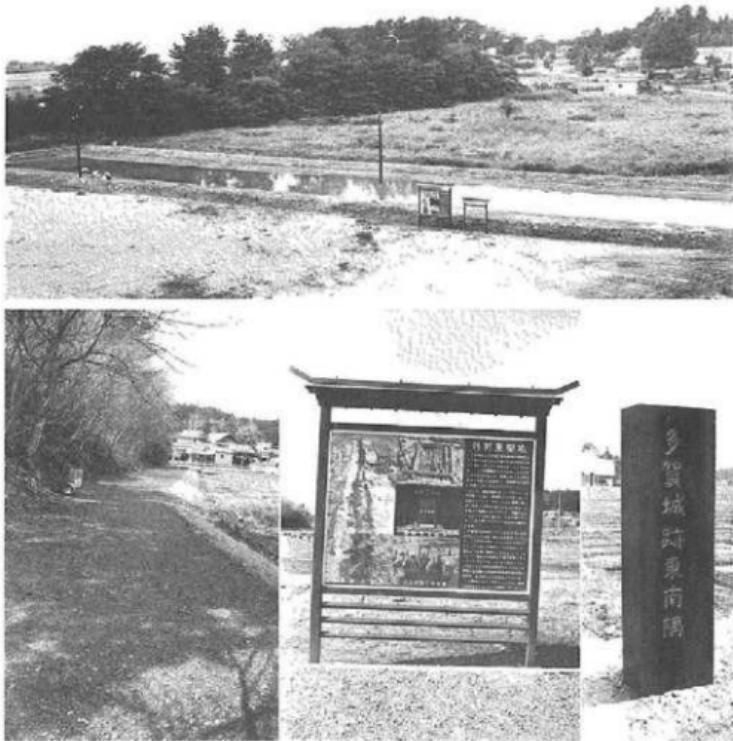
1 第 51 図 1、2 第 69 図 1、3 第 69 図 13、4 第 69 図 10、5 第 70 図 5



図版 23 上 政府跡、下 東門跡



図版 24 上 六月坂地区、下 外郭南辺築地跡



図版 25

上 外郭東南隅地区

下左 園路(新設)

下中 説明版

下左 標柱

---

宮城県多賀城跡調査研究所年報 1978

多 賀 城 跡

—昭和 53 年度発掘調査概報—

昭和 54 年 3 月 25 日印刷

昭和 54 年 3 月 31 日発行

編集者 宮城県多賀城跡調査研究所

発行者 宮城県文化財保護協会

仙台市本町三丁目 8-1

宮城県文化財保護課内

印刷所 小泉印刷株式会社

---